Devil May Cry ～伝説の魔剣士と英雄の息子～

バオー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ　～伝説の魔剣士と英雄の息子～

【Ｎコード】
Ｎ８２９７Ｕ

【作者名】
バオー

【あらすじ】
　ある日ダンテの元にレディから一つの依頼が届けられる。その内容は日本の麻帆良学園都市で教師をしろという無茶な依頼。レディの勧め（脅迫）もあり渋々その地へ赴くことになったダンテが出会ったのは、人のためにその力を使う魔法使い達だった。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

この作品は魔法先生ネギまとデビルメイクライのクロスオーバー作品です。二つの作品は世界観を同じくしている関係上、原作との相違点があります。また、原作において明確にされていない設定を独自に解釈している点もあります。それが許せないと言う方は、ブラウザの戻るボタンを押すことをお勧めします。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ　～伝説の魔剣士と英雄の息子～

０／

「麻帆良学園都市？」

ダンテが好物のオリーブ抜きのピザを口にしながら発したのは、そんな気の無い一言だった。

「ええ。日本の埼玉県に位置する巨大な学園都市。百年以上も前に、ヨーロッパの街並みを参考にして創設されたと言われてるわ」

古臭い机に腰掛けて話す妙齢の女性は、まるで世間話をするかのように語った。

彼らが話している場所は、彼が仕事場と称している廃墟じみた建物『デビルメイクライ』の一室。ビリヤード台、ジュークボックスなどが乱雑と置かれ、仕事場の体裁をとっていない。周囲の目に無頓着な彼らしい内装だった。

「日本？海の向こうの島国の話か？ハッ、らしくないぜレディ。世間話するなら仕事の一つでも持ってくるんだな」

最後の一枚を食べ終えたダンテは、食後のデザートとばかりにその隣に置いてあったストロベリー・サンデーに手を伸ばす。しかし、あと少しで手が届くというところで妙齢の女性――――レディと呼ばれた女性にそれをかっさらわれてしまった。

「関係あるとしたら？」

「あん？」

レディの意味深長な一言に、ダンテは手を伸ばしたままで訝しげに彼女を見上げた。

「私があなたに持ってきた仕事……それに関係あるとしたら？」

どう？聞いてみる価値はあるでしょ？と、彼女は意地悪く笑った。

◇

レディは言う。麻帆良学園都市は、表向き学術機関だが、実態は魔法使い達によって建設されたと言われ、一般人に紛れ暮らしているらしい。

「そいつは夢のある話だな。で、それが仕事と何の関係があるんだ？」

机に肘をついたまま黙って聞いていたダンテは、椅子の背凭れに寄り掛かると肩を竦めた。

魔法使いが暮らす街があるのは驚いたが、彼にとってはそれだけだ。そのことと仕事に何の関係があるのか、彼には分からなかった。

全く興味のなさそうな彼に、レディは告げる。

「何って、そこで教師をしてもらうのよ」

――は？――

ダンテは、レディが言ったことの意味をすぐに理解することができなかった。

教師、先生、ティーチャー。呼称は様々あるが、意味はどれも『学問を教える人』のことである。言うまでもなく、彼は義務教育すら満足に受けていない。人にものを教えることなどできるはずがないのだ。

「……レディ、その年でボケたか？それともジョークのつもりか？それなら悪いな、笑ってやれなくて」

「いいえ。私はボケてもいないし、ジョークを言ったわけでもないわ」

冗談だと思い皮肉気に言葉を返すも、予想に反するレディの真面目な表情に、ダンテは次の冗談を紡ぐはずの口を閉ざした。

彼女が言うには、日本には関東魔法協会と関西呪術協会の二つの組織があり、表向きは不干渉を貫いているものの、裏では関東魔法協会を快く思わない関西呪術協会の過激派による妨害行為がしばしば行われているらしい。当然魔法使い達がこれを防いでいるわけだが、正直手が足りないのが現状。そこで外部から援軍を呼ぶことになり、彼に白羽の矢が立ったというわけだ。

――まあ、話は分かったが――

レディの話になるほどと思うも、ダンテはやはり乗り気ではなかった。極東の、しかも魔法使い同士のいざこざにどうして自分が巻き込まれなければならないのか。

「残念だが、そいつはお断りだね。悪魔ならともかく、魔法使い同士のケンカに付き合うなんてまっぴらごめんだ」

肩を竦めてかぶりを振ると、ダンテはＲ－１８指定の雑誌を手に取って読み始めた。もうその話はここで終わりとばかりに。

しかし、そうは問屋が卸さなかった。レディは机から身を乗り出

して雑誌を奪い取ると、意地悪い笑みを浮かべながら言った。

「あら、そう？じゃ、返してもらおうかしら。今まで溜まりに溜まったツケをね」

「……おいレディ」

そう。ダンテとレディはただの仕事仲間ではない。『週休六日主義』を公言して憚らないほどずぼらな性格の彼は、事あるごとに彼女から金を借りており、一度に返せないほどに借金が膨れ上がってしまっていた。

つまり、彼女の最終手段『借金返済要求』によって、彼は強制的にこの仕事を受けざるを得なくなったのである。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

初めまして、バオーと申します。不定期更新になりますが、よろしくお願いします。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１　ダンテ、麻帆良を訪問する

１／

寒さの厳しい一月の寒空の下、正午を迎えた麻帆良学園都市中央駅。麻帆良学園都市の玄関口とも言われる駅のホームに、一人の男が降り立った。

日本では人目を引く銀髪、深紅のコートにギターケースを背負った大柄の男。言うまでもなくダンテである。彼は依頼人である近衛近右衛門なる人物に会うために、飛行機や電車などの交通機関を乗り継いでここまでやってきたのだ。

依頼人の話では迎えを寄越すという話だったが、いつ到着するのかも伝えてないのに迎えを寄越すとはどういうことなのか、彼には理解できなかった。携帯を持たず、公衆電話に使う小銭すら準備してなかった彼が言うのも何なのだが。

依頼人が言うならそうなのだろうと結論づけると、迎えが来るまでの間、彼は周囲をゆっくり眺めることにした。

ヨーロッパの街並みを再現したであろう風景は、彼が『デビルメイクライ』を構えるスラム街と違い、清潔の一言に尽きる。また、街を歩く人々の活気に満ち溢れた喧騒も新鮮に感じられ、彼を飽きさせることはなかった。これが朝の通行ラッシュの大混乱であれば、

彼の反応もまた違っていたであろう。

後日、彼は朝の通行ラッシュを目の当たりにして驚き目を丸くすることになるのだが、それはまた別の話。

「君がダンテ君かい？」

五分ほど待っただろうか。後ろから英語で話しかけられたので、ダンテは無言で振り向く。そこに三十代中頃だろうか。髪を短く刈り、眼鏡をかけ無精ひげを生やした男性が柔和な笑みを浮かべて立っていた。

「確かに俺はダンテだが、そういうあんたは？」

「ああ、すまない。自己紹介が遅れたね。僕はタカミチ・T・高畑。タカミチって呼んでくれ」

そう言うと、タカミチはダンテに右手を差し出した。アメリカの流儀に合わせたのだろうか。握手を求めてきたので、彼は当然のようにタカミチの手を取り握手を交わした。

「いろいろ聞きたいこともあるだろうけど、今は学園長に急ごう。歩きながらになるけど……いいかな？」

暗に、聞きたいことがあれば道中で聞けと言っているらしい。そのことに別段不満も何もなかったので、ダンテは笑みを浮かべながら答えた。

「オーケー、その方が退屈しなくてすみそうだ」

麻帆良学園中等部への道すがら、ダンテは隣を並んで歩いているタカミチにそれとなく目を向けた。

高畑・T・タカミチ。麻帆良学園中等部の英語教師にして、関東魔法協会所属の魔法使い。彼が道中で語ったのは、そんな取り留めのない、しかし重要な情報だった。助っ人とは言え、外部の人間にあっさりと自分が魔法使いであることをバラす辺り、人の良さが窺える。

だがそれよりも、彼が魔法使いだと知らされたことで、ダンテの心の中で渦巻いていた疑問が再燃した。

――早いよな。いくらなんでも早すぎる――

ダンテが駅に到着してからわずか五分。事前に到着時間を伝えたわけでもなく、到着の連絡をしたわけでもない。にもかかわらず、タカミチの迎えはまるで到着時刻を初めから分かっていたかのような正確さ。疑う余地は十分である。

おそらく魔法を使って足取りを追っていたか、もしくは成田空港到着時点から尾行でもしていたか。　もし後者だとするなら、彼は只者ではないだろう。ダンテの研ぎ澄まされた五感にも気取られずに尾行するほどの手練となれば、それは並み大抵の腕前ではない。

◇

丁度女子中等エリアに入ったところで、彼は初めて口を開いた。

「なあ、一つ聞いてもいいか？」

「何だい？」

これまで道すがら施設の説明をしていたタカミチは、突然の質問にも嫌な顔をせず快く応じる。

「迎えが妙に早かった気がするんだが……まさかあんた――――」

尾けてたんじゃないか？と尋ねるも。

「ははは、違うよ。君が学園に入ってきたのが分かっただけさ」

「分かる？」

タカミチ曰く、麻帆良学園都市には全域を覆うように魔法による結界が設置されており、外部からの侵入者を防ぐ仕組みになっているらしい。また、仮に侵入されたとしてもその異常を探知することができ、迅速な対応が可能なのだとか。

流石は数千人の魔法使いを有する学園都市。外部からの対策は万全といったところか。

「なるほどね……」

ダンテが思っていたより、麻帆良学園の防備は固かったらしい。

胸の前で腕を組むと、右手で顎を擦りあげながら唸った。

「分かってもらえて何よりだ……っと、着いたよ。ここが麻帆良学園中等部の校舎さ」

そうこうしているうちにたどり着いたのは、レンガ造りの趣ある建物。そう、ここがダンテの仕事の舞台となる場所、麻帆良学園である。

校舎に入っていくと、二人は学園長室に向かう。その途中、昼休みを迎えたであろう生徒達が廊下を駆けていく。当然ここの教員であるタカミチに挨拶をしていくのだが、その隣を悠然と歩くダンテに目を向けては困惑する。留学生や外国人の教師の多い学校だが、赤コートにギターケースという、学校に似つかわしくない彼の恰好に違和感を覚えたらしい。その場は黙って通り過ぎていくも、友達とヒソヒソ話しているのが振り返るまでもなく感じられた。

そんなことがありながらも、二人は学園長室の前までたどり着いた。タカミチがノックをすると、中から「入ってきなさい」と老齢を感じさせる声が聞こえてきた。

「学園長、失礼します」

扉を開けて先に入っていくタカミチに続き、ダンテもつかつかと中に入る。

まず目に入ったのは、二脚の来客用ソファとテーブルが一台。さらに両側には書棚が並び、ガラス戸越しに本が確認できる。日本語表記なので内容は分からない。

そして最後に目についたのは、部屋の奥に鎮座する年代を感じさせる書斎机。そこに座る老人こそ、今回の仕事の依頼人である近衛

近右衛門……のはずなのだが――――

「ダンテ君を連れてきました」

「うむ、御苦労じゃったの高畑君」

タカミチがそう報告すると、近衛学園長は彼の労をねぎらい、そのやや後方に立つダンテに視線を向けた。

「初めましてダンテ君。ワシの名は近衛近右衛門じゃ。遠路はるばる、よく来てくれた。歓迎するぞい」

近衛学園長は歓迎の言葉を贈る。しかし、それに対してダンテは何の反応も返さなかった。アイスブルーの瞳を学園長に向けたまま、沈黙を貫いている。

何か一つぐらい反応があるものと思っていた彼も、流石におかしいと感じたのか戸惑いがちに尋ねた。

「ど、どうかしたかの？」

そこでようやく目が覚めたとでもいうかのようにダンテは身じろぎすると、学園長の問いには応えず、視線をタカミチに向けた。

「タカミチ」

「な、何だい？」

タカミチも学園長と同じように戸惑いがちに応えると、ダンテは右手を顎に添えて考え込むような仕草をする。その所作は訊いてい

いのか、それとも訊いてはいけないのか悩んでいる様子である。しかし　それも刹那のことで、彼は改めてタカミチに視線を向けた。

ダンテは一呼吸の間を置くと――――

「この学校は人外を学園長にしてるのか？」

――――まるでその質問が当然であるかのように言い放った。

「……は？」

ダンテの無遠慮な質問に、タカミチはあんぐりと口を開けながら彼を見つめた。

「いや、どう考えてもおかしいだろ、それ。どうなってんだよ爺さんの後頭部は。まさか頭蓋骨もその形なんて言うんじゃないだろ？」

確かにダンテの疑問も尤もだ。学園長の後頭部は、明らかに通常の人間の頭部を逸脱している。ダンテは知らないだろうが、見た目は七福神の三徳を司る福禄寿、妖怪で言うならぬらりひょんで通用するような容姿である。本人には気の毒だが、初対面の人ならば誰

でもそう思うだろう。

「い、いや……学園長はちゃんとした人間？だよ？うん、その……きっと……ね？」

タカミチもフォローするが、なにぶん自信がなさそうな答え方のせいで、全くフォローになっていない。

唯一の味方である彼からも見放されたせいで、学園長は指で机にのの字を描いていじけてみせた。

「なんじゃいなんじゃい……二人して年寄りをいじめおって……」

暗い雰囲気を纏う学園長と、それを慌てて慰めるタカミチ。そんな様子も、ダンテは気にも留めなかった。

それにしても、彼はまるで悪びれていない。普通なら謝罪の一つでもありそうなものだがそれもせず、学園長の落ち込みようにも全くの無関心。完全に無視していると言ってもいい。普通なら学園長の怒りを買ってもおかしくない。

しかし、ここの学園長も普通ではない。半分は彼をからかうつもりだったのだろう。反応がなかったのを残念に思うも、すぐに気を取り直して改めてダンテに向き直った。

「ふむ。改めて言うが、遠路はるばるよく来てくれた。おぬしを歓迎するぞい」

両手を広げ、歓迎の意を述べる学園長。これだけ見れば、新任の教師を迎える学園長の一幕に見えただろう。

しかしそれは表向きの話であって、ダンテの本来の役割とは違う。あくまで彼らは依頼人と請負人の関係でしかない。それを分かっているからこそ、ダンテは軽い口調ながらもすぐさま本題に入った。

「それで？俺はいったい何をすればいいんだ、爺さん？」

最初から乗り気ではなかったせいだろう。あくまでも深く関わらず、ビジネスライクに事を進めようとするダンテに、学園長は「性急じゃのう」とぼやくと、机の引き出しからＡ４サイズの封筒を取り出し、彼に差し出した。

「君は主に夜の警備員として働くことになる。詳しいことはこの書類に明記しておるでな、時間がある時に読むといいじゃろ……もちろん英語で書かれとるから心配しなくていいぞい」

書類を読めと聞いた時に苦い顔をしたダンテの心情を見透かしたのか、学園長はそう言ってフォフォフォと笑った。どうやら、先ほどさんざん人外呼ばわりされたことを根に持っていたらしい。

彼は話を続ける。

「それと書類上でのことじゃが、表向きは英語教員としても働いてもらうことになる。大の大人が無職じゃとカッコつかんしのう」

周囲への体裁を気にしての学園長の厚意。本来は非常にありがたい配慮であるのだが――――

「待てよ爺さん。あんたには俺が日本語ペラペラのバイリンガルに見えるってのか？もしそう見えるってんなら眼科に行くことをお勧めするね」

トントンと自分のこめかみに右手の人差し指を当てながら、ダンテは言った。まるで自分を教師としてここに置くなど正気の沙汰ではない、とでも言うかのように。実際、そういう意味で言ったのだろう。彼には自分に教師など勤まるはずがないという確信があった。

しかし、この場は学園長の方が一枚上手だったようで、飄々とした笑みを浮かべながら彼に告げた。

「その点については心配ないぞい。言語翻訳魔法というものがあっての、読み書き以外ならバッチシじゃ」

魔法は便利じゃのー、と言って学園長は笑った。もはや、ダンテが教師をすることは彼にとって確定事項らしい。

――この爺さん、タヌキだな――

口では学園長に敵わない。そう悟ったダンテは心の中で悪態をつくと、溜め息と共に肩を竦めてみせた。どうやら説得は不可能と諦めたようだ。

「……仕方ないな。仕事を受けた以上、教師でもなんでもやってやるよ」

ダンテが了承しながらもやれやれといった風にかぶりを振ると、学園長は早速と言って言語翻訳魔法を唱える。淡い光がダンテを包み、そして大した時間もかからずに消えた。これで日本語も分かるようになるらしい。

彼はいまだに半信半疑だったが、学園長の次の言葉に信じざるを

得なくなる。

「これで大丈夫のはずじゃ。ワシの言葉が分かるかの？」

学園長が日本語でダンテに話しかける。すると不思議なもので、本来ならばただの言葉の羅列にしか聞こえないはずの学園長の日本語の意味が、ダンテの頭の中で理解できてしまったのだ。さすがの彼もこれには軽く瞠目した。

しかし、たとえ日本語を理解できたとしても、ダンテ自身が日本語を話すことができなければ意味がないのではないか、と彼は思った。会話が一方通行ではコミュニケーションをとることは不可能なのだから。

当然、その点について彼は学園長に尋ねる。

「ヘイヘイ爺さん、まさかボケちまったか？あんたの言葉が分かっても、俺が話せなければ……」

意味がない、とまで言おうとして、彼は口を閉ざした。

――待て……何で俺は日本語で話している？――

そう、今のダンテはごく自然に日本語を話していた。生まれてこのかた日本語の『に』も知らなかった彼が、まるで以前から親しんできたかのように流暢な日本語を話したのだ。これには彼も仰天するしかない。

「言ったじゃろ。読み書き以外ならバッチシじゃと」

学園長はこれ以上ない笑みを作る。例えるなら、悪戯の成功した子供の笑みといったところだろうか。ダンテの隣にいたタカミチも、これには控えめに笑う。

学園長のさらなる仕返しにダンテはやられたと思いつつも、次の瞬間には称賛の言葉が口をついて出た。

「ハッ、こりゃ凄いな。魔法ってヤツは便利なもんだ。これじゃ通訳も形無しだろうぜ」

「じゃろう？」と学園長が言うと、三人は申し合わせたかのように笑うのだった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１　ダンテ、麻帆良を訪問する（後書き）

ようやく二話目。まだまだ文章が未熟だと痛感する今日この頃です。

プロローグは２０００文字以内と短めでしたが、今回は５０００字ほどで一話としました。回によっては文章量が変化すると思いますので、そこは御了承願います。

あと、読んでいて何か読みにくいところはございますか？地の文は行間隔を空けず、会話文は行を空けるなどできるだけ読みやすくしているのですが……

Ｍｉｓｓｉｏｎ　２　桜咲刹那

2／

夜の帳が下りた麻帆良学園都市の最奥、女子高エリア。昼間の喧騒はなりを潜め、今は静寂だけが支配している。

この時間になると、外を出歩く者はほとんどいない。それも当然だ。もうすぐ日を跨ごうかという時間に、外を出歩く物好きがいるわけがない。夜遊びに興じる女生徒や、その彼女らを狙う変質者ぐらいならいるかもしれないが。

もし他にいるとすれば、それは――――

◇

麻帆良学園の外縁部。ちょうど学園都市全体を覆う結界から数百メートル内側に入り込んだ場所にある人工林に、幾度となく剣戟が響き渡る。

人工的な明かりのない林の中で、その合間を縫うように数多の影

が移動し、それらが交差する度に甲高い金属音を立てる。時おりその音に混じって風を切るような轟音がすると、断末魔の声を上げて影が消滅する。

「……！」

より一層大きな声が聞こえたかと、またもや轟音が響き渡る。その度に影は減り続け、遂には一つの影を残して消滅した。そうなると、林には静寂が戻る。残った影はその場で身動き一つとらなかったが、暫くすると女子寮の方角に向かって歩き出した。そこで雲に隠れて見えなかった満月が顔を出し、その影を少しばかり照らし出す。

年の頃は十三、四ぐらいだろうか。肩まで伸びた黒髪を左でサイドポニーテールに結い、幼さを感じさせる顔立ちをした少女。その双眸は細められ、切れ長の目をさらに険しくしていた。左手には白木拵えの鞘に納まった巨大な野太刀が握られている。現代において野太刀を携えたその姿は場違いという他ないが、彼女の凛とした佇まいのせいかひどく似合って見えた。

彼女の名は桜咲刹那。麻帆良学園女子中等部２－Ａの一員にして、裏の世界に関わる者の一人である。

◇

――今日も守りきった――

刹那は女子寮に歩を進めながら万感の思いで息を吐いた。これでお嬢様の生活が守られた、と。

彼女は夜の警備員として、頻繁に外出しては侵入者と戦っている。しかし警備員と言っても、彼女は厳密に言うと魔法使いではない。京都に本拠を置く剣術、京都神鳴流の使い手である。彼女はとある事情で関東魔法協会側に属し、自らの務めを果たすために侵入者と戦っていたのだ。

彼女の担当は女子寮付近――――これも彼女の事情のための配置なのだが――――今夜のところはさらなる侵入者もいないようなので、彼女は女子寮の自室に帰ろうとした。

そこに突然、携帯の着信音がいやに大きく響き渡る。非常事態時の連絡手段として使われる携帯に、学園長から連絡が入ったのだ。

『刹那君!』

「学園長、どうしましたか?」

『女子寮付近に敵が入り込んだようじゃ!』

「何ですって!?」

学園長の連絡に顔面を蒼白にする刹那。まさか自分が侵入者と戦っている間に、別の侵入者がこそこそと入り込んでいたとは。以前にもよく使われていた手法だというのに、何故たかだか鬼の集団を

一度倒しただけで安堵してしまったのだろうと彼女は自分の浅はかさを悔やんだ。

「応援は！？」

『今は手の空いている者がおらん！龍宮君も出払っておるし……』

「くっ……！」

応援は期待できない。その言葉を聞いた瞬間に、刹那は風となった。気を足に集中させ、疾風迅雷の勢いで走り出す。携帯の通話はその時既に切っていた。学園長が「ちょっ……」と言っていたが、そんなことはどうでもよかった。

――間に会え！――

刹那はそう念じながら、いつになく慌てて女子寮に向かって走っていた。それは、学園長から侵入者の正確な居場所を聞くのすら忘れてしまうほどに。これは完全に彼女の失態なのだが、そのことにすら気付かないほど、彼女は急いていたのだ。

もうじき女子寮に着く。そう思った時、彼女の耳が微かな音を捉えた。

銃声と剣戟に混じって響く、誰かの声。

――誰かが戦っているのか？――

最初は龍宮が足止めをしているのかと思ったが、彼女は銃を手に戦えども剣は使わないと知っているが故に、その推測を切り捨てる。

ならば刀を扱う刀子さんもいるのかと考えるも、今日は彼女の担当ではないし、彼女の居住地も遠く離れているため、自分より早く到着するはずがないとその推測も切り捨てた。

ならば誰が、と考えるが、その後すぐに思考を切り替えた。

――誰であろうと関係ない。私はただ、お嬢様を守るのみ！――

刹那は左手の親指で野太刀『夕凪』の鯉口を切る。その場に到着すれば、すぐに抜刀できるようにと。

しかし、その必要はなかった。

何故なら、彼女が声が聞こえる場所に到着した時には――――

「……！？」

――――全てが終わっていたのだから――――

◇

女子寮から二百メートルほど離れた通りに着いた刹那は、その光景に我を忘れた。

桜通りのコンクリートは所々めくれ上がり、その破片が彼方此方（あちらこちら）に飛び散っている。通りを照らすはずの街灯も完全に折れてなくなっており、折れた先が何故か林に突き刺さっていた。魔法で修復するとしても、それなりの手間がかかるだろう。

そこの中心、一段と破壊が進んだ場所に、彼はいた。

夜の闇をも寄せつけぬほど存在感を放つ、血のように赤いコート。

彼女の身長を優に超える長さ持つ、両刃の大剣。

そして、光を反射して煌めく白銀の髪。

怪しいことこの上ない男が、そこにはいた。

予想を裏切る光景に少しの間意識を飛ばしていた彼女は、けれどもすぐに気を取り直して戦闘態勢に入る。いつどこからでも動き出せるように腰を落とし、正体不明の男を睨みつけた。彼女は知っている。夜間警備員にこんな人はいないと。

「貴様は何者だ！どうやって入り込んだ！」

刹那の怒鳴り声に、男はようやく振り返った。振り返った彼の顔を見て、彼女はさらに確信を深める。

どうやら彼女の中では、侵入者がその男ということで確定してしまったらしい。少し冷静になって考えを巡らせれば、その場の不自然さから男と話し合いをする余地はあっただろうし、異邦人である彼に日本語が伝わっているかも怪しいと考えることもできたのだろうが、お嬢様のことで頭に血が上っている彼女にそれを求めるのは少々無理な話だった。

「目的は何だ！まさかお嬢様を奪いにきたのではないだろうな！？」

もしそうなら容赦はしない！と言って夕凪を抜刀し、男に切っ先を向ける刹那。全身に気が漲り、いつでも斬りかかれるように前傾姿勢をとる。

一方で、彼女に侵入者と認定されてしまった男――――ダンテは彼女の姿を認めると、訝しげに眼の前の少女を見つめた。

彼がここにいたのは、複数の魔の気配を察知したからだ。

彼には、人間とそうでない者を見分ける嗅覚とも言える能力がある。その能力は、彼を一流の悪魔狩人たらしめる要因でもある。

その能力の命ずるままに外へ出た彼は、通りで召喚者によって喚び出された異形達と遭遇したというわけである。

もちろん、彼が侵入者であるはずがない。彼は正式な依頼の元、学園長に呼び出されたのだから。

そのことを知る由もない彼女は、いまだに彼に対して夕凪の切っ先を向けている。もし彼が不用意な発言をすれば、彼女は一息に懐へ踏み込んでその首を刎ねるだろう。それだけの気迫が彼女にはあった。

しかし、彼は大人しく相手の言うことに従うような男ではなかった。彼女に凄まれてもどこ吹く風。右腕を彼女に向けると、クイクイと指を曲げて挑発した。

「C'mon. Lady（来な。お嬢ちゃん）」

「っ！」

その瞬間、刹那は地面を蹴ってダンテの懐に踏み込んでいた。夕凪が弧を描き、彼の胴体を狙う。その動きに反応すらできないのか、彼の足は棒立ちのまま動かない。いくら峰打ちとは言え、彼女ほどの使い手の一撃を受ければ、骨の数本は簡単に砕けてしまうだろう。

――悪いが、一撃で決める！――

殺しはしないが、西との関係を聞き出すために大人しくしてもらうぞと思い、刹那は夕凪を容赦なく振り抜いた。

こうして、ダンテの逆胴を薙ぐかに思われた一振りは――――

「な……」

――――あえなく空を切った。

ダンテに直撃することのないまま夕凪を振り抜いた刹那は、その体勢で硬直する。それほど、彼女の心中は混乱の極みにあったといえる。

――あの男、一体どこへ……？いやそれよりも、奴はどうやって私の一撃を躱した？当たると思った。絶対に当たると思ったのに……なのにどうして……！――

目の前で起きたことが信じられず、完全に侵入者のことを忘れている刹那。当のダンテは、彼女の後ろで　悠然と佇んでいる。もし彼が敵性勢力だったならば、この隙を逃す手はなかっただろう。

しかし、彼は刹那に敵意を持っているわけではない。異形達の戦

いでは完全に満たせなかった心の滾りを、彼女と戦うことで満たそうと考えただけである。だからこそ彼女の一撃を飛び越えて躱した際にも、何も手を出さずにいたのである。

また、彼女自身に興味があったのも理由の一つに挙げられるだろう。夜間警備員がいることは知っていたが、まさかこのように幼い少女だとは、彼は露ほどに思っていなかったのである。彼女がどれほどやれるのか、彼は密かに楽しみにしていた。

そんな彼の思いも知らず、ようやく自分を取り戻した刹那は、後方にいた彼に慌てて向き直った。その様子が妙におかしく見え、彼は小さく笑みを作る。それを見て、彼女の表情はさらに険しくなった。

「貴様、何がおかしい！？」

威勢よく声を張り上げると、チャキリと音を鳴らして夕凪を持ち替え、刃先をダンテに向ける。一度躱されたことで、峰打ちで仕留めるという考えを捨てたらしい。油断も慢心もなく、今度こそ全力でかかってくるだろう。

先ほど以上に殺気を振りまいて睨みつけてくる彼女に、ダンテは素直に感心した。

「その年にしちゃガッツあるな。これならそれなりに楽しめそうだ」

日本語でそう言うと、ダンテは背中に背負ったリベリオンを抜き、刹那に空いた左手を差し出した。

「Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ？（踊ろうか？）」

「っ！ふざけるなぁ！！」

刹那を明らかに下に見た態度に、彼女は先ほど以上の速さでダンテに迫ると、夕凪に気を乗せる。神鳴流の真骨頂とも言える、気を使って放つ奥義。

――奥義、斬岩剣！――

本来なら岩をも切り裂く大技であるが、ダンテは十分な速度をもって振るわれた斬撃を難なく躱してしまう。それは予想の範囲だったのか、刹那はうろたえることなく、次の技に繋げていく。

――秘剣、百花繚乱！――

気を飛ばして相手を吹き飛ばす百花繚乱も、ダンテは横に大きく飛び退くことでやり過ごした。

その後も幾度となく神鳴流の奥義が振るわれるが、それらが一度として命中することはなかった。初見の技でもどうにか彼のコートに掠らせるのが精一杯で、一度その奥義を見せてしまえば、その後は刹那がどんなに奥義を放っても、簡単に躱されてしまうのだ。

彼が斬撃を躱し、時には受け止め、または斬撃の機先を制して出鼻を挫かれる度、彼女の心には焦りが募っていく。最初の斬撃を躱された時から、彼女も薄々は感じていたのだ。

この男は、自分よりもはるか高みにある、と。

だとしても、彼女にはここで引くわけにはいかない理由がある。彼女が想うお嬢様の身を守るためならば、たとえ自分の命だろうと惜しくはない。故に、応援が駆けつけてくるまで、命がけで彼を足止めする心積もりだった。

そこまで決意したところで、はたと気が付く。もし仮に、彼の力量の方が上であるとすると、何故自分の首が今もなお繋がっているのだろうか、と。

よくよく考えてみれば、彼女が自分から攻撃を仕掛けたことはあっても、男の方から仕掛けたことはあっただろうか？反撃を受けはしたが、それは斬撃ではなく全て徒手空拳による牽制のみ。命に関わるような攻撃を受けたことがない。彼が手を抜いているのか、それとも他に理由があるのか。そもそも彼は敵なのか、味方なのか。彼女には判断がつかなかった。

そんな刹那の迷いが透けて見えたのだろうか。彼女の上段をリベリオンで受け止めたダンテは、押し返すと同時にジャンプして上空へ逃れ、まだ無事だった街灯に着地した。彼の表情はムスッとしており、どうにも得心がいかないといった風である。

「……止めだ」

「何？」

「もうここらで止めにしようぜ？」

ダンテによる突然の戦闘終了宣言に、刹那は眉を顰める。それも当然だ。攻めていたのは彼女だが、実のところ戦闘をコントロールしていたのは彼に他ならなかったのだから。

だからだろうか。リベリオンを納める彼に、疑問が口を衝いて出てしまったのは。

「……どういうつもりだ」

「あん？」

刹那の本意が読めず、意味が分からないとでもいうかのような言葉を発するダンテ。その余裕に満ちた態度が気に入らず、つい言葉が止まらなくなってしまった。

「何故手加減した！貴様は私よりも強い！すぐに殺すこともできたはずだ！なのに何故……！私ごときに本気になる価値もないと言うのか！？」

答えろ！

一気に捲し立てて息が切れたのか、刹那の呼吸は千々に乱れる。そのために酸素を求めて息を吸う音が、夜の静寂の中でよく響いた。

彼女の怒りの声に、ダンテはどこ吹く風といった様子で言葉を返す。

「ハッ。その言葉、そっくりそのままお返しするぜ」

ダンテが呆れた口調で肩を竦めると、刹那の眉が持ち上がる。

ダンテからしてみると、彼女こそ手を抜いており、本気を出していないと言う。そんなはずはない、と彼女は頭を振る。お嬢様を守

るために戦うのに、手を抜くことなんて有り得ないとでも言うかのように。

まさかこちらの動揺を誘うための計略かと思い、彼女は騙されてなるものかと身構えた。

「何を言っている。私は本気でやっている」

しかし、ダンテの次の一言に、刹那は凍りつくことになる。

「そうかい。それにしちゃ、お嬢ちゃんから魔の匂いがプンプンするんだがな」

「な……？」

――今、この男は何と言った？――

ダンテの言っていることの意味がよく理解できず、動揺を隠せない刹那。それも致し方ないことだろう。ごく一部の人間しか知らず、ルームメイトや親友にさえ隠していた彼女の秘密を、ダンテは知っていたのだから。

彼女の両足がガタガタと震えだす。歯の根が合わないのか、歯がお互いに当たってガチガチと音を立てている。

それを知ってか知らずか、彼は話を続けた。

「その姿も本当の姿じゃないな。お前はお嬢様とやらを守るために戦っているらしいが、出し惜しみはよくないぜ？せっかくのダンスのお誘いも、そうツレないんじゃ悲しくなっちまう。そうだろ？」

やれやれと、ダンテは大仰に両腕を広げた。悲しいと口に出してはいるが、どこまで本気なのか、とてもそうは見えない。しかし、そんなことも目に入らないほど動揺していたのは事実だ。

――何で知っている――

――どうして分かった――

――私を■■の■■■だと分かって何故――

――そんなに優しい目をしているんだ？――

今まで刹那のことを半妖と知って、普通に接してくれたのは一部の人間だけであった。それでも、その彼らも、半妖に対して理解があるだけで、自分と彼らは違う存在なのだという感覚が拭えなかった。

だがダンテの眼は違った。半妖を見る目ではなく、刹那自身を見るように穏やかな視線を彼女に向けていたのだ。

――何故……あの男とお嬢様が同じに見える？――

ダンテのことが分からず、そのことがとてつもなく恐ろしく感じて、刹那は遂に夕凪を取り落として自分の肩を抱く。

彼女はもう、戦意を喪失していた。

夕凪が地面に落ちるのを見届けた彼は、これ以上の再演は不可能だと知る。異形達と戦うよりも楽しめたものの、完全に心の滾りを満たすことができず、その不満が顔に出ていた。

ただ、彼は少し気分が高揚してもいた。まさかこの極東の地で、同族と言うべき存在に出会うとは露とも思わっていなかったのだから。しかも彼女は、同じく夜間警備員の一人でもあるようだ。レディにこの仕事を押しつけられた時は憤懣やるせないといった彼だったが、なかなかに神様も粋なことをしてくれる、と内心喜んだ。

彼はいまだに俯き震え続ける刹那を一瞥する。元々小柄な彼女の体がさらに小さく見え、今更ながらに、何か悪いことでも言ってしまったかと悩んでしまう。

しかし彼には思い当たるものがない。これには自分の特殊な生まれに対する二人のスタンスの違いがあるのだが、彼がこの場で気付くことはなかった。

「ヘイ、お嬢ちゃん」

「っ！？」

ビクンと、刹那が大きく震える。そろそろと顔を上げる彼女の表情は、その童顔も相まってまるで子犬のようであり、それを見て少しばつが悪くなったダンテであった。

しかし、ダンテの鋭敏な知覚が背後から近づいてくる何者かの気配を捉えた。数は複数。かなりの高速で接近していることから、もうすぐにこの場所まで辿り着くであろう。

ここに彼女を置いて行くのは後ろ髪を引かれたものの、ダンテは背後から何者かが近づいてくる気配を前に、会話を断念する他なかった。面倒事はもう御免なのだ。

「Ａｄｉｏｓ！（アバヨ！）」

そう言い残して、ダンテは街灯から飛び上がって闇夜に消えた。
後に残るは静寂のみ。

刹那は、別の仕事を片付けて駆けつけた援軍がやって来るまで、
そこで立ち尽くしていた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　２　桜咲刹那（後書き）

第二話は刹那との初邂逅話でした。時間的には第一話の日の夜の出来事ですね。勝負はダンテの圧倒的な勝利といったところです。と言ってもダンテはろくに攻撃してませんが。

本作のダンテは初期から相当強いです。下手をするとバランスブレイカーになりかねませんので、どう物語に絡ませながら原作を蹂躙しないかを考えて書いております。

次の更新は少し遅れると思います。事情は活動報告で。

それでは次回にまたお会いしましょう。それでは。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　３　副担任ダンテ

３／

麻帆良学園都市が昼を迎え、誰もが昼食を食べるために動き出した頃。女子校エリアにある麻帆良女子寮の一室で蠢く影があった。

その部屋は管理人室。一昨日までは管理人はおらず、女子寮のデッドスペースと化していた部屋であった。本来ならば誰もいるはずのない部屋。しかし、昨日からその部屋を利用している者がいた。

閑散とした部屋の片隅にはギターケースが置かれ、クローゼットには赤いコートがかけられている。床にはビール缶やピザの箱が散乱していた。

そのほとんど何も置かれていない部屋の隅に、ぽつんと置いてあるベッド。その上にダンテはいた。大きな欠伸を一つすると、上半身だけを起き上がらせる。本来ならば、今頃は麻帆良学園で教師を務めているはずであったが、どうやら彼は完全に寝過してしまったようだ。

ベッドから起き上がった彼は、まず学園長から連絡用にと貰った携帯を開いた。ディスプレイの時間は午後一時より少し前を指している。彼は教員達への自己紹介もあるため、午前七時半には出勤しろと言っていたが、その時間はとうの昔に過ぎている。

次に着信履歴を確認すると、三十分ごとに連絡があったようだ。

着信履歴の欄が学園長の携帯番号でびっしりと埋まっている。

留守電もいくつか残っていたが、どうせ閉口するようなメッセージしかないだろうと思い、ダンテは一つも聞くことなく携帯を閉じた。

彼はベッドから起き上がると、まずはシャワーを浴びることにした。彼は昨夜の戦闘が終わって帰ってくるなり、コートだけ脱いでそのまま寝てしまい、汗を流すことをしなかったのである。大した運動でなかったとはいえ、飛行機に搭乗してから今まで一度もシャワーを浴びていないというのは、不精な彼も我慢できるものではなかった。

軽くシャワーを浴びた彼はいつも通りの格好に着替えると、銀の装飾を施されたアミュレットを首にかけた。ベッド脇に無造作に置かれた携帯をポケットにしまい、部屋を後にする。ちなみにカギはかけていない。盗まれるような物がろくに無いということもあるが、デビルメイクライでも鍵をかけずに外出していたので、つい癖で忘れてしまったらしい。

こうしてダンテの初出勤は、麻帆良学園創設以来の大遅刻として、後々まで語られることになったのであった。

◇

「困るよダンテ。初日から思い切り遅刻するなんて」

「悪い悪い。緊張して眠れなかったのさ」

全くそんな風には思っていないといった態度で、ダンテはタカミチに謝った。

午後二時過ぎに学園長室に着いたダンテは、学園長に遅刻したことについて散々小言を言われた。しかし、その際に昨夜の件を報告すると、一転して彼はダンテに礼の言葉を述べた。どうやら女子寮に彼の孫が住んでいるらしく、侵入者も彼女を狙って麻帆良に侵入したのだとか。それを未然に防いでくれたダンテに大層感謝していた。

その後、中等部の職員達に彼の着任のあいさつをすることになった。着任初日から大遅刻をやらかした彼に職員は訝しげな視線を向けるも、これから同じ職場で働くということでほとんどの教員に受け入れられた。のだが……

「それにしても、新田さんは大したものだね。さすがの君もタジタジだったじゃないか」

そのことを思い出したのか、タカミチは声を殺して笑った。

そう、ただ一人だけ、ダンテと決定的にそりが合わないであろう人物がいた。学園広域生活指導員の新田先生である。彼はダンテの前に仁王立ちすると、常に生徒の模範になければならない教師が初日から遅刻するのは何事かと説教を始めたのだ。

真面目を絵に描いたような性格の新田と、不真面目を絵に描いたような性格のダンテは、まさに水と油。結果的に、彼は新田に苦手

意識を持ってしまったのだった。

「おいおい、勘弁してくれ。これからもあのおっさんにどやされるかと思うとやってられないぜ」

それこそ冗談ではないと、ダンテは肩を竦めた。

「ははは。でも新田さんは良い先生だよ。そうは思わないかい？」

「……まあな」

タカミチの言葉にいったん間を置いて、ダンテは同意した。

「さて、これからショートホームルームがあるわけだけど、覚悟はいいかい？」

「覚悟とは怖いな。お前のクラスはそんなに悪ガキばかりなのか？」

タカミチの脅しともとれる発言に、ダンテは怪訝そうに隣を歩く彼を見た。

昨日の彼による広域指導員としての手腕を見ているが故に、彼にすら手なずけられない生徒がいるのかと思いダンテが尋ねてみるが、彼自身がそれを否定する。

「いや、みんないい子だよ。ただね……」

タカミチが言うには、２－Ａの生徒達は元気がよすぎるらしい。元気が有り余っているせいか、時には手がつけられなくなることが

あるようだ。

彼がそう言うのなら相当なものなのだろう。ダンテは納得する。

そんなことを話しているうちに、２－Ａと書かれたプレートを掲げた教室が見えてきた。中から女子生徒達の姦しい笑い声や、何故か轟音も聞こえてくる。

タカミチに視線を向けると、彼は小さく「だろう？」と呟いた。確かに、ダンテが予想していたよりも騒々しいクラスのようだった。

手はずではダンテを先頭に二人が教室に入り、自己紹介をした後にいくつか質問を受けることになる。彼が質問とは何なのかと尋ねたところ、２－Ａには噂が大好きな自称『麻帆良のパパラッチ』と呼ばれる生徒がいるらしい。その生徒なら、まず間違いなく彼に根掘り葉掘り質問をしてくるのは間違いないのだとか。

自分のことを探られるのはあまり好きではなかったが、どうせ子供のやることだと割り切って、彼は引き戸に手をかける。そのドアの上に挟まれた黒板消しを、彼は見ないことにした。

ドアをガラリと開くと、当然のことながら黒板消しはストッパーを失い、彼の頭に落下してくる。それを知っている彼は、一歩前に出ることで余裕を以って躱してしまう。

しかし、それはあくまで陽動。床すれすれに仕掛けられたロープが足に引っ掛かり、彼は体勢を崩してしまう。そのロープの先に繋がったバケツが頭上から勢いよく落ちてくるのを見た時、教室の中にいた双子はイタズラが成功したことを確信し、ニヤリと笑った。

「ハッ」

ダンテは短く声を発すると、崩れた体勢から右足を振り上げる。その足先を上手く使って取っ手に引っ掛けると、次の瞬間には難なく床に置いて見せた。少し水滴が零れ落ちたものの、水の大部分は中に残したままである。

予想してなかった光景にポカーンとする２－Ａ一同。その視線を気にすることなく、彼は入り口のタカミチを睨んだ。

「おい、タカミチ。こうなると分かってたんなら何で最初に言わなかったんだ？」

「いや、君がイタズラに引っ掛かったら面白いだろうなぁと思って……」

「ハッ……残念だったな。俺の情けない姿を見れなくてよ」

軽口を叩き合う二人を尻目に、２－Ａのメンバーは揃って声を上げた。

「えええええええええええええええ！？」

◇

「あー……今日からお前らの副担任になる、ダンテ・レッドグレ

イヴだ。担当は英語。まぁ、あくまで担任はタカミチだから、俺はついでだと思ってくれればいい」

そんなやる気のない声で自己紹介をするのは、コートだけを脱いだダンテだ。彼は教壇に上り、教卓に手をついて教室を見渡している。

「では、これから質問タイムだ。何か聞きたいことがあれば手を上げなさい」

タカミチが言うと、早速一人の生徒が勢いよく手を上げた。朝倉和美と名乗った生徒は、何時の間に出したメモ帳を広げ、ダンテに質問を始める。

年齢に始まり、出身地や日本に来た経緯、趣味や恋人の有無などを聞いてくる。恋人に関しては何人もの女性と付き合ったが、その度に振られていることを暴露され、それを聞いたタカミチに笑われてしまうということがあった。その頃には、ダンテのフランクな性格や、その顔に似合わずストロベリーサンデーが好きだという意外な一面を聞き、生徒達は彼を受け入れ始めていた。

「もう終わりでいいか？」

「うん、もう十分情報も集まったし……おっと！この手の質問をするの忘れてたよ。危ない危ない……」

朝倉はシャープペンシルで頭を掻くと、最後の質問も投げかけた。

「先生って何人家族なの？兄弟とかいる？」

私達と同年代の弟がいたら嬉しいなぁ、と軽い気持ちで尋ねてくる。

しかし、その一言はこれ以上なくダンテの心を揺さぶった。

彼の脳裏に浮かぶのは、恐怖を生み出す土台にて別れたたった一人の兄弟。

“――お前は行け。魔界に飲み込まれたくはあるまい。俺はここでいい。親父の故郷の、この場所が――”

急に黙り込んでしまったせいだろうか。ふと気付けば、生徒達が怪訝そうな顔でダンテを見ていた。

彼は内心の動揺を悟られぬように短く息を吐き出すと、微かに笑みを浮かべながら答えた。

「あぁ悪い。四人家族で、兄が一人いる」

「へえ、何歳上の？」

「同じだ。双子だからな」

「双子？鳴滝姉妹と一緒かぁ……」

和美はダンテの心中も知らず、情報が手に入ったと喜んでいる。その様子を眺めながら、彼は廊下側の席に目を向けた。

教壇に上がった時に真っ先に気が付いた、サイドポニーテールの少女。それは間違いなく、昨夜に彼と剣を交わした少女だった。

タカミチがダンテのために作成した英語表記の出席名簿を見て確認したところ、彼の少女は桜咲刹那という名前だった。写真の下に剣道部所属と書いてあり、そのさらに下には、タカミチの字で『京都神鳴流』と記されていた。昨夜に彼女の見事な剣さばきを見ているダンテは、どうりで剣筋がしっかりしていたわけだと納得する。

彼がチラリと刹那を見ると、当の彼女も同じだったのか目が合ってしまい、慌てて目を逸らした。それも当然で、昨夜に敵とみなして斬りかかった男が、教師として自分のクラスにやってきたのだ。彼を見極めようとするのも仕方なく、また目が合えば気まずくて目を逸らしもするだろう。

彼女以外にも、ざっと見ただけで濃厚な魔の匂いを強く残した金髪の少女や、おそらく彼と同類であろう色黒の女性。興味津津な目で彼を見る中華系の少女や、観察するような視線を向けてくる者もいる。果てはどう見ても人間ではない、ロボットらしき生徒もいるのだ。

――ハッ……これは退屈しそうにないな――

随分と個性的な面々が集まったクラスが集まっていることが分かると、ダンテは楽しみで仕方ないという風に呟いた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　３　副担任ダンテ（後書き）

第三話はダンテの初出勤の話でした。やっぱり教師の仕事は彼には似合いませんね。

少々強引ですが、一応彼が教師をしなければならないのには理由があります。それが語られるまでお待っていただければ幸いです。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　４　デビルハンターの力（前書き）

眠気がヤバい……誤字脱字があるかもしれませんが、そこはご了承ください。指摘してくだされればすぐに訂正いたします。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　４　デビルハンターの力

４／

ダンテが教師になって初めて迎えた夜、世界樹広場にて。麻帆良学園の夜間警備員が一堂に会して、彼の登場を待っていた。

彼が昨日から麻帆良学園都市に入り、今日からは中等部で教鞭を執っているという情報は警備員達には既に入っており。特に初日から大遅刻しても悪びれる様子がなかったという事実に、中には憤然としている者もいた。

そうして約束の時間がじきに過ぎようかという頃、世界樹広場へ通じる道の一つから彼はギターケースを持ってやって来た。

「フォフォフォ。今度は時間通り来たようじゃの、ダンテ君」

学園長が昼間のことを茶化すように言うと、ダンテは眠たげな眼を彼に向けた。まだ起きて間もないといった風で、時間ギリギリになったのはそれが原因なのだろうと容易に想像ができた。

「それで？俺は何をすればいいんだ？」

「まあ待ちなさい。まず君をみんなに紹介をせねばの」

学園長はそう言うと、集まった警備員達の前にダンテを連れてくる。

彼が警備員達の顔を見渡すと、多種多様な人物が見て取れた。彼らのほとんどは教師であるものの、人種は多岐にわたっている。また、教師以外にも明らかに学生であろう少年少女がおり、中には彼の生徒が交じっていた。

「皆の者、先日通達していた通り、彼を新しく夜間警備員として雇うことにした。女子中等部におる者は知っていよう。ダンテ君じゃ」

ダンテはアメリカで便利屋として活動しており、特に裏に関わる案件を引き受けている名うての実力者だということを学園長は説明する。

しかし、警備員達の表情は決して穏やかなものではなかった。彼のふてぶてしい態度に反感を抱いたのもあるが、それ以上に外部から警備員を雇うということ自体に納得がいかなかったのである。

夜間警備員は、外部の侵入者から貴重な魔法書などを守るために組織されたという。今までもそうやってきたし、これからもそうだろう。人員が足りないということは決してない。

それなのに何故、学園長はわざわざ外部の者、しかも『立派な魔法使い』でもなんでもないただの便利屋風情を雇ったのか。今日までの夜間警備に自負を持ってやってきた彼らからしてみれば、自分たちはそんなに頼りにならないのかと甚くプライドを傷つけられたようだ。

そんな彼らの気持ちを学園長が分からないはずはなかった。だからこそダンテを紹介し、互いの溝を埋めるためにこの場を設けたと言っていい。

そのために学園長がちょっとした仕込みをしていたのだが、それは後に判明することになる。

「これで彼の紹介は終わりじゃ……が、皆の者も彼の実力が分からんと警備がやりにくいじゃろう。誰かに手合わせを願いたいと思う。誰かおらんかの？」

そう言って警備員達の顔を見回すと、その中の何人かがお互いの顔を見渡した。

ダンテを警備員として認めることなどしたくないが、学園長が直々に連れてきた人物がただの無能だとは思えないし、このまま認めなければ学園長の顔を潰すことにもなりかねない。されども、手合わせでも負けることはしたくはない。

ただの手合わせでも負けたくはないという気持ちが、自ら手を上げることを躊躇わせていた。

すると、今まで一言も発せず黙っていたダンテがおもむろに口を開いた。

「おい、爺さん」

「フォ？」

麻帆良学園最強の魔法使いに向かって何という物言いかと、警備員一同が視線を厳しくする。しかし、その視線もダンテには効果はなく、相変わらずの人を食ったような態度である提案をした。

「俺に相手を選ばせてくれないか」

「フォフォフォ、君にかの？」

学園長が不思議そうな表情でダンテを見つめた。

「このまま待ってたら日が昇っちまう。だったら俺が選んだ方がいいだろ？」

警備員達の心中を知ってか知らずか、ダンテが皮肉を口にする。その言葉にムッとするも、事実であるが故に誰も言い返さない。言い返せば、ならお前がやれと言われるに決まっているからだ。

「まぁよいじゃろ。君の好きにしなさい」

どうやら学園長は、ダンテにこの場を任せることに決めたらしい。一歩下がって推移を見守ることにしたようだ。

彼の了承を得たダンテは、手合わせの相手を探すために警備員の顔を眺めてみせる。そして、一通り見終えた彼が指を差したのは――

――――麻帆良学園高等部教員の葛葉刀子だった。

「私ですか？」

「何故私を選ばれたのか、お聞きしても？」

「あんた、剣士だろ？俺も剣を使うんでね。ちょっとしたお遊びには丁度いいと思わないか？」

ダンテの視線が刀子の手に握られた白木拵えの太刀に向けられる。確かにその通り、彼女は京都神鳴流の使い手であった。

手合わせをお遊びと断じる彼に内心ムッとした刀子であったが、冷静沈着な部分がそれを表に出すことなく押し留める。

「それだけですか？」

ダンテの挑発とも言える発言に何も思わないわけではなかったが、刀子はそれをおくびにも出さず尋ねた。

「そうだな……」

ダンテは背負ったギターケースを降ろすと、それを杖にしたまま顎に手を当てて思索のポーズをとった。それもすぐに解くと、皮肉気な表情から一転し刀子に流し目を送る。

「ダンスは男と女で踊るものだろ？その方が見栄えも良いし、何よりこっちにもやる気が出る。まぁ、つまり――――」

演劇のように大仰な身振り手振りで語るダンテを、一同が注目した。

「――――どうせならイイ女と踊りたい。そう思ったからさ」

そう言うダンテの口調は、まるで口説いているかのようだった。いや、言葉を額面通りに受け取るならば、臭い芝居にでも出てきそうな口説き文句に聞こえるだろう。彼の発言に、元々悪かった周囲の雰囲気はさらに悪化する。

もちろん、刀子はその言葉を真に受けることはしない。初な少女でもあるまいし、そんなことで動揺するなど彼女の沽券に関わるからだ。

と同時に、彼の挑戦的な表情に刀子は察する。この男は、自分を下に見ている、と。彼にとって、自分と手合わせするのは女をナンパするのと変わらないのだということを。

「……いいでしょう。あなたの言うお遊びに付き合ってあげます」

「いいね。やる気が出てきた」

ダンテはニヤリと笑うと、ギターケースのファスナーを下ろし、その中に手を突っ込む。そして引き出された物の威容に、周囲はにわかに騒ぎ出した。

何しろ、その剣は異様だった。

鈍く銀色に光を放つ柄。その縁に見えるは、二本の角を持った髑髏の装飾。そこから微妙な曲線を描いて伸びる、長大な両刃の刀身。そして、そこから発せられるすさまじい魔力。その禍々しさを体現したかのような様相に、彼らは震えた。

「フォフォフォ、ではルールを決めるとするかの。勝敗はどちらかが参ったと言うか、ワシが一本と判断したもののみとする。それ

でよいかの？」

「はい、それで構いません」

「いいからとっとと始めな」

刀子とダンテは学園長に見向きもせず、お互いに睨みあったまま返事をする。彼らの闘志が漲り、張りつめた空気が広場を包んだ。既に他の警備員達は退避しているので、号令があれば二人はすぐさま剣を交えるだろう。それを分かっているからこそ、その場の誰もが口を閉ざし、二人の試合を見守ることにした。

学園長が無言で手を上げ、そしてそれを振り下ろす。

「――――始め！」

その瞬間、二人は裂帛の気合とともに激突した。

◇

先手を取ったのは刀子。一直線に疾走し、踏み込みと同時にダンテの逆胴に鋭い居合いを放つ。その速さは昨夜の刹那を凌ぎ、彼女の方が実力は上であることを如実に示していた。

ダンテはリベリオンを地面に立て、その居合いを受け流す。そこから太刀を振り抜いた彼女の隙をつき、リベリオンを手首の返しを

利用して胴に刀身を叩きつけた。その流れには一切の無駄がなく、並みの相手なら斬って捨てる速さである。

しかし彼女もさる者。そんなことは分かっていたというかのように、返す刀でリベリオンを迎え撃つ。太刀を砕かれると思ったのだろう。剣のことを何も知らない魔法生徒は、声にならない悲鳴を上げた。

確かにリベリオンほどの切れ味と頑強さをもってすれば、細身の太刀はたちまち折られてしまうだろう。無論、彼女もその程度のことも分からない阿呆ではない。

そこで彼女は太刀を横に寝かせ、斬撃の軌道に限りなく近付けることで刀身を滑らせると同時に、太刀に気を纏わせることで強化を図る。その結果、彼女はリベリオンの軌道を逸らすようにして躱し、斬撃は彼女の頭上を通り過ぎた。

今度は彼女の攻撃がダンテを襲う。隙だらけの逆胴に、彼女の斬撃が奔った。

リベリオンを振り切った状態から防御するには遅すぎる。そう判断した彼は泡を食って後退しようと地面を蹴る。それもただ後退するだけでなく、リベリオンを横に凪いで彼女を斬りつけた。そのことで彼女の踏み込みが甘くなり、お互いの切っ先は相手に届くことなく終わる。

そうして二人の距離が開き、世界樹広場に刹那の静寂が戻る。一瞬の間に行われた攻防にギャラリーは眼の色を変え、対峙する二人を見た。

「ふむ……確かに学園長が推薦するだけのことはある」

その中の一人、夜中にも関わらずサングラスをかけた髭面オールバックの男性。魔法先生の一人である神多羅木は、二人の戦いを見て唸った。

「そうですね。あの葛葉先生と正面から打ち合えるなんて……」

「だが、葛葉君も本気ではないようだ。お互いに様子を見ていると言ったところかな」

神多羅木の論評に、同じく魔法先生の瀬流彦とガンドルフィーニが同意する。

葛葉刀子は魔法先生の中でも武闘派で、こと接近戦においては高畑に次ぐ強さを誇る。最後に押されたものの、彼女と見事に打ち合ったダンテの実力を、警備員達は素直に信じることができなかった。

「なかなかやりますね。よく最後の一太刀を躱したものです」

刀子は素直に称賛の言葉を贈る。それが直接剣を交わした彼女の正直な気持ちだった。

彼女は使う剣の重量の差から、速さはこちらにあると考えていたからである。それが一太刀目を受け止めたかと思えば、その勢いを利用して反撃に出る狡猾さ。まだ彼女は本気を出してはいなかったものの、もしあと少しでも自分の剣速が遅かったなら、二合目で彼の斬撃をいなすことができずに、太刀ごと斬られていただろう。

それだけに、受け流してダンテの懐に入り込んだ時、彼女は柄に

もなく勝ったと思った。彼の腕は伸びきり、逆胴を受け止めるには遅きに失していたからである。しかし、それも後方へ離脱することで躱された。しかも躱しながら彼女を斬りつけようとするというオマケつき。油断のならない男だと彼女は思った。

しかし、刀子による称賛の言葉は今の彼にとってどうでもいいことだった。

「なんてこった！」

全員が視線を向けると、ダンテは自分のコートの端を摘み、その部分を見てワナワナと震えていた。彼は完全に刀子から視線を外している。本来ならば問答無用で斬りかかるところだが、あくまで手合わせの中で実力を見るのが目的なので思い留まる。それに何かトラブルが起きたのかもしれないと思い、事の推移を見守った。

そして次に言ったことは――――

「俺の一張羅が！コートはこれしかないってのに！」

――――無残に切り裂かれたコートの心配だった。

だああっ！と全員が腰を抜かす。何かと思えば破れたコートの心配とは、どう考えても緊張感が足りない。刀子は頭が痛くなるのを感じながらダンテを怒鳴りつけた。

「な、何を馬鹿なことを言っているのです！手合わせの最中なのですから集中してください！」

「馬鹿なこと？ハハッ、冗談キツイな。この前新調したばかりの特注品がこれだぜ？愚痴の一つも言いたくなるってもんだ」

見れば、確かにダンテが摘まんだコートの端の部分に大きく切れ込みが入っている。これではとても着られたものではない。

「とにかく！今は手合わせをしているのですから、コートのことは後にしてください！」

刀子らしからぬ怒声が広場に響く。彼女は既に太刀と鞘の二刀流の構えをとっており、小手調べは終わりとばかりに闘気を放っている。次にダンテが茶化すようなことを言うのであれば、即座に懐に飛び込んでその体を斬りつけるだろう。それほど彼女は苛立っていた。

一方で、その様子を見ていた魔法先生達は唖然としていた。常に冷静沈着を主としてきた彼女が、ダンテにいいように振り回されて冷静さを失っている。特に、彼女と一緒に仕事をこなすことが多い神多羅木や、麻帆良に来て以来彼女の師事を受けてきた刹那には驚きが大きかったことだろう。

刀子の冗談は許さないという気配を感じたのだろう。ダンテはコートを摘まむ手を離してゆっくりとリベリオンの切っ先を向け、わ

ざと挑発的な視線を彼女に寄越した。

「――――コートの代償は高くつきそうだな」

ダンテが最後まで言い切るか言い切らないうちに、刀子が消える。次の瞬間には、彼女は『瞬動』によってダンテの視界外――――左側面に現れていた。

瞬動とは、気または魔力を足に集中させて移動することで、まるで瞬間移動したかのような錯覚を与える歩法術だ。彼女ほどの熟練者になれば、入りと抜きの隙をなくして本当に瞬間移動したかのように見せることも可能であり、その速さは昨夜の刹那によるそれを凌駕する。

彼に反応する余裕さえ与えずに懐まで潜り込んだ刀子は、太刀を胴に凪ぐ。完全に出遅れた彼はどうにかリベリオンを割り込ませて斬撃を防ぐが、咄嗟に受けたせいか防御が崩れ、その間隙を縫うかのように次の鞘による打突を鳩尾に食らって吹き飛ばされた。ただ致命打となるほどのダメージはなかったのか、彼は数メートル後方に下がっただけで体勢を立て直す。

だが、彼女の猛攻は終わらない。瞬動で即座に追いすがると、今度は右斬り上げを狙う。

彼はそれをリベリオンで受け止めるや否や、目一杯上体を逸らす。すると彼の頭部があった場所を、視界外から迫ってきた鞘による袈裟がけの一撃が襲ってきた。

実は彼女の右斬り上げは注意をそちらに逸らすための陽動であり、本命は右側頭部を狙う鞘の打撃だったのだ。もし右斬り上げだけに

注意が向いていれば、右側頭部への打撃により昏倒していただろう。幸い、彼女の右斬り上げは鞘を振るために十分に腰を捻ることができなかったせいか、その不自然さから彼はそれを陽動だということに気が付き、辛くも躱したのである。

「ハァッ！」

ダンテも黙って受けているばかりではない。刀子の連撃を躱したと同時に、リベリオンを逆胴に振るう。

彼の剛腕で振るわれた斬撃は直撃すれば対象を一刀両断する威力があるが、当たらなければ意味がない。それをしゃがむことでそれを回避した彼女は、上体を起こした勢いを利用して切り上げの二刀連撃を放った。

だが、彼は紙一重の差で一歩足を引いて躱す。高速で通り過ぎる斬撃にゾクリとしたが、彼は久しく感じてなかった緊迫感に気分が昂っていくのを感じた。

「イイね！ヤバい女は嫌いじゃない！」

「戯言を！」

軽口を叩きながら剣を振るうダンテと、それに世迷い言と切り捨てる刀子が幾度となく剣を打ち合わせる。その速度は凄まじく、美しく舞う二人を中心に剣の嵐が吹き荒れる。もしその場に迂闊に飛び込めば、瞬く間に切り刻まれるだろう。

何合打ち合っただろうか。魔法生徒達は十合も迎えぬうちに切っ先を見失い、魔法先生達も予想より激しい打ち合いに息を飲む。

既に手合わせという範疇を超えた剣戟は、いまだに終わる気配を見せなかった。

だが――――

「Ｂｌａｓｔ　ｏｆｆ（吹っ飛べ）！」

打ち合いが五十をとうに過ぎた頃、ダンテの斬り上げが刀子をガードごと吹き飛ばす。腕をかち上げられた隙を彼が見逃すはずがなく、すぐさま接近して空中に打ち上げられた彼女を蹴り飛ばした。偶然にも鞘が緩衝材となり衝撃を逃がしたものの、彼女は十メートル以上吹き飛ばされる。

「がっ！？はぁ……！」

交通事故に遭ったかのごとく後方へ吹き飛ばされた刀子は、四肢を使って地面を転がりながら、何とか体勢を立て直した。さらなる追撃に備え、即座に前を睨みつける。

しかし、追い打ちをかけてくるダンテの姿はない。そこには地面に蹲る彼女を悠然と見下ろし、リベリオンを肩に担ぎ仁王立ちする悪魔狩人の姿しかなかった。

「ヘイ、まだやるかい？」

ダンテは芝居がかったアクションで刀子を挑発する。彼としても、人の身でありながら洗練された腕前を持つ彼女との手合わせを、ここで終わらせるのは勿体ないと思っていたのだ。

だが、彼女には既に分かっていた。この手合わせは自分の負けだと。

今回の手合わせのルールは、どちらかが参ったと言うか、学園長が一本と判断したもののみである。あくまで手合わせなのだから、殺傷能力を持つ神鳴流の奥義等は使用できない。となると、彼女は純粋な剣技のみでダンテに参ったと言わせなければならない。

しかし、先ほどから彼女の鞘による打撃は当たっているが、太刀の一撃は悉く躱している。しかも直撃した攻撃によってダメージを与えた様子もない。つまりは効いていないのだ。これでは何時まで経っても参ったと言わせることはできないだろう。

また、身体能力も劣っている。彼女は女性でありながらも男性に負けないぐらいの鍛錬を積んできたつもりだ。それこそ、そんじょそこらの魔法先生にも負けないほどに。

それでもなお、彼と比べると圧倒的に身体能力が劣っていた。

彼女の気を込めた打撃を食らってもピンピンしている頑強な肉体。身の丈ほどの大剣を太刀と同じ速さで振り回す凄まじい膂力。そして、彼女が軽く息を乱すなか、何時までも疲れを見せることのない底なしの体力。ゲームで言うなら完全にバグキャラであり、どう考えてもプログラミングをミスしたとしか思えない。そう思わせるほど彼は化け物染みていた。

いつかまた再戦することがあれば必ず負かしてやると柄にもなく心に誓いながら、彼女は肩の力を抜いた。

「――――学園長」

「何じゃ、刀子君」

「参りました。もう結構です」

戦闘開始から一言も口を開かずにいた学園長に、刀子は自身の敗北を認めた。

彼女が告げた突然の敗北宣言に、ギャラリーはザワザワと騒ぎ出す。それも当然で、最後に均衡が崩れたものの、彼女はまだ余力を残しているように見えたからだ。それがこのタイミングで降参するのは納得がいかないと思ったのだろう。

だが一度彼と戦ったことがある刹那には分かっていた。どうして彼女が負けを認めたのか。そして、彼女にそう思わせるほどの実力を見せつけたダンテの強さを。

ギャラリーの中へ戻っていく刀子の背中に、学園長が声をかける。

「フォフォフォ、彼は強かったじゃろ？」

「はい。それはとても」

妙な意地を張るような虚栄心もないので、刀子は正直に答えた。

その答えに満足したのか、学園長はフォフォフォと笑う。

「そうじゃろそうじゃろ。何せ昨日の侵入者を倒してくれたのは、他ならぬダンテ君なんじゃからの」

さらりと重要なことを言う学園長に、刀子を含め思わず全員が瞠目した。

昨夜の警備の隙を突き、多数の鬼が侵入したという報告があった。出現エリアは麻帆良女子寮。つまりは学園長の孫を狙っての犯行である。実は一か月半ほど前から、侵入者によって貴重な魔法書が眠る図書館島を中心に襲撃されていたので、一月前から人員をそちらに割くことにしていた。そこを狙われたのである。おそらく最初から彼女を誘拐するために、侵入者達は何カ月も前から計画を練っていたのだろう。

召喚した術者――――後に関西呪術協会の手の者と判明する――に関しては警備員である龍宮が捕らえたのだが、魔法先生に引き渡した際に彼は妙なことを言っていた。曰く、召喚した鬼は何者かによってすぐに消滅させられたというのだ。

誰も応援に向かうことができなかった状況を考えると、その何者かは警備員ではないイレギュラーである可能性が高い。そのために術者の取り調べと並行してその人物を捜索することになっていた――のだが、まさかそれが学園長の招請した助っ人だったとは、彼らは露ほども思ってなかった。

「あなたが侵入者を？」

「まあね」

刀子の問いにダンテはどうでもよさそうに答えた。まるで礼を言われるようなことではない、とでも言うかのように。

実際、彼がいなくとも何とかなった可能性は高い。術者は早々に

捕らえられたし、召喚された鬼は数だけは多いが程度の低いものばかり。刹那一人でも倒しきるのは難しいことではなかった。

しかし警備員達にとって見れば、ダンテは学園長の孫の危機を救った恩人であり、しかも自分達警備員のミスの尻拭いをしたということになる。たとえ彼らがミスしたわけではなくとも、侵入者に謀られたのは事実。

これにより、ダンテに対する不平不満は完全に封じられたのである。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　４　デビルハンターの力（後書き）

第四話終わりました。ダンテの強さを如何なく発揮した手合わせでした。

今回の手合わせに刀子を選んだのは、単純に剣術を使うのが彼女だけだったということもあります。というか剣を持たないと、他の魔法先生では一撃で負けると思います（タカミチは除く）。学園都市の魔法先生の強さが平均３００（刀子は１０００？）くらいですから、ダンテではまるで相手になりませんしね。

始めて詳細な戦闘シーンを書きましたが、何か分かりにくい点はありませんでしたか？もし「ここがどういう描写だったのか分かりづらかった」などという点がございましたら、遠慮なくおっしゃってください。修正して、次の執筆に活かしたいと思います。

それでは、また次回お会いしましょう。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　５　悪魔狩人と真祖の吸血鬼（前書き）

投稿時において、エヴァが木から落ちた後でパニックになりどもった際、吃音者という表現が使用されていましたが、この言葉が障害者を例に使用していて少しよろしくないというご指摘を受けましたので訂正いたしました。不愉快な思いをされた方々に謝罪いたします。申し訳ありませんでした。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　５　悪魔狩人と真祖の吸血鬼

５／

「お疲れ様。大変だったね」

夜間警備員が解散し、あと数人を残すことになった世界樹広場。その中の一人であるタカミチは、手合わせを終えてリベリオンをギターケースに仕舞い、それを肩に掛けるダンテに労いの声をかけた。

「そうでもないさ。それなりに楽しめたしな」

「まったく。刀子さんとの手合わせをお遊びなんて言うのは君だけだよ」

「そうか？」

手合わせをなんてことのないように話すダンテと、そんな彼の余裕を見て苦笑するタカミチ。そんな気さくに話し合う二人に、一つの影が近づいていった。

「あの……」

後ろから声をかけられたダンテが後ろを向くと、自分のクラスの生徒が立っている。それも昨夜に剣を交わした少女剣士――――刹那だったので、彼はタカミチとの会話を中断させて彼女に向き直っ

た。

「どうしたお嬢ちゃん？」

お嬢ちゃん呼ばわりされて少しムッとする刹那だが、今は別の理由で来たのだと言い聞かせる。

「き、昨日はろくに話も聞かず、あの、その……申し訳ありませんでした……」

そう言って、刹那は礼儀正しく頭を下げた。

昨夜の邂逅の後、応援に保護された彼女はとても話を聞ける状態ではなかったので、その日は一先ず女子寮に送り届けられて体を休ませた。翌日、早朝から学園長室に呼び出された彼女は、自分が見た男の特徴、戦闘のスタイルを事細かに伝えることになった。

報告を聞いた学園長は彼女に労いの言葉をかけると、何も心配はいらないと言って教室に帰した。しかし彼女がそれで安心するわけもなかった。何しろその男は自分の正体に感づいたのだ。何時自分の正体がバレるかと、その日の午前中はやきもきとした気持ちのまま過ごすことになった。

それが一変したのが帰りのＳＨＲでのこと。その日に着任する副担任を紹介するという話だったので席に座って待っていたのだが、驚いたことに教室に入ってきたのは件の侵入者、ダンテだったのである。その時は思わず大声を上げそうになったが、何とか堪えることができたのは奇跡としか言いようがない。彼も刹那に気がついたようで、一瞥された時は何を言われるか気が気ではなかった。

ＳＨＲの後にすぐ学園長室に直行して学園長を問い詰めると、彼は学園長が雇った便利屋で、身元も確かであると告げられた。何故教えてくれなかったのかと尋ねると、学園長はその理由を答えた。

実のところ、彼女から報告を受けた時点で、彼はその正体不明の男がダンテであることに気が付いていたと言う。赤コートの銀髪外国人など彼以外に有り得なかったからである。

そこで学園長は一計を巡らす。警備員達にダンテを紹介するまで、この事実を隠しておこうと。

彼を雇うことを決めた時点で、警備員達に受け入られるのは難しいと思っていた。伊達に関東魔法協会の長の椅子に座っているわけではない。下の者の考えることなど知り尽くしている。加えて彼はあの性格なので、警備員達との衝突は避けられないだろう。

そう考えた学園長は一計を巡らせる。ダンテが侵入者を撃退したという事実を伏せ、警備員以外の何者かの仕業にしようと。そして自己紹介の時に彼の実力を見せ、その上で昨日のことを話せば、警備員達も納得せざるを得ないだろう――――と。

学園長に理由を聞いた刹那は、理屈では納得できるものを感じながらも、感情が納得しなかった。外部の人間を雇うだけならともかく、２－Ａの副担任に任命してお嬢様に近づけさせるなど正気とは思えない、と。故に、先程の手合わせでダンテを見極めようとしたのだ。

ところが彼は魔法先生と遜色ない実力を見せつけた。それも手合わせとは言え、自分が師事していた葛葉刀子をあしらうほどの実力を。

お嬢様に近付けるのは今でも反対だが、警備員としては信用しよう。そう自分を納得させた彼女は、まず昨夜のことを謝らなければならないと思い、こうして頭を下げに来たのだった。

「構いやしないさ」

しかし、ダンテはそんなことを根に持つ狭量な人間ではない。気障な笑みを浮かべると、別に気にしてないと言って肩を竦めた。

「ですが……」

しかし、刹那はそれでは自分の気持ちが納得しないと食い下がってくる。自分の非があればちゃんと謝りに来るあたり、彼女は根が真面目な良い子だということが分かるが、少し融通が利かないのが欠点だ。

そんな彼女の性格を担任なだけあって分かっているのか、横から二人を傍観していたタカミチが助け船を出した。

「刹那君。ダンテが気にしないと言ってるんだ。気にするだけ損だよ」

「は、はぁ……」

担任の進言に、刹那は間の抜けた声を出す。

「おいおい、タカミチ。そいつは悪かったな。気にする必要もないってか？」

ダンテの皮肉を籠めた言葉に、別にそういうわけじゃないよ、とタカミチは苦笑を浮かべながら否定する。そんな遠慮のない軽口を叩き合う二人のやり取りを、刹那は呆と眺めていた。

「それにしても……」

一通り軽口を叩くと、ダンテが急に真顔になって視線を上――――世界樹に向ける。

「お前はどうしてそこにいるんだ？」

「――――ほう、よく気が付いたな」

ダンテの問いに、鈴を転がすような声が答えた。

その言葉を合図に枝木の影から姿を見せたのは、金色の髪を腰以上に伸ばした小柄な少女、２－Ａの生徒エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルだった。その隣には、同じクラスの生徒である絡繰茶々丸の姿も見える。

「エヴァ、君も来てたのかい？」

タカミチが珍しいものを見たかのような顔でエヴァを見る。付き合いが長い彼にしてみれば、彼女がこういう場に赴くわけがないと思っていたからだ。

そんな彼の内心が読み取れたのか、彼女は眉に皺を寄せて眼を細めた。

「ふん、じじぃに呼ばれたからな。仕方なくだ」

「フォフォフォ、警備員ならばお主と顔合わせぐらいせんとな」

学園長は髭を擦りながら笑った。けれども、エヴァは口では仕方なくと言ったが、本当は学園長が高級茶菓子を餌に呼び出したのは二人だけの秘密だ。

二人との会話を終えた彼女は、ダンテを尊大な表情も隠さずに見下ろした。

「改めて自己紹介といこうか、先生……いや、ダンテ・レッドグレイヴ。とんだ茶番劇だったが、なかなか面白いものを見せてもらったぞ。たかが手合わせとは言え、刀子をあしらうとはな」

そう居丈高に語るエヴァは、寒さの厳しい一月でありながら露出度の高いゴスロリファッションだった。茶々丸も何故かメイド服を着ている。並べてみると、二人はまるでお嬢様とその従者といった様子だ。事実、二人は真に主従関係を結んでいるのだが。

当然そんなことを知らないダンテは、二人の格好を不思議そうに眺めながら尋ねた。

「そんなことより、大丈夫か？」

「？」

ダンテの問いにエヴァは怪訝な表情を浮かべる。彼の顔には心配そうな感情が見て取れる。何か心配されるようなことをした覚えがないので、彼女は首を傾げた。

もしや計画を感づかれたかとも思ったが、彼が着任してからは魔力補充を行っていないので、知っているはずがない。そもそも、学園長にさえ気付かれずに計画を進めてきたのだ。彼が知り得る可能性は全くないと言ってもいい。

ならばどういう意図の発言かと彼女が考えていると、ダンテは嫌味ったらしい笑みを浮かべた。

「ママに黙って夜遊びとは感心しないな。お子様はおネンネの時間だぜ？」

「な……！」

隣にいた刹那が焦った顔でダンテを見た。エヴァの正体を知る彼女にしてみれば、彼の挑発じみた発言は無知が生む無謀であり、まさに自殺行為としか思えなかったからだ。

しかし、もう口に出してしまったことは覆らない。彼の言葉を聞き、頭の中でその言わんとするところを理解したところで、エヴァは額に青筋を浮かべた。

「――――ほう、よく言った。まさかこの私にそんな言葉を吐く命知らずがいようとはな」

怒り心頭といった様子で彼を睨みつけるエヴァ。その冷徹な双眸がダンテを射抜くと同時に、刹那は両者のいる空間の温度が急激に下がっていくように感じた。

「怒るなよ。ちょっとした冗談だ」

しかしエヴァの威圧にもまるで無関心なダンテは、余裕綽々の笑みを浮かべて鋭い視線を受け流す。その様子を間近で見ていた刹那は、何時彼女の怒りが爆発するかと冷や冷やしていた。

現在はあることが原因でその力を失っているとはいえ、かつては裏の世界でその名を知らぬ者はいないとまで言わしめた大魔法使いである。たとえ知らなかったとしても、その人物をしてお子様呼ばわりする彼の胆力に、彼女は呆れると同時に感心してもいた。

「冗談だと？ならば言う相手を間違えているぞ。『闇の福音』、『禍音の使徒』、『不死の魔法使い』と呼ばれ恐れられた、このエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルになぁ！」

両腕を目一杯に広げ、何か効果音でも聞こえてきそうなぐらいのポーズを決めるエヴァ。これ以上ない決まり文句に若干恍惚とした表情を浮かべている。その後ろでは茶々丸が無表情のまま控えているためか、余計それが強調されていた。

一つ誤算だったのは、裏の世界の便利屋であるダンテの知識が、悪魔に関するそれに偏っていたことだろう。

「知らないな」

知らないという一言で片付けられ、エヴァはギャグ漫画のようにずっこける。当然彼女が立っていた場所は枝木の上であり、いくら巨大な樹木といえども足場は狭い。よって、足場から足を滑らせた彼女は世界樹から落ちてしまった。

突然のことで、浮遊術を使うことを忘れていた彼女は、地面の激突を予感し目を瞑る。相当な高さがあるため、もしそのまま地面に激突すれば大怪我は免れないだろう。

しかし、その心配はなかった。丁度彼女の落下地点にいたダンテが受け止めたのだ。彼女は衝撃が思ったよりなかったことを不審に思い、そろそろと目を開く。

そこに映ったのは、気障な笑みを浮かべるダンテの姿だった。

「な、ななな!?」

「ワォ、随分とカワイイ雨が降ってきたもんだな」

そう言ってダンテは空を見上げた。だが映るのは大きく枝葉を広げる世界樹と、腰部と脚部の噴射口から火を噴いてゆっくりと下りてくる茶々丸の姿のみで、空自体はほとんど見えない。そもそも女の子が降る天気などあるわけがなく、その所作が彼の皮肉の籠(こ)もったジョークであることは明白だった。

また、普通なら茶々丸の腰部と足に噴射口が付いていることにも驚くべきだが、彼は別段驚くこともなく受け入れていた。今日のＳＨＲで、彼女が既に人間ではないと分かっていたからだ。彼にしてみれば、関節部分や耳のセンサー、後頭部のネジを見て誰も疑問に

思わなかったのかと逆に不思議がっていたぐらいだ。

彼女が下りてきたのを見届けると、彼は腕に抱いたエヴァを彼女に差し出した。

「ほら、落し物だ。今度からは手を繋いでおくことをお勧めするぜ」

いまだに現状が飲み込めずにパニックに陥っているエヴァを差し出された茶々丸は、一瞬戸惑った様子を見せたが、暫くすると素直に受け取り律義に頭を下げた。

「……ありがとうございます、先生」

状況を掴めないエヴァはわたわたしながらどもっていたが、ようやく抱き上げられている状況に気が付き抗議の声を上げる。

「ちゃ、茶々丸！こんな奴に礼を言う必要はない！」

「ですがマスター……」

そう言いながら茶々丸はエヴァを下ろす。ようやく自分の足で立った彼女は、グルリと勢いよく首をダンテに向け怒鳴り散らした。

「大体何だ貴様は！この私を知らんだと？この闇の福音を！」

大声で喚き散らすエヴァに対し、ダンテは首だけ横に向けて隣にいたタカミチに尋ねた。

「で？このお子さまの言ってるのは本当なのか？」

「そうだね。全て本当のことだよ」

タカミチはダンテの問いに正直に答えた。

彼が言うには、エヴァンジェリンと言えば誰もが恐れる真祖の吸血鬼で、魔法世界では『闇の福音』、『人形使い』、『不死の魔法使い』、『悪しき音信（おとずれ）』、『禍音（かいん）の使徒』、『童姿の闇の魔王（わらしべすがた）』などの様々な異名を持ち恐れられていた最強の魔法使いらしい。現在は無効になってはいるが、かつては六百万ドルもの懸賞金が懸けられた賞金首でもあったようだ。

「何でそんな奴がここに？」

当然湧いてくる疑問をダンテが尋ねると、どうやらナギ・スプリングフィールドという魔法使いによって捕らえられ、ここ麻帆良学園に連れて来られたらしい。しかも厳重な封印で力を封じられているため、ほとんど害がないのだという。

「なるほどね。どうりで生意気なガキだと思ったら……」

「誰がガキだ！私はお前より年上だぞ！」

そう言って小さな体を使って怒りを表現するエヴァ。その姿はまさに子供そのもので、彼はつい吹き出して大笑いしてしまった。

「笑うな！」

「だってお前……ムキになって喚くところなんて、まんまガキだろ」

二人が言い争う――――エヴァが一方的に喚き散らしているだけだが――――のを、学園長とタカミチが眺めている。その中で、刹那は彼女をからかって遊ぶダンテの横顔をジッと見つめていた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　５　悪魔狩人と真祖の吸血鬼（後書き）

第五話を投稿しました。今回はダンテとエヴァの初邂逅の話となります。教室でも一応顔を合わせていますが、その時は教師と生徒としての顔合わせであり、同僚としては初邂逅となっております。

本作では、両者はお互いのことを知らないということにしました。十五年前に麻帆良に封印されたエヴァはそれ以来外界の情報を収集しなかったために、ダンテはそもそも悪魔にしか興味がなく魔法使いに関して知らなかったためです。ですが実のところ、ダンテ自身は知らずとも魔法使いの中にはある事件で彼を知っている者もいます。それもいずれは書こうと思っているので、楽しみにしていてください。

あと、途中で吃音者と言う単語が出てきます。これは発音時に言葉が連続で発せられたり、言葉が円滑に喋れなかったりする言語障害のような病気です。ＤＭＣ４のアグナスのような喋り方と言うと分かりやすいでしょうか。もし読者の中で「吃音者を例えに用いるべきではない」、「吃音者を例に用いられて不愉快」と思われる方がおりましたら遠慮なくおっしゃってください。すぐに訂正いたします。

最後に、そろそろ原作の時間軸に入る前に質問なのですが、ストーリーで原作と大して変化がないところは省略しても構わないでしょうか？例えばネギの惚れ薬騒動やドッジボール対決などは、ダンテが直接関わらず全く変化が無いストーリーです。そこをいちいち書くのは正直意味が無いのではと思いまして。

ですが、読者の中には「ネギまは読んだことないけどＤＭＣが好

きだから読んでいます」という人もいるかもしれません。その人達に対する配慮を考えると書かなければならないのかと思うのですが、どうなんでしょうか？もし特に指摘がなければ、必要の無いところはカットしていきたいと思います。

では次話でお会いしましょう。おやすみなさい。

追記

冒頭でも書きましたが、吃音者の表現については訂正いたしました。ご指摘いただきありがとうございました。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　６　不幸の形（前書き）

前話において、原作と変わらないエピソードは飛ばしても良いかと読者に聞いたところ、「原作と全く変わらないなら書かなくてもよい」、「ダンテの存在によってキャラクターの心情や行動に変化があるなら書いてほしい」とのご指摘を頂きましたので、そうしたいと思います。ご指摘をくださった方々に感謝します。ありがとうございました。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　６　不幸の形

６／

深夜の桜通りを進む二つの影。女子寮へと続く道を彼らは黙々と進んでいる。一人はダンテ。彼は破れたコートを肩に引っ掛けながら、ゆったりとした足取りで歩いている。その五メートルほど後方を、付かず離れずといった距離で歩く小さい影があった。刹那である。エヴァとの顔合わせの後に解散した二人は、共に女子寮住まいで帰り道が同じなので、一緒に帰路に就いていたというわけだ。

二人はこうして一緒に帰ってはいるが、いまだに一言も口を利いていない。しかし、なにも二人の仲が悪いというわけではない。彼は特に話すことがないのに対し、彼女には尋ねてみたいことがあるのだが、先日の出来事と、そのことで彼にどんな反応を返されるのかが恐ろしく、尋ねられないのである。

彼女が口を開きかけてはまた閉じるという動作を繰り返している。それを見かねたのか、彼は埒が明かないといった様子で話しかけた。

「何か聞きたいことでもあるのか？」

「っ！」

先を越されたことで驚き、刹那の口から小さな声が漏れる。

「こっちも後ろでそんな態度をとられると気になって仕方ないんだ。言いたいことがあるんなら聞くぜ？」

一緒に歩き始めてからすぐに、刹那の話しそうで話さない態度に気が付いていたのだが、彼女の問題だからなのと面倒臭いこともあって何も聞かずにいた。だがいい加減、この一種の異様な雰囲気にダンテも堪えきれなくなっていたのだ。

彼に急かされたからだろうか。彼女は目を閉じて一呼吸置き、弱々しい声で話し出した。

「……先生は、私のことをどう思っていますか？」

「あん？」

質問の意図が分からず、ダンテは間抜けな声を出した。

「以前あなたは言いましたね。私から魔の匂いがすると。確かにその通りです。私は……人間ではありません」

自分が人間ではないことをあっさりと白状する刹那に、ダンテは疑問に思った。先日の彼女の様子から見て、自分が人間ではないことを頑なに秘密にしているように感じたからだ。

それが今になって、自分の秘密を話したのにはどういう心境の変化があってのことなのか、彼には分からなかった。

「……じゃあ刹那は何なんだ？」

「……う、烏族と人間のハーフです」

「烏族？」

聞きなれない単語が出てきたので、それが何なのか尋ねる。

刹那曰く、烏族とは日本の妖怪の一つに数えられる種族であると言う。見た目は人型で、背中には翼が生え、顔は烏という姿であると言う。彼女はその血を半分受け継いでいると言うのだ。

「――――なるほどね」

刹那から感じた人外の気配はそういう理由があってのことだったのかと一人納得していると、彼女はその自信のない視線をダンテに向けながら尋ねた。

「……先生は何とも思わないのですか？」

「何が？」

本当に何故？といった表情で振り返るダンテに、真面目に取り合ってくれていないと感じた刹那はついカッとなって怒鳴り返した。

「何がって……私は人間じゃないんですよ！？化け物なんです！それなのにどうして……先生は私を拒絶しないのですか！？」

刹那はわけが分からず混乱していた。先日の手合わせの時も、彼女が人間ではないことを知っていながら、ダンテは嫌悪や拒絶の意思を見せるどころか、温かい視線まで送って見せた。先程も、エヴァンジェリンを吸血鬼と知りながら、恐れるどころか、あまつさえ

からかうことを止めず、普通の人間と同じ態度で振る舞っていた。

人間は自分とは違うものを恐れるものだ。刹那の里でもそうだった。彼女は烏族の父と人間の母の間に生まれ、ある理由から忌むべきものとして疎まれていた。その頃の記憶がトラウマになり、自分は誰もが恐れる化け物だと思い込んで生きてきた。

しかし、彼を見ていると今までの自分は何だったのかという気持ちに駆られてしまう。もしかしたら自分のことを受け止めてくれる存在かもしれない、と。だが、本能的にアイデンティティの崩壊を予感した彼女にとって、彼の態度は決して認められるものではない。

自分は化け物であるが故に、人間から忌み嫌われなければならないのだという勝手な思い込みが、彼女を激情に駆り立てていた。

一方的に熱くなる彼女を横目で確認しながら、ダンテはかぶりを振った。

「まあ、確かに普通の人間じゃないな」

「それが分かっていているなら……」

「それがどうした？」

「な……」

ダンテの投げやりな発言に、刹那は思わず絶句した。

――この男は今……何て言った？――

「周りの奴らがどう思おうが関係ないだろ。俺は俺、お前はお前だ」

ダンテは言う。他人の評価など気にしなくて良い。自分を持っていれば生きていけると。

確かに、彼の言うことは正論かもしれない。だが刹那にとって見れば、それは上辺だけの綺麗事にしか聞こえなかった。自分がどれほど酷い仕打ちを受けてきたのか、この男は自分のことなど何も知らない癖に、と。

「……にが……ると……ん…すか」

「ん？」

ぼそりと言った言葉が聞き取れず、ダンテは振り返って聞き返す。その時点で、ゆっくりと進んでいた二人の歩みは止まっていた。

その瞬間、刹那が今まで心の中に抑え込んできた悲痛な叫びが、口を突いて出た。

「あなたに何が分かるというんですか！何も知らない癖に！あな

たみたいにお気楽に生きてきた人には分からないでしょう……！私の境遇を、今まで受けてきた仕打ちも！」

そう叫ぶ刹那の目からは涙が溢れる。彼女は自分が涙していることにも気が付いていないだろう。それほど今の彼女には余裕がなかった。

一方で、まさか涙まで見せられると思わなかったのだろう。顔には出さなかったものの、ダンテは珍しく対応に困った。女に泣かれるのは、テメンニグルでレディが父アーカムの死体――――実際は生きていたが――――を前にして涙ぐんだのを見た時以来である。

確かに刹那の言うことにも一理ある。不幸の形は人それぞれで、それを理解できるのは同じ痛みを持つ者だけだ。家族のいる者が、家族を失った者の悲しみや苦悩をどうして理解できようか。差別を受けたことのない者が、差別を受けた者の痛みをどうして理解できるというのか。誰にも理解できるはずがない。

彼の言葉が綺麗事だと思ったのも、彼女の境遇を考えてみれば仕方のないことだったのである。

「……まあ、確かにそうかもな。悪かった」

それを理解したからこそ、ダンテは肩を竦めて同意するしかなかった。そして、もう話は終わりとばかりに振り返り、女子寮入り口に向かう。刹那は怒りをぶつけて息が切れたのか、彼を止めることはしなかった。

「もう話は終わりにしようぜ。明日も学校があるんでね」

それだけ言って、ダンテは女子寮に消えていった。

後に残された刹那は暫くその場に立ち尽くしていたが、ふと自分が涙を流していることに気が付き、右腕で涙を拭う。

その後のこと、彼女はよく覚えていない。気付けば彼女は駆け足で自分の部屋に入ると、すぐさまベッドに向かっていた。視界にまだ起きている龍宮がいたが、それすらも無視してベッドに潜り込む。

掛け布団を頭まで被りながら、刹那は思う。何故あんなことをしてしまったのかと。

確かに彼は自分のことを知らなかったかもしれない。だが、彼はきっと自分のことを想って言ってくれたのだろう。それがどうだ。ただみっともなく喚き散らして、彼に八つ当たりしたのだ。きっと呆れられたに違いない。それどころか、もう見限られたかもしれない。せっかく彼の真意を聞こうとしていたのに、その機会はもう訪れないだろう。

――私は……なんて、愚かだ――

掛け布団の端を握り締めながら、彼女は声を殺して泣いた。

◇

翌日の管理人室において、ダンテはいまだに眠りこけていた。時

間は七時を回り、このまま眠り続ければ遅刻確定である。

しかし、学園長が何の対策もとらなかったわけではない。今度は遅刻しないようある人物を派遣したのである。

――――ピンポーン――――

管理人室のチャイムを誰かが鳴らす。その音にダンテが反応して瞼を震わせるが、そこまでだった。その後に数回チャイムが鳴るが、今度は瞼すら動くことはない。チャイムの音程度では彼を起こすことは敵わないようだ。

その頃、管理人室のドアの前には学生服に身を包んだ二人の少女が立っていた。

「ねえ、もう出たんじゃないの？」

隣の子にそう話しかけるのは、亜麻色の長髪を鈴の髪飾りでサイドポニーテールに縛った活発そうな少女、神楽坂明日菜。

「んー。でもおじいちゃんに起こすよう言われとるしなー」

少女の言葉に答えるのは、艶やかな黒髪を腰まで伸ばした大和撫子然とした少女、近衛木乃香。名字から言わずもがな、学園長の孫に当たる人物である。

「それにしたって遅くない？どうせ出ちゃったのよ、きっと」

早く行かなければ遅刻すると考えた明日菜は、きっと彼はいないと楽観的に考え、早く自分達も行こうと急かす。

そう、学園長が送り込んだのは自分の孫だったのだ。昨日の遅刻から、これからもダンテが遅刻するに違いないと考えた学園長は、自分の孫である木乃香にその役目を任せたのである。

明日菜の言葉に少し悩んだ彼女は、バッグから鍵を取り出す。

「え？ちょ……」

明日菜が止める間もなく、木乃香はその鍵を鍵穴に差し込み、回した。しかし、鍵が開いた手応えがない。

不思議に思って木乃香がドアノブに手をかけて回すと、ガチャンと扉が開く。どうやらダンテは鍵をかけていなかったようだ。

「あれ？開いてるやん」

あっけらかんと言う木乃香に対し、明日菜は友人のいきなりの行動に突っ込んだ。

「それよりも！このか、鍵持ってたの！？」

「おじいちゃんから貰っとったんよ。“どうせ寝とるからどんな手を使ってでも叩き起こせ”って……」

「そ、そうなの……」

どんな手を使ってでも、という言葉に寒気を覚える明日菜。確かに昨日の大遅刻を顧みればそれぐらいのことをしなければ起きないだろうと、彼女は自分の認識の甘さから出た先程の楽観的な発言を

反省した。

ドアを開けた二人は管理人室の中に入る。するとすぐ視界に入ったのは、玄関先にあるブーツ。これは昨日彼が履いていたブーツなので、どうやらまだ部屋にいるらしい。

次に廊下の奥を見る。突き当たりにはフローリングの部屋が見え、そこに見える足が彼のものだということを知らせてくれる。少しも動かないのを見ると、まだ起きていないようだ。

「ちょっと、まだ起きてないの？先生としてどうなのよ？」

「あはは、アスナはアホやなー。だからウチらが起こしに来てるんやえ？」

「あ、そうか……って今アホって言った！？」

一人でノリ突っ込みをする明日菜を見て、木乃香は笑った。

漫才もそこそこに、二人は奥の部屋に入っていく。そこで見たのは、一人用のベッドに寝転がり寝息を立てているダンテの姿だった。服が昨日と変わっていないので、着の身着のまま眠ってしまったということが分かる。

ベッド脇に立った明日菜はさっそく彼を起こそうと肩を揺することにした。

「ほら、先生！起きなさいよ！」

明日菜が声をかけて揺さぶってみる。しかし、随分と強く揺すっ

たはずなのに、ダンテは身じろぎもしなかった。

「ちょっと！起きろー！」

業を煮やした明日菜は、今度はダンテの胸倉を両手で掴み、持ち前の怪力で首が前後にガクンガクンと揺れるぐらい振り回した。するとようやく効いたのか、彼がゆっくりと瞼を持ち上げた。

目を開けた彼はまず目の前にいる明日菜を見て、後にその後ろに立っている木乃香を見る。そして周りの様子を窺うと、彼は二人に向かって寝起きの第一声を放った。

「お前らここで何してんだ？」

何とも間抜けな質問に、明日菜は溜息を吐く。

「何って……先生を起こしに来たんですけど」

そして二人が来た目的――――学園長に頼まれて起こしに来たことを伝えると、ダンテはすぐに身支度を整え始める。さすがに二日続けて遅刻すると新田先生にどんなお叱りを受けるか分からないからだ。

とは言っても、いつも着ているコートは昨夜に駄目になったので、準備はバッグを背負って終わり。つまりは寝た時と服装は変わってないということになる。

それに難色を示したのは明日菜だった。服ぐらい変えたらどうかと指摘するものの、彼が服はこれ以外洗濯中だということを伝えると、彼女は不潔ですねと言ってそそくさと離れた。

準備が整った三人は女子寮を出ると、すぐに駅へ向かう。電車に乗り込んだ彼は、学生の数にまず驚いた。彼は昨日遅刻をしたので、この通学時間帯の電車に乗り合わせたことがなかったのである。

「あんなー、先生。駅降りたらもっと驚くと思うえ」

その様子を隣で見ていた木乃香が、ほんわかした微笑みをダンテに向けながら言う。その予言じみた発言は、正しくその通りになった。

麻帆良学園中央駅に着いた瞬間、乗客が一斉に改札口に向かって動き出す。二人もその流れに乗って走り出したので、彼も少し遅れてついて行くことになった。

彼が二人の後をついて行きながら周りを見ると、学生の群れが大通りを流れていくのが見える。路面電車に乗る者がいれば、スケートボードに乗ってその後ろに捕まっている者もいた。そして驚くべきことに、その路面電車より早く疾駆する学生達の姿が。

どこの世界に乗用車やバイクと並走する学生がいるだろうか。否、いるはずがない。

彼も大概常識とは無縁の非常識な存在ではあるが、これを見ているともう一度常識について考えてみたくなった。

その時、彼は覚えのある気配を感じ取った。その気配は三人の後ろを付かず離れずの距離を保ちながらついて来ている。肩越しにチラッと後ろを確認すると、そこには昨夜言い争って別れた刹那がいた。彼女は調子が悪いのか、少し覚束ない足取りで走っている。そ

れでも相当な速さでついて来ているのだが。

その様子から、昨夜のことが尾を引いているのだろうと彼は確信した。彼があからさまに見つめているのに、彼女は全く気付いた様子がないのだ。どうやら精神的に相当参っているらしい。

これはもう一度話し合うべきかと考えるが、自分が歯に衣着せぬ性格であることはよく知っている。もう一度話し合った結果、自分の無神経な一言が再び彼女を傷つける可能性は否定できない。

今はどうしようもないと思いながら、彼は二人と共に麻帆良学園まで駆けていった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　６　不幸の形（後書き）

第六話『不幸の形』を投稿しました。このタイトルはトルストイの『アンナ・カレーニナ』の冒頭の一文を参考にしました。

その一文の意味は、幸福な家庭はみな似通っているが、不幸な家庭には他人には分からない様々な形があるということらしいです。ですが、私は不幸な家庭という狭い範囲ではなく、不幸自体に様々な形があると考えてこのタイトルにしました。

今回の話は、ダンテと刹那の確執をテーマとして描いた話でした。二人は同じハーフなのに生き方は対称的ですよね。自分は人間だと言って誇りを持って生きるダンテと、自分は化け物だと卑下して自身を厭う刹那は、ハーフでありながら正反対の人生を辿っていると言えます。これから二人の関係はどうなるのか、楽しみにしていてください。

そして明日菜と木乃香が初登場しました。ダンテをちゃんと通勤させるには誰かが目覚まし代わりにならないといけないと思い、誰が適しているかと考えた結果、木乃香に白羽の矢が立ちました。学園長の孫という立場は便利ですね。

ちなみに明日菜は彼女のついでです。いつも一緒に登校しているので明日菜も自然と目覚まし係になりました。これでネギまで来たら、ネギ・ダンテ・明日菜・木乃香が一緒に登校するというシュールな光景が見られることに？一度それを書いてみたい気がしますが、そこにねじ込むネタがないので書かないかもしれません。モチベーション次第ですね。

あと木乃香の京都弁について突っ込みどころはありますか？一応京都弁に翻訳したりして確かめてはいるんですけど、木乃香らしく話せているでしょうか？何か不自然な点がございましたらご指摘してくださると幸いです。

何か長々と書きましたが、次の話はダンテの仕事風景でも書きたいと思います。もちろん表の方の仕事を。とは言っても事務的な仕事はできない……と言うか私自身がその様子を想像できないので、肉体労働の方をですが。

では次回にまたお会いしましょう。それでは。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　７　学園広域生活指導員

７／

ダンテが初めて迎えた休日。いつもの彼ならば部屋の中で惰眠を貪っていてもいいはずなのだが、あいにくと今日は学園広域生活指導員としての仕事が入っているために街を回っていた。

彼の性格上サボる可能性は十分にあったはずだが、彼を雇うと決めた時点でレディが学園長に助言していたため、仕事をサボることができないよう対策を施されていた。

ダンテが依頼に違反することをした場合、給料からその分を差し引くように契約がなされていたのだ。依頼達成に支払われるお金とは別に、麻帆良での生活費として支払われる給料があるのだが、サボればサボるほどそこから給料が差し引かれるため、生活すら危うくなってしまうのである。故に先日の大遅刻で、給料からその分を天引きされると学園長から聞いた時は、彼も思わず頭を抱えたものだ。さすがに仕事仲間として付き合ってきただけはあり、彼の行動などお見通しだったらしい。

そういうわけで、彼は仕方なく広域指導員として職務を全うしているというわけだ。

彼の担当は麻帆良学園周辺である。今日は休日とはいえ、部活が

あれば生徒の姿もちらほら見られる。その中に知った顔はいなかったが、赤いコートの教師として他学年でも有名なのか、彼が歩いていると知らない生徒からも挨拶されるということが何度かあり、少し面倒だと思っていた。

ただし広域指導員と言っても、要は街をぐるぐる回って異状があれば解決すればいいだけであり、異状がなければただの散歩と変わらない。なので、彼はそれほど苦もなく自分の仕事をすることにした。

しかし、そう上手くはいかないのが広域生活指導員の仕事である。たとえ自分から首を突っ込まなくとも騒ぎの元は自らやって来るのだと、彼は認めざるを得なかった。

彼が機嫌良く歩いていると、道の先から埃を巻き上げながら疾走する集団が見えた。これだけならば見て見ぬふりをして通り過ぎることもできたのだが、そうもいかない事情ができた。その集団の先頭にいる人物――――朝倉和美が自転車に乗り、何かに追われるように後方を確認しながら走っていたのだから。

一瞬脇道に入ってやり過ごそうかと考えたが、その一瞬の逡巡が明暗を分けたようで、先に彼女の方がダンテに気付いてしまった。これでは誤魔化しも利かないと判断した彼は、彼女が来るまで待つことにする。

「先生！いいところに来たね！」

息を弾ませながら言う和美に、いや、来たのはお前だろとツッコミを入れる。そんなやり取りもそこそこに、彼女はダンテの後ろに隠れた。

その後すぐにやって来たのはいかにも不良といった様子の男達だった。全員が息を切らしていることから、相当な時間を走り回ったと見えた。自転車に乗っていたとしても、よくこんな奴らから逃げ続けられたものだと彼は素直に感心した。

「やっと追いついたぞ！」

「いい加減観念しろよコラァ！」

不良集団の取り巻きの内の二人が和美を怒鳴りつけると、その間に他の取り巻きが二人をグルリと取り囲んだ。彼女はその様子をダンテの後ろから少し困った顔で覗いている。

「おいあんた、どいてな。俺達はそいつに用があるんだ」

その中の代表らしき男がそう言うと、全員の敵意ある視線が一斉に和美に向けられる。彼女はそれを避けるようにダンテの後ろに隠れるが、どうも反省の色はなかった。

こうなっては、彼も広域指導員として諍いを止めなければならない。彼は仲裁という柄ではない行動をしなければならないことに辟易し、短くため息を吐いた。

「おいおい、少し落ち着けよ。お嬢ちゃん一人にみっともないぜ？」

「んだとこらぁ！」

どうでもよさそうな表情で止めに入ったダンテに取り巻きの一人

がいきり立つ。相当頭に血が昇っているのか、彼の話に聞く耳を持つ様子もない。

これでは話も碌にできないと感じた彼は、先ほどから背中に張り付いている彼女に首だけ向けた。

「で？これは一体どういうわけだ？」

「え～と……」

ダンテが尋ねると、和美は困り顔で答えた。なんでも、彼女が不良集団のとある秘密を記事にしたせいで、リーダーがショックで部屋に引き篭ってしまったのだという。それで記事を書いた彼女を追っていたというわけだ。

「……つまりはお前の自業自得か」

「ちょっ……！？ここは可愛い生徒を守るところでしょ！」

和美は焦った表情で助けを求めるが、ダンテにとっては至極どうでもいいことに巻き込まれていい迷惑なわけで、助ける必要がないのではないかと思い始めていた。

その雰囲気を感じたのだろうか、彼女は必死に訴える。

「いや、でもねっ。あいつらのリーダーは色々悪いことしてるし……そう！これは正義の報道なのよ！」

「てめえアホか！兄貴の人形遊びをバラすのが正義なわけあるわけないだろうが！」

和美が記事にしたリーダーの秘密とは、アニメなどのフィギュアによる人形遊びだったのだ。確かにそれを記事にされてしまえば、仲間内ならともかくとしても、第三者に知られては引き篭りたくもなる。

ダンテは彼女の滅茶苦茶な言い分に思わず頭が痛くなったが、このまま不良達に引き渡して見なかったことにするのも寝覚めが悪い。何よりも、職務を放棄してこれ以上給料から差し引かれるのは勘弁願いたかったので、彼は不良達を適当に追い返すことにした。

「ハァ……俺もはっきり言って関わりたくないんだが、これでも学園広域生活指導員なんでね。悪いがお引き取り願おうか」

「てめえは黙ってろ！ブッ殺されてぇのか！」

しかし、どうやらダンテの言葉に聞く耳を持つ者はいないらしい。それどころか、人による囲いもどんどん狭くなり、早く和美を渡せと圧力をかけてきた。

彼女はここへ来て、彼に助けを求めてきたのは失敗だったかなと思い始めた。学園広域生活指導員であるようだが、彼の様子を見る限り、自分を助ける気があまりにもないと感じ始めたからである。大体着任早々から大遅刻をかましてくるような人物である。彼の身辺を調査してみて、何事に対しても不真面目なところが数多く見られ、このまま威圧を受け続ければ不良達に引き渡されそうな雰囲気だ。

どうやって隙を見て逃げ出そうかなと彼女が算段を立てていると、

いつの間にか近付いた不良の一人が後ろから掴みかかろうとしているのに気が付いた。

――あ、マズ――

考え事の最中だったので反応が遅れる。不良の節くれ立った手が視界を覆おうとするのを、和美はボンヤリと眺めることしかできなかった。

だが――――

「痛でででででで!?」

不良の痛み悶える声に和美は驚く。見ると彼女の肩越しから伸びた腕が不良の手を掴んでおり、その手が捻じり上げられている。伸びている腕を辿ると、ダンテが挑発的な笑みを浮かべていた。

「女性には優しく、だ。ママに習わなかったか?」

そう言って手を離してやると、不良達が敵意を持った目でダンテを睨みつけた。

「てめえやんのか!」

「調子こいてんじゃねえぞゴルァ!」

完全に怒りを露わにしている不良達に、ダンテは全く気にした様子もなく周りを見渡すと、右手を差し出して言った。

「来いよ。相手してやる」

明らかな挑発に、不良達は完全にキレた。広域生活指導員だろうが関係ないとばかりに、一斉に殴りかかる。四方八方から凄まじい顔をして殴りかかってくる彼らを見て、和美は思った。

――あ、これヤバいわ――

だが、そうはならなかった。急に引っ張り上げられる感覚が体を支配したかと思うと、視界が急に変わった。いつの間にか彼女は空を飛んで――――否、空中に浮いていたのだ。

浮いていると言っても、実際はダンテが和美を抱えてジャンプしただけなのだが、彼女にとってはどちらも同じことである。

――うえええええええええええ!?――

街路樹の上に着地しながらも思わず心の中で叫んでしまう和美だったが、それだけでは終わらない。下を見ると、殴りかかった不良達がその体勢のまま地面に倒れ伏して伸びていた。彼女は見ていなかったが、ダンテが上に飛び上がった瞬間、蹴りを不良達の首に叩きこんでいたのである。加減はしたものの、こめかみや顎などの急所を狙われては、素人では意識を保つことは難しい。彼の一瞬の早業に不良達は恐れ慄いた。

「てててて、てめえ！よくも！」

しかし、このままおめおめと逃げ帰ることも不良達としてはできない。こうまで挑発されて逃げ出しては彼らの沽券に関わるからだ。

「下りてきやがれ！」

不良達の一人が叫ぶと、ダンテは和美の腰に回した手を離して自分だけ木から下りていった。

下りていった彼を取り囲むように不良達が動く。もはや彼女のことを忘れているのか、視線は彼だけに向けられていた。

そこから、彼女は見ることになる。

タカミチ以上に不良達を完膚なきまでに叩きのめす、ダンテの姿を。

不思議なことに、不良達があらゆる方向から殴りかかっても、彼の後ろには目でもついているのか、振り返ることもせずに蹴り飛ばし、または殴り飛ばす。時には華麗に躱して同士討ちを誘い、一番の巨漢がタックルで動きを止めようとしても、正面から受け止めた挙句に軽々と持ち上げて投げ飛ばし、数人を一網打尽にしてみせた。

数分後、道には不良達がズラリと転がり、その中央でダンテは悠然と立ち尽くしながら周りを見渡した。そして、立ち上がる者がいないと分かると、彼は高らかに言い放った。

「Ｓｗｅｅｔ　ｄｒｅａｍｓ．（ネンネしな）」

と――――

◇

ダンテの広域指導員としての初仕事が終わり、和美と彼は一緒に街を歩いていた。

あの後、彼は街路樹の上で呆然と見下ろす彼女を下ろしてやり、一応注意だけして先に行くことにした。だが意識を復帰させた彼女が街を案内すると言いだし、彼に付いて来ることになったのだ。

彼としては、彼女とこれ以上一緒にいるのは気が進まなかった。今回だけではなく、他にも誰かから恨みを買っているように見えたからである。これ以上騒ぎに巻き込まれては堪らないので一度は断ったのだが、彼女はしつこく迫ってくる。あまりにもしつこいので、いい加減に怒鳴りつけてやろうと思ったのだが――――

“美味しいストロベリーサンデーがある店知ってるんだけど、どうする？”

――――好物を餌に同行を認めてしまったのである。

しかし、今になって少しダンテは後悔しているようであった。和美は少し後ろをついて来ながら、彼に凄まじい質問の嵐を投げかけてきたのである。彼自身はおしゃべりだが、自分よりおしゃべりな人間は嫌いなのだ。適当にあしらってはいるが、あまりのしつこさにいい加減にして欲しいとさえ思ってしまう。

そうして暫く歩いていると、大きな施設が見えてきた。すかさず彼女から解説が入り、そこが剣道場だということが分かった。

麻帆良学園は規模が大きいだけあり、剣道場もそれに対応するかのように大きい。そこを歩きながら眺めていると、曲がり角で彼は誰かとぶつかってしまった。

「おっと」

ぶつかった相手が後ろに倒れ込みそうになったので、ダンテは肩を掴んで相手の体を支える。見ると相手は肩に見覚えのある太刀袋を所持している。彼がおや？と思っていると、ようやく相手が顔を上げた。

「あっ、どうもすみませ……！？」

感謝の言葉を述べるはずだったのだろう。途中まで言いかけたものの、ダンテの顔を確認した瞬間にその表情は強張っていた。

「あれ？桜咲さんじゃない。剣道の帰り？」

ダンテの後ろからひょいと顔を出して、ぶつかった相手が刹那だと確認すると、和美は気軽に挨拶する。しかし、刹那の目には彼の姿しか見えていなかった。

あの夜の日以来、彼女がダンテと接する機会はめっきりと減っていた。授業中であろうとＳＨＲの時であろうと、極力目を合わせないよう、たとえ警備関連の連絡があってもなるべく話さないように、彼を避けていたのだ。

彼女にしてみれば、自分は彼に嫌われただろうから、不快に思われないために近付かないようにしようと思っての行動なのだが、それは全くの見当違いである。彼にしてみれば、彼女が怒ったのは当然で、彼女が自分を避けているのも仕方のないことだと思っている。つまりはお互いに勘違いしているのだが、二人が気付くのはまだ先である。彼女が思い込みを止めない限り、二人が交わることはないのだから。

「いえ、あの……す、すいません！失礼します！」

和美の言葉にも答えられないぐらい慌てていた刹那は、よく分からない謝罪の言葉を残したままダンテの腕を振り払うように横を通り過ぎ、二人が通って来た道を遡るように走って行ってしまった。

「どうしたんだろう、桜咲さん。あんな桜咲さん初めて見たよ」

あまり親しくはないとはいえ、和美もいつもとは違う刹那の行動に首を傾げていた。彼女は殊更に騒がしい２－Ａの中でも冷静沈着な方だと思っていたのに、今の彼女は冷静さを失い、まるで何かに怯える幼い少女のように見えたからだ。

和美の的を射た発言に、ダンテは一瞬遅れて同意した。

「……そうだな」

「あれ？まさか原因は先生？なになに、教えてよ！」

ダンテの声質から何かスクープの匂いを嗅ぎ分けたのか、情報を得ようと和美は即座にどこからともなく出したマイクを向ける。おそらくマイクの先にはレコーダーが繋がっているのだろう。記者根

性を丸出しにした彼女を横目で見て、彼は溜息を吐いた。

「お前も懲りないな」

「いいじゃん。教えてよー」

「人のプライバシーを探るのは感心しないぜ」

「大丈夫だって。私の心の内に留めておくからさー」

軽い言い方からどう考えても信用できない和美の秘密を守る宣言に、ダンテは少し語気を強くして言い放った。

「誰にだって触れられたくない過去の一つや二つぐらいあるってことだ」

「……ふーん、なるほどね。先生は桜咲さんの過去を知ってるってことか……」

しかし、あまり和美には効果がなかったらしい。これでは、彼女は一度痛い目を見ない限り考えを改めることはないだろう。今日は彼女の行動に頭を悩ませるばかりだ、とダンテは再度溜息を吐いた。

そこで一度会話が途切れたので、彼は付き合っていられないとばかりに道を歩き始める。後ろを確認してはいないが、足音がついて来ているので彼女はすぐ後ろをついて来ているのだろう。早くどこか行かないのかと思いつつも、彼女が教えてくれるであろうストロベリーサンデーのことを想った。

「ねえねえ」

また来たかと思いながら、ダンテは振り返りもせずに言った。

「何だ」

「じゃあ先生にもあるの？触れられたくない過去ってやつ」

和美が軽い調子で尋ねると、急に二人の間に異様な雰囲気が流れ始める。それを肌で感じ、彼女もさすがに不味いことを聞いたかなと思っていると、ダンテは「まあな」とやけにあっさりと答えた。

冷汗を垂らしながら彼女は何か相槌を打とうとするも、何故か変な声しか口から出て来なかった。

「へ、へえ～……」

――うわ～……何か聞いてはいけない気がするなー……――

ダンテの背中から滲み出る刺々しい雰囲気に、和美はもう過去話を止めて以前聞いたことについて質問しようかと思い始める。以前答えられたことなのだから、墓穴を掘ることもないと思ったからだ。

「じゃ、じゃあさ。この前話してたことについて聞いてもいいかな？」

「……何だ？」

ダンテから承諾を貰ったので、心置きなく質問に入る和美。

「先生の家族ってさ、今どこに住んでるの？一緒に日本に来てる

とか？それともアメリカの方にいるの？」

だが、和美はあっさりと墓穴を掘った。ダンテの踏み入ってはならない領域に、彼女はズカズカと入り込んでしまったのである。いつもはお気楽で細かいことを気にしない彼も、彼女がわざとやっているのではないかと勘繰りたくなったほどだ。

だが彼女の表情を見る限り分かっていて訊いているのではないだろうし、それに彼女が知り得るはずがないので、それは単純に知りたいが故の行動なのだろう。

彼にはここで答えないという選択肢もあった。または適当に答えるという選択肢もあったはずだ。しかし、彼はあえて包み隠さず話すという選択肢を選んだ。否、選んでしまった。

「もういない」

「――――え？」

和美が呆然と声を洩らすのを聞きながら、ダンテは繰り返し言った。

「ガキの頃に全員死んだよ」

もう一度ダンテの言葉を聞き、その意味を理解する。そしてすぐに、家族は皆死んだと言う彼の背中に向かって彼女は頭を下げた。彼には見えていないが、彼女は頭を下げずにはいられなかったのだ。

「ご、ごめんなさい……！」

和美の謝罪の声を聞き、ダンテは思わず舌打ちしそうになった。これでも女子供に優しいと公言していた彼である。それが遥かに年下の少女に八つ当たりするとは、何ともみっともない醜態ではないか、と。

彼は自身への苛立ちを心の内に抑え込むと、申し訳なさそうな顔をしている彼女に向き直って両腕を広げてみせた。

そして――――

「悪いな、冗談だ」

――――先程の発言は冗談と誤魔化すことにした。

言ってしまったことを今さらなかったことにはできない。ならばそれを嘘として誤魔化すしかない。ダンテはそう考えたのである。

「へ？」

和美が間抜けな声を出した。伏せていた顔を上げ、まじまじとダンテを見つめる。どうやら彼の言ったことの意味をまだ理解できていないようだ。彼は鼻でふっと笑うと、肩を竦めながら言う。

「冗談だって言ったんだ。お嬢ちゃんに少しお灸を据えてやろうと思ってな」

片目でウインクを返すダンテ。その先程とは打って変わった彼の態度に和美は戸惑ったものの、大して気にならなかったようで快活な笑みを取り戻した。

「……な、なぁ～んだ！反省して損したよ～！」

あははは、と和美は乾いた声を上げて笑った。参った参ったと頭を掻き、冗談交じりの言葉を絞り出す。

そんな彼女の様子を見て、ダンテは溜息を吐きだして釘を刺した。

「何言ってる。少しは反省しろ。そうやって謝るぐらいならな」

「う……」

今度はぎろりと睨みつけると、和美はバツの悪そうな表情で呻いた。彼女なりに反省しているらしい。

それを感じ取って溜飲が下がったのか、ダンテは皮肉気な笑みを取り戻して肩を竦めた。

「まあ良いさ。それよりもストロベリーサンデーだ。小腹が減っちまってな。案内頼むぜ？」

ダンテは踵を返して和美に案内を促す。先程の憤然とした雰囲気を微塵も感じさせない彼の様子に、彼女も高いテンションのまま見

得を切った。

「まっかせといて！麻帆良のことで分からないことなんて私にはないんだから！」

そう言うが早いか、和美はダンテの横をすり抜けて先導を始めた。ストロベリーサンデーのある店まで案内しようというのだろう。軽快な足取りの彼女を後ろから眺めて、彼も上手く騙しおおせたかと短く息を吐いた。

しかし、彼の前を歩く和美の表情には、深く悔恨の表情が刻まれていた。

――先生、嘘ついてる……――

ダンテの表情を見て和美は内心そう呟いていた。取材などで人と正面切って話を聞くことが多かった彼女である。表情を見れば、大体その人が真実を話しているか嘘を話しているか何となく分かるのだ。

そんな彼女が確信する。家族が亡くなったのは冗談でもなんでもなく、紛れもない真実であると。

家族の死を語る彼の声質は硬く、苦渋に満ちたものだった。あれが嘘であるはずがない。おそらく、自分を傷つけさせまいと咄嗟に嘘を吐いたのだろう。ならば最初から言わなければいい話だが、最初にしつこく聞いてきたのは自分の方である。彼のせいなどと開き直ることはできない。

そこまで思案して、自分の軽率な行動で彼に辛い過去を思い出さ

せてしまったことを後悔した。彼にとって家族を喪ったことは思い出したくない辛い過去であったはずだ。それを思い出させたばかりか、逆に原因である自分のために気を使わせるなどあってはならないことである。

――意外に優しい人なのかも――

次に和美は違うことに思考を向け始める。不真面目な先生だと思っていたが、先程もなんだかんだで助けてくれたし、今も気に病む自分のことを考えて嘘をつき通そうとしている。

ダンテの過去に何があったのか分からない。おそらく自分には想像もつかないような人生を歩んできたのだろう。特に家族の不幸もなく、人並みの人生を送って来た自分には理解できないことである。

最初は陽気な人だと思っていたが、だからといってそういう人の誰もが幸福な人生を歩んできたのではないと、彼女はここへ来てようやく知ったのだった。

その後、和美が紹介した喫茶店で二人は食事をすることになった。当然ダンテはストロベリーサンデーを、彼女はケーキセットを食べながら、麻帆良で起きる様々な珍事件をネタに彼に話しかけた。

そして、彼女から一つの噂を聞くことになる。

――――生徒たちの間でまことしやかに語られている、あの噂を。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　７　学園広域生活指導員（後書き）

今回はちょっとした日常回でした。和美がダンテの過去を知ってどう変化するのか、これからの展開にご期待ください（何だか自分でハードル上げてますね）。

次回またお会いしましょう。それでは。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　８　英雄の息子、邂逅す（前書き）

本文の途中において、マザコン云々でダンテと木乃香のやり取りがあります。これは調べて知ったのですが、日本だとマザコンは母親から自立できない子供のことを指しますが、アメリカでは母親による子供への暴力を指し、意味が全く違うらしいのです。ですがそれを書くと本文と関係ない文章が増えてしまうのと、言語翻訳魔法のおかげで意味が日本における意味と置き換わったという理由で、あえて言葉の齟齬に関して書きませんでした。ご了承ください。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　８　英雄の息子、邂逅す

８／

「ダンテはん、起きてる？」

ダンテの部屋を覗き込んだ木乃香は、ベッドの上で眠りこける彼に声をかけた。が、彼は何の反応も返さない。深い眠りについているらしい。

彼女は気にもせずに、手に持っていた皿――――正確には皿の上に盛りつけられた朝食をテーブルに置いた。彼が一言かけたぐらいで起きないことは既に分かっているからだ。

彼女はざっと部屋を見渡す。床にはピザの空箱やビールの缶が散乱している。つい二日前に掃除をしたばかりなのだが、もうこれほど汚れていた。彼のだらしなさに仕方がないなと苦笑を浮かべつつも、彼女は腕を捲くって掃除を始めた。

最初に、用意したごみ袋にごみを放り込んでいく。ピザの空箱は可燃ごみへ、ビールの空き缶は資源ごみとしてごみ袋に収めていく。二日前に掃除したおかげか、大きなごみは床から綺麗に排除された。

だが、それで終わりではない。大きなごみは除かれたが、食べ物の欠片や細かいごみは残っている。それらを掃除機で吸い取ると、ふとベッド傍のチェストに目をやった。

チェストの上を見ると、そこにぽつんと写真立てが立ててあった。彼女の手の平より一回り大きいぐらいだろうか、その中で一人の女性が微笑んでいる。

「えらい美人さんやなぁ～。恋人やろか？」

木乃香は誰に言うでもなく呟いた。

彼女の言う通り、写真に写る女性はとてつもなく綺麗だった。モデルのように整った目鼻立ちに、艶やかな輝きを放つ紅唇。緩やかな線を描く細い顎に、流れるように伸びた金砂の髪。街中を闊歩すれば十人中十人が振り返るであろう美人だ。

特徴的なのは、写真の女性がダンテと似たような装いをしていることだ。彼女は黒のハイネックの上から真紅のストールを羽織っており、仮にダンテが隣に立っていれば、これほどお似合いなカップルはいないだろう。

そんなことを木乃香が考えていると、ベッドの上で寝ている彼が動く気配を感じた。ようやく起きたのかと振り返ってみるが、そこにはいまだ眠りこける彼の姿が。だが、何か様子がおかしい。眉間に皺を寄せ、額には薄っすらと汗を掻いている。しまいにはボソボソと何かをしきりに呟いているように見えた。

――何やろ？――

何を言っているのだろうと木乃香が耳を寄せると、ダンテが絞り出すような声で言った。

「母さん……」

ダンテの呟きに木乃香はぎょっとし、身を引いてベッドから離れる。彼には似つかわしくない言葉だったこともそうだが、何よりも彼の呟いた言葉には、まるで迷子の子供が母を探し呼ぶかのような切なさが籠もっていたからだ。

――どないな夢見てはるんやろか……？――

木乃香が内心ドキドキしながらもダンテの寝顔を見つめる。すると、ようやく彼の瞼が震えたかと思えば、暫しの間も与えずに目を開いた。

彼はしばしばと目を瞬(しばた)かせると、ベッド脇に突っ立っている彼女に目をやった。

「……木乃香か？」

ダンテがそう言いながら上半身を起こした。彼は欠伸をしながら、凝り固まった筋肉を解そうと伸びをする。木乃香は咄嗟に返事をすることができなかったが、彼は気にしてはいないようで、前髪をぐしゃぐしゃと掻いて寝癖を整えている。

「――――あ、オハヨーな。朝ご飯持って来たで」

やっとのことで挨拶を返した木乃香は、朝食を持ってきたことを伝えるとすぐに備え付けのキッチンに入った。朝食を温め直し、テーブルにテキパキと食器を並べていく。その間にダンテはシャワーを浴びに浴室に入り、烏の行水のごとき早さで上がってきた。

二人はテーブルを囲むと、彼女が持ってきた食事に手をつけ始めた。朝食のメニューはスクランブルエッグにソーセージ、パン。彼女がアメリカ人であるダンテに合うようにと気を利かせたようだ。

彼女は行儀良くいただきますの挨拶をし、箸で朝食に手を付けていく。一方、ダンテは無言でスクランブルエッグを頬張った。そして一言。

「美味いな」

素直に称賛を木乃香に返した。

「おおきにな」

木乃香はいつも通りにこにこと笑顔を返す。これがいつも通りのやり取りである。彼女が料理を持ってきて、二人で食べる。ダンテが料理を褒め、彼女が笑顔でその言葉を受け取る。傍から見るとまるで夫婦のようだが、二人には全く自覚はなかった。

木乃香は生活面でだらしのないダンテをこうして世話しているが、そのことに全く不満はない。それどころか、彼を年の離れた兄のように思っており、だらしのない彼の世話を焼くことを密かに楽しみにしている。

一方で、ダンテも何かと世話を焼いてくれる彼女をあの子のように思っており、まるで数年前の日常が戻ってきたかのような懐かしさを感じていた。

と、ここまではいつも通りのやり取りで何の問題もなかったのだが、ふと彼女は先程から気になっていたことを聞いてみようと、料

理に舌鼓を打つ彼に声をかけた。

「なあ、ちょっと訊いてもええかな？」

「ん？」

スプーンを口に銜えたまま、ダンテは片目で木乃香を見つめた。いつもなら彼女が学校での友達とのやり取りを楽しげに語り、彼はひたすら聞き役に徹しているのだが、彼女から何かを聞きにくるのは初めての出来事である。珍しいこともあるものだと、彼は片肘をテーブルに付けて頬杖を突きながら思った。

彼女は手に持っていた食べかけのパンをテーブルに置くと、その指をチェストの上に置いてある写真立てに向けた。

「あそこの写真の女は誰なん？」

木乃香の指先につられて顔をその方向に向けたダンテは、写真立てを見て僅かに顔を顰める。和美に色々と詮索されてからそんなことが起きないように隠しておいたのだが、昨日に置きっぱなしにしたまま寝てしまったらしい。

また色々と訊かれるのかと辟易しながら、無駄だとは思いつつも確認のためにダンテは尋ねた。

「……あれか？」

「うん。えらい美人さんやけど、恋人なんか？」

案の定、木乃香が訊きたいのは写真に写っている女性のことだっ

た。一瞬どう答えるべきかと悩むが、下手に嘘を吐いて後々露見すると面倒だと判断したダンテは正直に答えた。

「母さんだ」

ダンテの母であると聞かされ、木乃香は大層驚いた顔をした。写真の女性と彼の顔を何度か見比べる。

二人の顔を見ても、とても親子には見えなかった。女性は殊更に若々しく、二十代と言っても差し支えないほどの美貌を誇っているし、顔立ちもあまり似ていない。共通点は服装ぐらいなのだから、二人を恋人と勘違いしたとしても仕方ないと言えた。

「お母さんかー。きれいやなー。でもよう似てへんな?」

木乃香は思ったことを率直に述べた。まあそうだろうなと、ダンテも内心で頷く。容姿という面では完全に父親の血を引いているのは自覚している。

しかし、母親から受け継いだのは容姿だとか外面的なものでは断じてない。人間としての心、力の弱い人間しか持ち得ない人を愛する心を受け継いだと彼は思っている。だから木乃香に言われたことも気にせず、彼は気だるそうな調子で言葉を返した。

「俺は親父似だからな」

「そうなんや……」

ダンテの投げやりな返事に木乃香の相槌も言葉尻が小さくなる。何か気に障るようなことをしてしまったのかと彼女は危惧するが、

そんなことはない。ただ彼が気だるそうに答えたのを勘違いしただけである。

彼女は話を変えようと、今度は彼の寝言について話題を転換した。

「そういえば、さっきはお母さんの夢でも見てたん？寝言で言ってたで？」

パンを口にするダンテの手が止まった。口を真一文字に結び、苦虫を噛み潰したかのよう顔で黙り込んでしまった。

彼は幼い頃に母親を目の前で亡くした経験からか、その時のことを悪夢として見てしまうようになった。彼が女性と付き合ってもすぐに別れてしまうのは、大半はこれが原因である。夢の内容を知っていれば違う反応もあるのだろうが、付き合った女性にしてみれば、たとえ寝言だとしても、彼が母親を呼ぶのはマザコンのようで嫌なのだろう。

「先生ってマザコンなんやな～」

木乃香も例に漏れず、ダンテをマザコンだと思ったのだろう。そのことを指摘すると、けらけらと快活に笑った。

「――――ハッ、男はみんなマザコンなんだよ。木乃香だって親父さんが好きなじゃないのか？」

それを聞いたダンテも黙ってはいない。木乃香を鼻で笑うと盛大に肩を竦め、苦し紛れに言い捨てた。だが、マザコンであることを否定しなかったあたり、彼にも自覚はあったようである。

彼女は少し考え込んだ後、ニコッと笑いながら彼の言葉に同意した。

「そーかもなー。ウチもお父様大好きやし……ウチはファザコンなのかもしれへんな」

話はそこで終わりとばかりに、木乃香は改めてパンを口に運んだ。

意外にあっさりとした反応に、ダンテは拍子抜けしたかのように肩を竦めた。ファザコンであることをあっさりと認めたばかりか、にこにこと彼に笑いかけるとは、温厚な彼女らしいと言える。

その後、二人は朝食を食べ終わると登校の準備を始めた。彼はいつも通りのコートを羽織る。ただいつもと違うのは、彼の出勤の時間にはまだ早いということである。当然、彼女が登校するには早すぎるわけだが、これには理由がある。

キッチンで使った食器を洗っていた彼女は、水流の音に負けないように少し大きめの声で尋ねた。

「今日は早く出るんやろ?」

「まあな。爺さんに呼ばれてる」

ダンテは学園長に呼び出しを受けており、いつもより早めに出勤するようにきつく言い含められていた。聞くところによると、海外出張の多いタカミチの代わりに新任の先生が来るらしい。その先生との顔合わせのために学園長室に来るように言われていたのだ。

「ウチもおじいちゃんに呼ばれてるんや。新任の先生を迎えるん

やえ」

だが、木乃香の言葉にバッグを持つダンテの手が止まった。

――どういうことだ？――

木乃香が言っている新任の先生は、ダンテと顔を合わせる新任の先生と同一人物だろう。彼に任せればいいものを、何故新しく先生を迎えるのに女子学生を使うのか理解できなかった。

――……まあいいか――

どうせ学園長に何か考えがあってのことなのだろうが、そんな事情はダンテには関係がない。後で直接尋ねるかと決め、彼は玄関に向かった。

「――――まあ良い。それじゃ行ってくる」

「あっ、鍵はどうするんやえ？」

ダンテがドアノブに手をかけると、タオルで手を拭いた木乃香がエプロン姿のまま玄関に顔を出してきた。彼が先に部屋を出てしまうと、鍵を貰わない限り彼女が部屋の戸締りをすることができない。それを危惧しての問いかけであろう。

彼は顔だけ後ろに振り向くと、どこか投げやりな調子で答える。

「ああ、別に締めなくていい。どうせ盗るものもないしな……」

実のところ、ダンテは麻帆良に着てこのかた一度も戸締りをして

部屋を出たことがない。デビルメイクライでもそうだったが、彼の部屋には金目の物が一切ない。あったとしても盗まれて困るものでもないという考え方から、基本的に戸締りをするという選択肢がないのである。

だが、それを聞いてはいそうですかと納得するほど木乃香は馬鹿ではない。腰に片手を当て、空いたもう片方の手を彼に差し出した。

「そんなん駄目や。ウチが締めといたるから貸しぃ」

家主が大丈夫だと言っているのだからいいではないか。ダンテはそう言おうと口を開きかけるが、すぐに止めた。彼女の表情は有無も言わせぬもので、おそらくどんな言い訳をしようが気持ちは変わらないと本能で分かったのだ。

――まったく……敵わないな――

ダンテは木乃香に見えないように諦めの表情を形作ると、ポケットに入れっぱなしの鍵を投げ渡した。

「……ほらよ」

弧を描いた鍵が、素晴らしいコントロールで木乃香の手の中に納まる。それを握り込むと、彼女はダンテに手を振った。

「ん。じゃあ締めとくなー」

にこにこと微笑む木乃香を背中越しに見た後、ダンテはドアを開けた。いまだに手を振り続けているのを背中に感じながら、彼は部屋を後にしたのであった。

◇

「学園長先生！一体どーゆーことなんですか！？」

困惑しつつ大声を張り上げる明日菜に、学園長はまあまあと宥めながら髭を擦った。

「なるほど、修業のために日本で学校の先生を……そりゃまた大変な課題をもろうたのー」

フォフォフォと笑う学園長に、ネギはよろしくお願いしますと言って頭を下げた。隣に立つ明日菜と木乃香は、学園長の言う修業という言葉を不思議に思って怪訝な顔をする。日本で教師をすることが何の修業になるのか分からないのだから当然と言えるだろう。

そんな彼らの後ろでソファに座っているダンテは、ネギの言う修業について学園長から聞かされていたので特に疑問に思うことはなかった。立派な魔法使いになるために日本で教師をするというのも変な話だが、魔法使いについてダンテは門外漢なので、これが普通なのかもしれないと思うことにした。

そうこうしている内に、学園長が孫の木乃香を彼女として薦めて、当の彼女にトンカチで殴打されたことや、学園長が修業に対する覚悟を問い、ネギが決意を持った表情で返事をしたなどということがあり、彼は三月まで教育実習生として過ごすことに決まった。

「では今日から早速やってもらおうかの。指導教員のしずな先生を紹介しよう。分からないことがあったら彼女に聞くといい」

そう言って学園長の横に立っていたしずな先生が前に進み出て挨拶を交わした。

「そして後ろで寛いでいるのが、君が担当するクラスの副担任、ダンテ先生じゃ。正直頼りにならんから分からないことがあっても彼には聞かなくてよいぞ」

「おいおい、ヒドイな爺さん」

学園長と軽口を叩き合うと、ダンテはネギを見つめた。アイスブルーの瞳に射抜かれたネギは思わず緊張する。

彼の怯えを感じたのか、ダンテは片手をひらひらさせ、笑みを浮かべながら言った。

「よろしくな坊や」

「あ、よろしくお願いします」

ダンテの気さくな挨拶に、ネギは礼儀正しく挨拶を返した。思っていたより取っつきやすかったのだろう。それにしても礼儀正しい子供と無礼な大人、何とも対照的な二人であった。

それぞれの挨拶が終わると、学園長は思い出したかのように言う。

「そうじゃ。このか、アスナちゃん。暫くはネギ君をお前達の部

屋に泊めてもらえんかの」

まだ住むとこ決まっとらんのじゃよ、と学園長がのたまうと、木乃香は快諾したものの明日菜が猛反対した。それも当然の話だろう。そもそも彼女は子どもが嫌いである。それにダンテはあずかり知らないことだが、出会い頭にネギから失恋の相が出ていると言われるは、魔法の暴発で服を脱がされるはで、彼に対して良い印象がまるでないのである。

「それに部屋ならダンテ先生のとこがあるじゃないですか！」

明日菜がズビシ！とダンテを指差しながらのたまった。

確かに、彼女の言うことは間違いではない。ダンテの部屋は一人で住むには少々広いので、ネギぐらいの少年が生活できるスペースはあるはずだ。

だが、槍玉に挙がった当の本人が彼の入居を拒んだ。

「そりゃ止めとけ」

「どうしてですか！？」

激昂する明日菜に向かって、ダンテは事もなげに言い放った。

「俺の生活を見て坊やを任せられると思うか？」

ダンテの言葉に、明日菜は咄嗟に答えることができなかった。何故なら、彼の自堕落な生活を彼女は嫌というぐらい知っていたからだ。

まず彼は自分で起きることができない。彼を学校に遅刻させないために毎朝起こしているのは、他ならぬ明日菜と木乃香なのだ。

また、彼の偏食ぶりも凄まじい。一切自炊をせず、毎日飽きもせずにデリバリーのピザばかり食べているのだ。それを不憫に思った木乃香がわざわざ料理を作り置きしているので、傍から見ると彼女が世話を焼く母親のように思えてくる。

そして彼は掃除が嫌いで、これも彼女が二～三日毎に掃除してあげている。そうでもしなければ、部屋は瞬く間にビールの缶やピザの空箱に支配されてしまい、とても住めたものではない。

明日菜はそんな彼を見ているからこそ、ネギを彼の部屋に置くのは憚れた。どう考えても、ネギの様な少年を彼に預けるのは不安だ。というよりも不安しかないと言わざるを得ない。

そう結論づけた彼女はあからさまに肩を落とすと、ネギの同居を認めた。否、認めざるを得なかったと言える。彼女は基本的に面倒見は良いのだ。まだ彼を部屋に泊めるのに抵抗がないわけではないが、ダンテに預けるよりはましであろうと考えているのだろう。

その後、明日菜と木乃香は先に教室へ向かった。二人を追うように、ネギ達三人が教室へと歩いていく。

２－Ａのドアの前まで来ると、しずな先生はクラス名簿を渡しながら言った。

「ほら、ここがあなたのクラスよ」

ネギはしずな先生の言葉を聞いて途端に緊張しだす。彼はまだ十歳にも満たない子供なのだからそれも当然だろう。

彼がジッと何かを考え込んでいるのをしずな先生が微笑ましく見つめている。その二人の後ろで、ダンテはドアの隙間に挟まっている黒板消しに目をやった。これは彼が教室に初めて入った時と同じ罠だ。イタズラ好きの鳴滝姉妹がまたやらかしたらしい。

ネギはあいにく背が低いのと下を向いているのでそれに気が付いていない。このままでは間違いなく罠にかかるだろう。そんな確信がダンテにはあった。

彼の予想通り、ネギはそれに気が付かずにドアを開ける。そうすると頭に黒板消しがぶつかるはずなのだが、奇妙なことが起こる。ほんの一瞬だが、黒板消しが彼の五センチほど頭上でピタリと止まったのだ。ダンテはもちろんのこと、クラスもそのことに気付いて目を疑う。しかし、それも次に起きた出来事の衝撃で頭の中から消え去ってしまった。

ネギは黒板消しが頭上で止まるのを見て、自身に張った魔法障壁が発動していることに気が付いたのだろう。慌てて魔法を解くと黒板消しが無事落ちてきて、彼の頭がチョークの粉まみれになってしまった。それを笑って誤魔化しながら一歩踏み出した途端、今度は足元に仕掛けてあったロープに引っ掛かって転ぶ。そこからは上手い具合にバケツが頭に落ちるは、転がり続ける彼に玩具の矢が命中するはで、一連の流れがまるでギャグを見ているようだった。

実のところ玩具の矢は、以前ダンテがロープとバケツのコンボを躱したために強化案として増設されたイタズラだったのだ。ということは、ネギは彼のとばっちりを受けたと言える。

そんなことを知るはずもないネギは、突然のことで混乱して涙目になっていた。頭にバケツが落ちてきた挙句、矢が飛んでくれば驚いて当然と言えるが。

それは仕掛けた方も同じだったらしい。新任の先生が来るとは聞いてはいたが、教室に入ってイタズラに引っ掛かったのは、見るからに自分達より年下の少年だったのである。驚いて駆け寄って謝るが、しずな先生から彼が教師であると告げられて今度は目を丸くする。

「今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。三学期の間だけですけど、よろしくお願いします」

ネギが教卓に上がって自己紹介すると、教室中が沸き立った。彼は幼いながらも顔立ちが整っている美少年だ。そんな子が担任と聞けば、彼女達は持ち前のノリの良さで騒ぎ出すのは当然のことだった。

「キャアアッ！カ、カッワイイー！」

「何歳なの～！？」

「どっから来たの！？何人（なにじん）！？」

生徒達に揉みくちゃにされるネギ。予想していたよりもすぐに受け入れられたようで、彼は一先（ひとま）ず安心した。

ただ、一人だけ、彼に疑問を持った視線を向けた少女がいた。明

日菜である。彼女は黒板消しが空中で止まったことを忘れてはいなかったのだ。

彼の傍まで駆け寄ると、持ち前の怪力で胸元を締め上げる。そのまま彼を教壇に乗せると、彼女は尋ねる。

「ねえ、あんた。さっき黒板消しに何かしなかった？何かおかしくない？あんた」

その言葉に、ネギはあわあわと慌てる。せっかく全員が忘れかけていたことを蒸し返されれば、魔法がバレてしまう可能性がある。もしそうなれば、立派な魔法使いになれないばかりか、最悪の場合は強制送還された上にオコジョにされてしまうかもしれない。

だが、そうなることはなかった。クラス委員長である雪広あやかが明日菜を諫めたのだ。彼女が止めに入れば、明日菜が対抗しないわけがない。二人が取っ組み合いになったおかげで話題が逸れ、何とかその場を切り抜けることができたのである。

――――それでも、この後彼女に魔法使いであることがバレてしまうのだが。

その後は、彼女がネギの授業を妨害してあやかとケンカになるは――――

宮崎のどかが階段から足を踏み外したところを彼が魔法を使って助けたら、その場面を明日菜に見られてしまうは――――

歓迎会を抜け出したネギと明日菜が、タカミチへの告白の練習をしているところをクラスメイトに見咎められて誤解されるはで――

彼の学園生活は波乱の幕開けとなったのであった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　８　英雄の息子、邂逅す（後書き）

皆さまお久しぶりです。第八話投稿いたしました。

本来、第八話ではネギだけ出して終わりのはずだったのですが、その前に木乃香とダンテの日常パートを入れたいと思い、急遽二人の朝のやり取りもぶち込みました。

書き終わってから読み返して思ったのですが、二人はまるで夫婦ですね。本当はダンテの生活面でのだらしなさに辟易する母親のような木乃香を書きたかったのですが、完成して読み返してみれば、どう見ても夫婦でした。ですから途中に二人は傍から見ると夫婦云々～を挟み込みました。ですから完成直後では、あの地の分は存在しなかったことになります。文章量が増えて儲けものといったところでしょうか。

さて、これでようやく原作の時間軸まで来れたわけですが、ここから随分飛びます。正確に言うと学期末テストまで飛びます。はっきり言って惚れ薬騒動やバレー対決とかはダンテが関わることがないのでスルーします。彼がいようといまいと、どちらにしても過程や結果に全く変化がないので。そこを楽しみにしていた方は申し訳ありません。ご了承ください。

それでは次回の更新でお会いしましょう。それでは。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　９　バカレンジャーと図書館島

９／

三月に入り、ネギにもようやく慣れない教師の仕事が板についてきた頃。一週間後に学期末テストが近付いているということで、それに向けた授業方針を立てようかと考えながら、釘宮円と椎名桜子の二人と一緒に廊下を歩いていると、しずな先生に後ろから呼び止められた。

何事かと振り返ると、彼女から一つの封書を渡される。渡された封書の裏には最終課題と書いてあり、彼はドラゴン退治でも出るのではないかとビクビクしながら中身を取り出して読んでみる。するとそこには、近衛学園長の直筆で『次の期末テストで２－Ａを最下位から脱出させたら正式に教師にしてあげる』と書いてあった。

それを読み終えた彼は、魔法に関する課題ではなかったことに安堵する。そもそも、彼が想像したドラゴン退治は魔法使い見習いどころか、並みの魔法使いでも歯が立たないと言われているほど難しい。故に課題として出されるはずがないのだが、そんなことを知る由もない彼は早速ＨＲで勉強会をしようと計画する。

しかし、彼は知らなかった。２－Ａの万年最下位という肩書きは、彼が思う以上に伊達ではなかったということを。

試しにＨＲで勉強会を開いたのだが、結果は散々なものであった。

一部の成績優秀者を除き、その他は平均からそれ以下。そして何よりも厳しいのは、通称『バカレンジャー』と呼ばれる成績劣等生の存在である。

バカレンジャーとは、あまりに成績が悪いために名づけられた五人の生徒の総称である。バカレンジャーのリーダー、『バカブラック』こと綾瀬夕映。中国武術研究会の栄えある部長を務める、『バカイエロー』こと古菲。新体操部所属の『バカピンク』こと佐々木まき絵、さんぽ部所属の長身中学生、『バカブルー』こと長瀬楓。そしてその中でもぶっちぎりの成績の低さを誇る、『バカレッド』こと神楽坂明日菜。

この五人が絶望的なまでに足を引っ張っているために、２－Ａは毎度最下位の座をキープし続けていたのである。

それから四日が経ち、最下位脱出が困難を極めると判断した彼は、一時は三日間だけ頭が良くなる禁断の魔法を使用することさえ考えた。だが、明日菜の忠告もあってその魔法の使用を自重し、加えて卑怯な手段を使おうとした自身への戒めとして、魔法を三日間封印することにした。

一方で、明日菜達バカレンジャーは女子寮の風呂場にて衝撃的な噂を聞くことになる。次の期末テストで２－Ａが再び最下位になった際には、クラスを解散させられてしまうというのだ。加えて、特に成績の悪かった者は留年どころか小学校からやり直しというオマケまでついてくるらしい。

その根拠は桜子が口止めされているという事実と、勉強会の時にネギが思わず漏らした「最下位を脱出しないと大変なことになる」という言葉だけなのだが、冷静にならずとも普通に考えれば、義務

教育の中学校で留年などあるわけがなく、その噂がデマ以外の何物でもないことが分かるはずである。

あまつさえ小学生からやり直しなど絶対に有り得ないのだが、これもバカレンジャーたる所以か、それとも麻帆良学園の異常性のせいか、そのデマを容易く信じてしまう。

小学生からやり直すという不名誉を受けたくないバカレンジャーに対し、リーダーの夕映が一計を案じる。図書館島の奥に眠り、読めば頭が良くなると言われる魔法の本を手に入れようというのだ。

図書館島は明治時代の中頃、湖の中心に浮かぶ人口島の上に建造された世界最大規模の巨大図書館である。二度の戦火を逃れるために世界各地から貴重書が集められ、蔵書の増加に伴い地下へと増改築を繰り返した結果、現在ではその全貌を知る者は誰もいないという。貴重書の消失を避けるために施した処置が、逆にそれらの位置が掴めなくなってしまったのは皮肉としか言い様がないが。

当然、彼女から魔法の本の話を聞かされても一同は半信半疑である。もちろん彼女も、魔法の本が本当にあるとは思っていない。せいぜい出来の良い参考書ぐらいに考えているのだろう。

しかし、他のメンバーとは対称的に魔法の本と聞いてやる気を出したのは明日菜だった。魔法使いという存在を知っているが故に、魔法の本の存在に信憑性があると睨んだ。そして何よりも、自分が成績の上で最も足を引っ張っているために、何としてもそれが必要だったのである。

こうして、図書館島を攻略するためにバカレンジャー、図書館探検部の早乙女ハルナと宮崎のどか、封印で三日間魔法を使うことが

できないネギまで巻き込む形で、図書館に突入することになった。

そして――――

「お！」

「さ！」

「ら！」

「……おさる？」

――――バカレンジャー一行は、魔法の本『メルキセデクの書』の盗掘を防ぐための罠に嵌り――――

「ハズレじゃな」

「アスナのおさる～！！」

「みんなゴメーン！」

図書館の地下深くまで落下することになったのである。

◇

バカレンジャー一行が地下に消えた魔法の本の安置室。先程の喧騒が止み、静寂を取り戻した地下室で、彼女達が落ちていった穴を覗き込む者がいた。刹那である。

木乃香の護衛である彼女は、バカレンジャー一行をしっかりと尾行していたのである。ならば、彼女達が落ちる時に木乃香だけでも助けることはできたはずなのだが、刹那はそうしなかった。否、したくてもできなかった。

――まったく……一体学園長は何を考えて――

刹那は苛立ち紛れに地面を蹴り上げた。地面に薄く残る砂埃がその行為で巻き上がる。

ふと、彼女は近衛学園長が言っていたことを思い出す。

“――刹那君、もしこのかが図書館島に行くことがあっても、決して手を出してはならんぞ――”

“――は、はぁ？ですが図書館島は……――”

“――今は何も聞かんどくれ。大丈夫じゃ、危険なことは何もない――”

“――……分かりました。ですが、後で必ずお話を聞かせてください――”

つい数時間前の、学園長室でのやり取りである。その場では、木乃香の祖父である学園長の頼みもあって刹那は引き下がった。自分の孫娘を危険な目に遭わせるはずがない。そう思ったからだ。

だがこんなことになるとは聞いていなかった。穴の深さを見る限り、そのまま落下すれば地面に激突して確実な死が待っている。学園長もその辺りの対策は織り込み済みなのだろうが、その点を前もって話さなかった彼にどうしても苛立ちが募ってしまう。

刹那はキッとハンマーを持った巨大な石像を睨みつける。先程まで動いていて、バカレンジャー一行を地下に叩き落としたのもそれの仕業である。

彼女に睨みつけられた石像は所定の位置に鎮座し、もう動いては

いない。しかし、意思がないはずの石像が何故か居心地の悪そうな雰囲気を醸し出しているのが気配で感じられた。

「――――学園長？」

「――――！？」

刹那にジト目で声を投げかけられ、石像がビクンと震える。だが、彼女の呼びかけに全く答えない。

何も反応がないと見たのか、彼女は踵を返して来た道を戻り始める。彼女の険のある視線から解放され、石像は雰囲気でも安堵したのが分かった。

それを背中越しに感じたのだろう。彼女は一度立ち止まり、肩越しに再度石像を睨みつけて言い放った。

「今からそちらに行きますので話を訊かせてもらいます。宜しいですね？」

「――――！？う、うむ……」

孫娘のかつての親友に威圧され、思わず頷いてしまう学園長。彼から言質を取った刹那は石像から視線を外し、外へと続く隠し通路の奥に消えていった。

――やっぱり刹那君には伝えるべきだったかのー……――

学園長は心の中で呟いた。刹那は知らないだろうが、バカレンジャーを図書館島に来たのは、最初から彼の計画の内だったのである。

元々は、彼のちょっとした親切心が始まりだった。ネギに出した課題は、彼には荷が重いと考えていたからだ。そもそも、２－Ａの担当だったタカミチでさえも最下位から脱出することはできなかったのだ。いまだ教育実習生に過ぎないネギには無理難題も甚だしい。

ならば最初から無理のない課題を出せばいいのだろうが、彼が立派な魔法使いになるために出された課題は日本で先生をやること。それを達成するためには先生らしい課題でなければならない。教師に問われるのは指導力であり、ちょうど学期末テストの時期と重なったこともあり、２－Ａの最下位脱出を課題として出したわけである。

しかし、それで彼が課題に失敗し、立派な魔法使いへの道が閉ざされてしまうのは忍びない。彼は才能ある魔法使いであるし、彼の父親には色々と世話になっていたからだ。

２－Ａの足を引っ張っているのは明日菜達バカレンジャーと知っている学園長は、そこで助け舟として彼女達の学力向上を図る計画を考えた。ある空間に彼女達を放り込み、ひたすら試験勉強を促してネギの負担を減らそうという計画を。そのために学期末テストの最下位クラスは解散させるという噂を流し、以前から図書館探検部の間で噂されていた魔法の本を利用することにしたのだ。魔法の存在を知っている明日菜ならば、その噂を信じて来ると予想して。

ただ、バカレンジャーだけでは試験勉強が捗(はかど)らない可能性がある。そう考えた学園長は木乃香に教師役を任せることにした。孫の性格を誰よりもよく知っている彼である。彼女なら明日菜達に付き合うだろうし、成績も優秀なので教師役に相応しかった。故に、刹那には決して手を出さないよう言っていたのである。

そして、彼女達がいない間はネギにクラスを纏めてもらう。それで課題に成功すれば正式に教師として採用、という流れになる……はずであった。

学園長の誤算は、ネギも彼女達と一緒に図書館島に来てしまったことだろう。石像を操作するためにパスを繋いだ学園長が見たのは、彼女達に紛れて魔法を封印した結果、ただの少年になっていた彼の姿。これには学園長も慌てたが、ここまで来て計画の変更はできないので、彼も一緒に落ちてもらうことになった。これはもちろん、彼がいない間に副担任のダンテが2－Aを教えるので、クラスの方は心配ないだろうという判断があってのことだ。

しかし、いくら策略通りだったとしても、調子に乗ってやり過ぎてしまったことは事実である。これから来るであろう刹那への言い訳を考えながらも、自身の行動を反省した学園長であった。

◇

「何ですって!?２－Ａが最下位脱出しないとネギ先生がクビに～!?」

バカレンジャー一行が図書館島で消息を絶った翌日、教室に集まるクラスメイトが桜子から聞かされたのは、そんな内容であった。

当然、ネギに御執心の雪広あやかは何故教えてくれなかったのか

と桜子に詰め寄るが、彼女もネギ本人に口止めされていれば話すわけにはいかなかったと釈明する。それを聞いて仕方がないと感じたあやかは、すぐさまクラス委員長としてのリーダーシップを執り、厳命を下す。

「とにかくみなさん！テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですわよ！その辺の普段真面目にやってない方々も！」

ビシッと指を差された数名は、口では不満を洩らしながらも勉強しないとは言わなかった。２－Ａは成績が悪かったり騒がしかったりする子は多いが、一度仲間と思った者に対する協力は惜しまない性格の子も多いのが長所と言える。そんな子達だからこそ、担任のネギのために協力することに決めたようだ。

次に彼女は、学期末試験において最大の障害、バカレンジャーのことを考える。だが、冷静な彼女は彼女達を戦力から除外した。勉強に対する取り組みへの意識が低い彼女達よりも、より点数が伸びる可能性の高い生徒達への指導を重視したのだ。

しかし、彼女の要請によりにわかに騒ぎ出す２－Ａの教室に、さらなる凶報が齎（もたら）される――――

「みんなー大変だよー！ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に……！！」

昨日のバカレンジャー一行を外部から支援していたのどかとハルナが、彼女達の行方不明を告げたのである。その話を聞き、クラスメイト達の脳裏に学年最下位の文字とネギのクビがチラつく。いくらバカレンジャーとはいえ、テストに出るのと出ないとでは結果が全く変わってくるからだ。

そうして教室が余計に騒がしくなっていくと、唐突にドアが開いて赤の服装に身を包んだダンテが欠伸を零しながら入ってきた。教室を見渡した彼は、試験のことでてんやわんやしている生徒達を見て怪訝な表情を浮かべた。

「？どうしたお前ら。早く席に着きな」

ダンテの姿を認めたのどかとハルナの二人が、次の瞬間には凄い勢いで彼に詰め寄った。

「ダンテ先生、大変だよ！ネギ先生とバカレンジャーが……！」

「えっと……あの、その……ネギ先生が……！」

気が急いているためか、あわあわとして次の言葉が中々出てこない二人に押され気味のダンテだったが、『ネギ』と『バカレンジャー』のキーワードで二人の言わんとすることが分かってしまい、前髪を掻き上げる動作をしながら言葉にならない声を上げた。

「あー……あいつらなら無事だ」

「へ？」

ダンテの口から洩れた言葉に、のどかとハルナを含めてクラス中がポカンとする。特に二人は、まだ学校にも伝えていない事実を何故彼が知っているのか、どこからその情報を得たのか分からず、腑に落ちない顔をしている。

二人の雰囲気からそれを嗅ぎ取ったのか、ダンテは軽い口調で二

人の疑問に答えた。

「俺もさっき爺さ……学園長から聞いたんだけどな。もう居場所も掴んで、朝早くに助けられたらしい」

「そ、そうなんですか？でも何でみんなはいないんですか？」

当然の疑問をハルナが口にする。今日助けられたならば、学校に登校していてもおかしくないはずなのだが。

「根も葉もない噂に惑わされて危険な場所に潜り込んだ罰だとさ。反省も兼ねて別室で謹慎。暫くは女子寮にも帰れない。まあ、試験前には解けるから心配しなくて良いぞ」

今頃試験勉強でヒイヒイ言ってるだろうさ、と続けてダンテは話を締めた。

しかし、彼は今でこそ機嫌良くに振る舞っているが、目覚めた当初は機嫌がすこぶる悪かった。朝早くに近衛学園長から携帯で呼び出しを受けたのだ。いつもより早く起こされた彼は不機嫌な気分で学園長室に向かい、一言文句でも言ってやろうかとドアを蹴り開けた。

そこで彼が見たのは、まだ一日が始まったばかりだというのに何故か疲れ切った様子の学園長の姿だった。話を聞くと、ネギに出した課題、バカレンジャーに対するクラス解散の噂、図書館島の魔法の本、それらに木乃香を巻き込んだことに対する刹那の怒りを順次説明していく。

それらの事情を全て聞いたダンテは、学園長のお茶目に呆れ返っ

た。彼女を魔法に関わらせないように言い含めていた当の本人が、魔法関連の事象に積極的に関わらせようとしているのだから。

そのことを指摘すると、彼はそのせいで先程まで刹那に叱られていたと打ち明けた。既に罰を受けていたおかげで溜飲が下がったのか、ダンテは機嫌を取り戻して自分を呼び出した理由を問うた。

学園長がダンテ頼んだのは三つ。一つ目は、ネギ先生が不在の今日は彼が2－Aを纏めること。二つ目は、バカレンジャーのことで生徒に不安を与えないよう、学園長が用意した嘘の事実を伝えておくこと。そして三つ目は、急遽空いてしまった今夜の夜間警備員の仕事に代打として出て欲しいとのことだった。

別に断る理由もなかったのか、ダンテはそれらを了承。こうして今に至るわけである。

「だからお前らは何も心配することはない……ほら座れ。HR始めるぞ」

シッシと手先で着席を促すと、生徒達は静々と席に戻っていった。ようやく解放されたダンテは教壇に立ち、出席簿を広げて出席確認を行う。

その後のHRも特に問題もなく進み、そのまま一時限目の英語に直接入ろうと教科書を開いた時、あやかがそのたおやかな手を上げた。

「ダンテ先生！」

「……ん？」

鬼気迫った表情でダンテを凝視するあやかに、彼は面倒臭そうな調子で返した。

「もうテストの範囲は終わらせてあるのですよね？」

確認を取るかのように尋ねるあやかに、ダンテは顎に手を当てて考え込み始めた。

よくよく思い出してみれば、前回の授業で試験範囲は終わらせていたことを思い出す。ということは、この授業でやるべきことは既にないということだ。情けないことに、いつもネギ一人に授業の進め方を決めさせて――――もとい任せていたが故に、ダンテはそのことを考えておくのを忘れていたのである。

今さらになって彼はこの時間をどう使おうか考えるが、すぐに止めた。元々彼は計画立てて物事を決めるのは苦手である。今さら考えたところでいい案が浮かぶはずもないと開き直ったのだ。

「まあそうだな。だからはっきり言ってやることがない」

それが期待通りの返答だったのか、あやかは怜悧な笑みを浮かべた。

「でしたらこの時間はテストに向けての自習にしてはいかがでしょう？ダンテ先生には迷惑はかけませんので」

あやかの魅力的な提案に、ダンテはなるほどと納得する。既にやることがないのならば、生徒達に自習させればわざわざ自分が授業をする必要はない。

楽ができるならそれに越したことはないと、彼はあやかの提案を了承した。教師として非常に問題ある考えだが、正規の教師ではないのだから、律儀に勉強を教えることもない。そう結論づけて、彼は口を開いた。

「……そうだな。ならお前らで勝手にやってくれ。ただし自習する教科は英語だけだぞ」

ダンテの了承を受け、全員が英語の教材を取り出して自習を始める。何人かは別の教科に手を出しているようだが、彼は黙認した。先程は他の教科のことで質問されることを恐れていたために言ったが、隠れてやる分には構わなかったからだ。

彼は教壇に備え付きの椅子に腰を下ろすと、教壇の上に足を乗せる。生徒の何人かがそれを見ていたが、その視線を彼が気にするわけがない。呑気に眠り始める。

こうして一時限目が終了してあやかに起こされるまで、彼はすやすやと眠りこけるのであった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　９　バカレンジャーと図書館島（後書き）

皆さんお久しぶりです。第九話投稿しました。

ネギの課題における図書館島の一件は原作と大した違いはありませんが、ネギのいない間にダンテが２－Ａをまとめる描写を書きたかったので書くことにしました。とは言ってもダンテは何もしていないのですがね。やったのはバカレンジャーの無事を伝えることぐらいで。授業中も寝てましたし。本当にダンテに教師は向いてない。

話は変わって、ファンの間でも物議をかもしているＤＭＣの続編について少し。ちょっとＤｍＣの情報を見ていたら気になることがありました。主人公は名前を騙った別人ではなくダンテ本人で間違いない。これはまあいいでしょう。ですが、ダンテが天使と悪魔の子供というトンデモ設定は意味が分かりません。今までの作品を完全に無視した設定に怒りさえ湧いてきましたよ。本当にＤｍＣに対してこう言いたい。どうしてこうなった……

とまあ色々と言いたいことがあるのですが、それはまた次回に。それでは、またお会いしましょう。おやすみなさい。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１０　龍宮真名と悪魔狩人（前書き）

お知らせ

感想で本作のダンテはどの時期に当たるのか?という質問が多かったので、大まかな設定を載せようと思います。いつになるかは分かりませんがいずれ載せますので、待っていただければ幸いです。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１０　龍宮真名と悪魔狩人

１０／

ダンテが深夜の麻帆良学園都市を歩いている。いつも通りの赤のコートにギターケースを背負った姿。彼を知る者が見かければ、中等部の校舎で見る彼と同じように感じたに違いない。しかし、裏の顔を知っているものが見れば、今の彼の雰囲気には寄せつけがたい一種の気配が混じっていると窺い知ることができるだろう。

その気配は殺気に近いだろうか。とは言っても、何もそれを周囲に撒き散らしているわけでも、特定の誰かに向けているわけではない。まるで、これから来るであろう敵に向けられているかのようだ。

剣呑な気配を纏いながら、彼は学園都市の中央に聳え立つ世界樹に辿り着く。ここは周囲が広場になっており、休日の昼間には家族連れが遊んだりするのだが、当然のことながら深夜なので誰もいない。

否、たった一人だけいた。その影は階段の上で壁に寄りかかり、彼と同じくギターケースを壁に預けている女性が。これでもかというほど存在を主張している、モデル顔負けのスタイルに秀麗な顔立ち。これが自分の中学生でなければ、彼は一も二もなく声をかけたであろう。

女性は長い階段を上がってきた彼を認めると、背中を預けていた壁から離れて皮肉気に言った。

「おや、時間通り来るとは珍しい。明日は雨かな？」

「なに、女生徒の約束に遅れるほど無粋じゃないさ。真名」

名前を呼ばれた女性――――龍宮真名は妖艶な笑みをダンテに向けた。

◇

今夜の仕事は世界樹の防衛である。世界樹は世界中に点在する魔力集中の要所であるためか、そこを狙う者が後を絶たないのだ。

世界樹防衛は四組編成で行われる。一組は世界樹広場、即ちダンテ・真名が、残りの三組は世界樹の周囲を巡回しながら防衛に当たるのだ。

本来ならば、今日の世界樹近辺の担当は刹那と真名のはずだったのだが、刹那は図書館島に消えた木乃香が心配のようで、学園長に警備の交代を伝えていた。彼もそれに同意し、代わりに今日の担当ではないダンテに任せることになったのである。

そういえば、真名と仕事をするのは初めてだなとぼんやり考えな

がら、彼は隣で装備を確認している彼女に目を向けた。

彼女はデザートイーグル片手に点検をしていた。点検と言っても、事前に点検を済ませているはずなので、ただ手持ち無沙汰なだけなのだろう。銃口の大きさから察するに本物の拳銃ではなく、エアガンであるようだ。

次に視線は彼女の全体像に向かう。出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる、見れば見るほどに中学生とは思えないプロポーションである。たとえ大学生と偽っても誰も疑わないだろう。

「……何か失礼なことを考えているな？」

じろり。そんな音が聞こえてくるのではないかと言うぐらい剣呑な眼つきでダンテを睨む。真名にこれでもかいうほど睨まれてしまうが、彼は首を横に振って否定の意を示した。

「いや、ただ惜しいと思ってな」

「惜しい？」

真名がダンテの意味深な発言に訊き返す。『惜しい』という言葉を使うということは、彼女に何かが足りないと言っているのと同じである。ただ自分を見ただけで何が足りないと分かったのか、彼女には見当もつかなかった。

「ああ、実に惜しいね。仕事じゃなければデートに誘いたいぐらいだが、中学生じゃな……そうは見えないが」

真名は拍子抜けして溜息を洩らした。何を言うかと思えば、自分

が少なからず気にしている中学生離れした外見をネタにするとは。それに正式ではないにしろ、仮にも教師が自分の生徒を捕まえて好みだ何だと不適切なことを口走っていいのだろうか？

皮肉には皮肉で返すのが礼儀だと、彼女はダンテの方を見ずに言葉だけを返した。

「……残念だが、先生は私の好みじゃないんでね。誘うなら別の相手にしてくれ」

無碍に断られ、ダンテは大仰に肩を竦めた。刹那もそうだが、どうも同じ裏の仕事を知る仲に嫌われる傾向にあるようだ。おそらく彼の不真面目な言動や何事にも余裕の態度が、他人には人をバカにしているように見えるらしい。それで態度を改めるかと言われれば、はっきりノーと答えるだろうが。

その時、深夜の広場に電子音が鳴り響いた。つい先程まで静寂が周囲を支配していたためか、その音は存外に大きく聞こえる。

鳴ったのは真名の仕事用の携帯だった。ポケットから素早く取り出し、耳に当てて電話の向こうの誰かと会話を始める。その様子を彼は黙って見ていた。

用件が済んだのだろう。通話を切った彼女はギターケースからハンティングライフルとして使用されるレミントンＭ７００を取り出した。

「ガンドルフィーニ先生からだ。侵入者に奇襲されて相当数に抜けられたらしい。どうやらいつもの奴とは毛色が違うという話だ」

「それは楽しみだね。やるならそれなりに手応えがないとな」

そう言うダンテの右手には既にリベリオンが握られており、街灯に照らされて妖しく光を放っていた。麻帆良の安全を第一に考えなければならない警備員としては問題ある発言だが、既に戦士の顔になっている彼を見て、真名は感心しながらレミントンＭ７００を構えた。

戦い方はシンプルだ。前衛をダンテが務め、真名は後衛から援護をするだけ。刹那と組む時と全く同じである。コンビネーションに若干の不安は残るが、彼の動きに合わせて対応すれば問題ないだろう。

そして五分も経たないぐらいだろうか。広場の入り口とも言える道路の向こうから、侵入者が姿を現した。

ダンテより目が良い真名が先に標的を捉えた。報告では毛色が違うとしか言われなかったが、確かにその通りだった。いつもやたらとちょっかいをかけてくる三流術者が召喚する木端鬼とは格が違う。それがざっと四十体近く、わらわらとやって来ている。ガンドルフィーニは相当数抜かれたとは言っていたが、これは少々抜かれ過ぎだと彼女は一人ごちた。

「何や、たった二人かいな」

「ちと気ぃ抜き過ぎなんとちゃうか？」

階段の下まで差しかかった鬼集団の先鋒達が二人を見るなり笑った。戦力比を単純に計算しても二十対一。そして少なからず腕に覚えのある鬼が集まれば、この反応も当然と言える。

一方で、真名は今までの経験で培った冷静な思考の中で状況を整理する。鬼の集団はどれも手練れ、それが四十体もひしめいている。それでも手合わせで見たダンテの実力があれば、二人で四十体を倒すことは難しくない。だが、世界樹を守る二人としては抜かれれば終わりである。たとえ辿り着かれても何かする前に止めれば問題ないが、あらゆる最悪の事態を想定する彼女からすれば、相手が一瞬で事を成す可能性を捨てることはできないからだ。

取り得る手段としては、彼を一人で鬼の集団に突撃させ、自分は世界樹に向かってくる相手だけを確実に排除する方法がある。だが、その方法は彼の命を保証できない危険な賭けだ。正式な警備員ではない雇われの身としては、彼を見殺しにしたと言いがかりをつけられるのはプロとして本意ではない。

不安はもう一つある。彼が一対多数にどれほど慣れているかである。確かに刀子との手合わせは実力の一端を見せつけた素晴らしいものだったが、あくまでそれは一対一に過ぎない。裏の仕事を請け負ってきた便利屋だから複数相手の戦闘にもある程度は慣れているのだろうが、一緒に仕事をしたこともない相手の実力を盲目的に信じるほど彼女は楽天家ではない。

多少無茶だが、彼を最低限守りつつ世界樹も守るという方法を採るしかない。そう思考を打ち切った彼女は作戦を伝えようと隣に視線を向ける。しかし、彼はそんなこともお構いなしに一歩を踏み出して鬼に向かって歩き始めていた。

「おいっ、何を……」

真名が素早く止めに入る。せめて最低限の援護しかできないこと

を伝えなければならない。彼女が口を開こうとした時、それを遮るようにダンテが肩越しに見て言った。

「一人でやらせてくれないか？」

有無も言わせない口振りに一瞬言葉に詰まるが、一人前線で戦わなければならないことが分かっているなら問題ない。真名は確認のために尋ねた。

「大丈夫なのかい？」

「任せな。お前の手を煩わせはしないさ」

ダンテは真名にニヒルな笑みを浮かべると、リベリオンを担ぎながら鬼の集団に歩み寄っていった。

彼が残り五メートルまで近づくのを眺めていた先鋒の鬼は、自分に比べてちっぽけに見えるぐらいの人間を見て怪訝な声を上げる。

「何や？一人でやる気かいな」

「いい根性してるのぉ」

「手加減はせんけどな」

そう言って口々に笑う鬼達を睥睨したダンテは、肩に担いだリベリオンを彼らに向けた。

「何をごちゃごちゃ言ってんだ？来いよ。遊んでやる」

「ぐわはははは！威勢のいい兄ちゃんや！なら遊んでもらおうか！」

言うや否や、一体の大鬼が丸太のように太い棍を振りかざし、ダンテに向かって振り下ろす。だというのに、彼は身じろぎもしない。ただ自身に振り下ろされる棍をぼんやりと眺めていた。

次の瞬間、凄まじい轟音と粉塵が舞い上がった。砂礫（されき）が周囲に弾け、地面や壁に転がって甲高い音を立てる。これほどの被害、もし直撃すれば人間の体など容易く叩き潰されていたであろう。

しかし――――

「おいおい……冗談やろ……」

当の大鬼が信じられないものを見たかのようなか細い声を上げた。

そこには、相変わらず余裕の笑みを浮かべるダンテの姿があった。彼の体には傷一つ見られない。先程と全く変わらない状態でそこに立っている。

だが、注目すべきところはそこではない。

彼はその場から一歩も動いていなかった。それは彼が棍を躱して難を逃れたわけではないことを示している。では剣で棍の軌道を逸らしたのか。否。断じて否である。棍は地面に叩きつけられたのではなく、宙に浮いて静止している。ならばどうやって棍から逃れたというのか。

「イイね。その辺の掃き溜めよりはガッツがありそうだ」

ダンテはニヤリと口角を上げながら大鬼を見上げた。

驚くべきことに、彼はリベリオンの横腹で棍の一撃を正面から受け止めていたのだ。それも自分より圧倒的に体躯がある、大鬼による超重量級の一撃を片手でいとも容易く受け止め、あまつさえ拮抗している。否、それどころか大鬼の棍がじりじりと押し戻されていく。にわかに信じがたいが、大鬼の膂力を凌駕しているのだ。

咄嗟に分が悪いと判断した大鬼は、棍を退けて巨体に似合わぬ跳躍力で距離を取る。それを彼は黙って見送り、追うことはしなかった。まるでここで見逃そうと結果は変わらないとでもいうかのように。

間合いの外に逃れた大鬼が正面を睨みつけると、彼はリベリオンを肩に担ぎながら自然体で鬼達を見ていた。見ると彼の足元は無残にへこみ、先程の一撃が並大抵の一撃ではなかったことを明確に示している。ということは、棍の一撃を受け止めたのは決して偶然ではなく、彼の膂力の賜（たまもの）であるということに他ならない。

真に恐るべき点は、彼が全くと言っていいほど肉体強化をしていなかったことである。昔と違い、人間は魔力や気によって肉体を強

化して異形に対抗してきた。そうしなければ、遠距離戦ならともかく近接戦で異形に対抗できなかったからであるが、彼はそれをしていない。つまり単純な力比べで勝負を挑み、あまつさえ押し勝ったのである。それを悟った大鬼は、彼への侮りを即座に捨てた。

「どうした？遊びたいんだろ？来いよ」

ちょいちょいと手のジェスチャーでかかってくるように言うダンテに、鬼達は思わずたじろいだ。だが、召喚された鬼達の中でも指折りの実力を持つ大鬼の一撃を軽々と受け止めた彼に、無闇に突っ込む愚を犯す必要はない。あくまでも目的は世界樹に辿り着くことなのだから。

「半分はこの兄ちゃんの足止めや！残りは世界樹に行けい！」

大鬼の号令の下、一斉に鬼達が世界樹に押し寄せる。大鬼を含めた二十体がダンテを囲み、四方八方から襲いかかった。

四体の小鬼が彼に飛びかかる。正面の一体が棍棒を振りかざし、彼の頭を砕こうと振り下ろす。それを彼が半身になって回避すると、上段蹴りで頭を打ち据えて小鬼を吹っ飛ばした。

次に彼は左右から同時にやってくる小鬼を迎え撃つ。首と胴を同時に狙った多重攻撃に対し、彼はたいへん単純（シンプル）な対処をした。リベリオンを体ごと振り回したのである。

だが、何よりも速さが違った。瞬く間に二体の小鬼をほとんどの時間差なく斬り裂いたのだ。二体の小鬼はどうして自分が斬られたのかも分からないまま、現世を去ることになった。

そして、最後の真上から襲いかかった一体は槍の一突きを軽々と躱され、アッパーカットで三階建ての建物の向こうまで殴り飛ばされた。

それらの一連の流れが一秒の間に行われたのだから、足止めを買って出た鬼達も驚愕するしかなかった。

一方、残りの二十体は彼らの脇を抜けて最終防衛線（デッドライン）たる真名に向かっていた。真名はレミントンＭ７００のスコープを覗き、烏族の頭に照準を合わせて引き金を引いていく。それらは正確に標的の頭を撃ち抜いたが、二発撃った時点でＭ７００を投げ捨て、二丁のデザートイーグル――――とは言ってもガスガンだが――――を構えた。

何故銃を持ち替えたのか？それにはＭ７００の欠点に理由がある。Ｍ７００の欠点は、ボルトアクション方式を採用しているが故に、一発撃つごとに手動で薬莢を排出しなければならない点にある。彼女の腕を以ってすれば次の敵に照準を合わせつつ薬莢を排出することなど造作もないが、それでもセミオートマチック狙撃銃より連射速度が劣ってしまう。二発撃った時点で鬼達が階段の中腹まで迫っていたために、彼女はデザートイーグルに持ち替えたのである。

では最初からデザートイーグルを使えば良かったかと言えば、そうでもない。彼女は術式を施されたガスガンを使用しているので、敵にも一定の効果を与えることができるが、ガスガンである以上弾速は実銃と比ぶべくもない。遠距離から撃っても弾速の遅さ故に躱されてしまうのだ。そのため、彼女はそれを専ら接近戦で使用し、ガスガンの利点である装弾数の多さで火力不足をカバーしている。

しかし、二十体を相手できるかは微妙なところだ。デザートイー

グルの装弾数は最初に込めていた一発を含めて二十八発。それを二丁持っているので五十六発。それらで二十体を相手にしなければならない。術式を施されているとは言え元は遊戯銃なので、急所に撃ち込まない限り一発で倒すのは難しい。全弾をノーミスで命中させなければ、二十体全てを捌くのは難しいだろう。しかも、ただ捌くだけではなく、一人もこの防衛線を抜かせてはいけないのである。

――二十か。ギリギリだがやるしかないな――

より正確に、より速く行わなければならない作業に、真名は一筋の汗を流した。

だが、その心配も杞憂に終わることになる。

一発の銃弾が広場を切り裂く。と同時に、階段を上りきろうとしていた一つ目鬼の頭を吹き飛ばした。彼女が鬼達の後方を見る。

そこには、左手に握られた黒い大型拳銃『エボニー』を構えたダンテの姿があった。銃口から硝煙を立ち昇らせており、一つ目鬼を撃ったのは彼だということが分かる。それは良い。だが――――

「馬鹿が！後ろだ！」

真名が叫ぶ。立ち位置の関係上、一つ目鬼を撃つには振り返る必要がある。前方に敵がいる状況で後ろに振り返ればどうなるか、馬鹿でも分かる。

案の定、彼の背後では狐女がトンファーを振りかざしていた。先程の小鬼より素早い動きは、彼女が手錬れであることを表している。彼が振り向こうとするが、明らかに間に合わないと分かった。

――間に合わん！――

真名の狙撃では間に合わない。デザートイーグルでは弾速が足りないし、レミントンＭ７００を拾ってからでは遅すぎるからだ。

誰もがダンテの死を予感した、その時である。

彼女は見た。

振り向きざまにエボニーを指先で回転させ――――

狐女のトンファーを受け流し――――

体勢を崩した彼女の頭に銃口を押しつけ――――

――――脳天を吹き飛ばしたダンテの姿を。

「ん？女だったか。悪いな、咄嗟に撃っちまった」

ダンテは悪びれもせずに言った。

誰もが呆気に取られる。いまだかつて、あのように攻撃を躱わした人間がいただろうか？否、いるはずがない。真名も剣の横腹に銃のグリップ部分を叩きつけて斬撃を逸らすことはできるが、銃回しで斬撃を逸らすなど危険すぎる。下手をすれば指が落ちるかもしれない危険な行為だ。

だが、彼はやってのけた。いとも容易く、まるでそれが当然のことのように。

「余所見していいのか？」

呟くと同時に、ダンテがリベリオンを捨てる。そして空いた右手をコート裏に突っ込むと、そこから白銀に輝く大型拳銃『アイボリー』を抜いた。

真名は一つ勘違いをしていた。彼を刹那のように純粋な剣士と決めつけていたが、そうではない。彼はリベリオンと『エボニー&アイボリー』を自在に操るデビル ハンターなのだ。

耳をつんざく轟音と共に、マシンガンのごとく吐き出された弾丸が寸分の狂いもなく鬼達の脳天を撃ち抜く。気が付けば、世界樹に向かっていた二十体は全て消滅し、彼の足止めに残っていた十数体を残すのみとなっていた。

「に、二十体の腕っこきが一瞬で……！？」

「信じられん！」

鬼達もさすがに恐れ慄(おのの)いた。少々油断を突かれたとは言え、たった一人の人間の手によって、一瞬で手勢の半分以上を失ったのだ。もはや目的を達成することすら困難になった。

「どうした？まだやるかい？」

ダンテはエボニー&アイボリーをホルスターに収め、リベリオンを肩に担いでいた。再び向かえば、その剣は鬼達の悉くを狩る死神の鎌となるはずだ。

しかし、それで止めるかと言えば、答えは否である。召喚された身であるのなら、たとえ倒されようが最後まで戦うのみ。

大鬼は棍を一振りすると、正面に悠然と立つ彼を見下ろした。

「……もう少し付き合ってもらってくれへんか？」

「イイね。やっぱあんたガッツあるぜ」

ダンテは心底楽しそうに笑った。

その後の結果は、敢えて語るまでもないだろう。

何故なら、それは誰もが予想した通りの結末だったのだから。

◇

深夜の世界樹広場で繰り広げられていた戦闘はあっけなく終了した。一体も世界樹に辿り着くこともなく、たった二人の人間の前に敗れ去ったのである。

「ホンマあかんわ～……あんた、何者や？」

半身が既に消滅しかかっていた大鬼は、ダンテに向けて率直に尋ねた。ただの人間が肉体強化もなしに大鬼に力比べで勝てるはずがない。大鬼が彼の素性を知りたくなるのも仕方ないと言える。

「人間さ。それ以外に答えようがない」

ダンテは肩を竦める。その態度に何も答える気がないと分かったのだろう。大鬼は豪快に笑った。

「ぐわはははははは！兄ちゃんホンマいけずやで！まあええわ。ワシも楽しめたしな」

ひとしきり笑うと、大鬼は親指を立てる。もう体も頭部と右手し

か残ってはいないが、最後の言葉を言い残すには十分すぎた。

「今度会った時は酒でも飲もうや。ワシがとっときの持ってくるで」

「そりゃ楽しみだ」

ダンテと大鬼はお互いに笑う。どうも二人は気が合うようで、先程まで殺し合いしていたとは思えない。

そして、そのまま大鬼は跡形も残さずに消えた。既に動く者はダンテと真名を除いてはおらず、夜の街に静寂が戻る。

周囲の惨状は酷いものであった。階段は所々抉れ、隣接する建物には人型の穴が空いている。ダンテが蹴り飛ばした小鬼の跡だ。また、銃痕が至る所に残っているので、修復には魔法使いの協力が必要だろう。それだけ彼が暴れたということだ。

リベリオンを背中に背負い、エボニーをホルスターに収めようとするダンテに、真名は階段を下りて声をかけた。

「銃も使えるんだね」

「ああ……そういやこの前は使わなかったからな」

ダンテは微笑を見せると、改めてエボニーを弄び始めた。

彼の言う“この前”とは、刀子との手合わせの時のことである。その時にはリベリオンしか使わなかったこともあってか、警備員の中でも彼が銃も使えることを知る者は少ないだろう。知っているの

は学園長ぐらいだろうか。

真名も当初、彼が刹那と同じ剣士だと思っていたが、とんでもない誤りである。彼は剣の腕前だけではなく、銃の腕前も一流だったのだ。

まず、彼の扱うエボニー&アイボリーが規格外である。その名称の通り白と黒の大型拳銃なのだが、元の拳銃が何であったかさえ判別することはできず、これでもかというほど大きい。デザートイーグルより大きく、まるで鈍器だ。これだけ大きければ、殴るだけでもそれなりの効果を与えられるだろう。

次に規格外なのは、自動拳銃にあるまじき連射性能だ。あれだけ間断なく撃ち続ければフレームが熱で変形し、使い物にならなくなるはずなのだが、相当頑丈に作られたのかそれらの損傷が全く見られない。それを作った人間の技量が窺える。

だが何よりも規格外なのは、それらを苦もなく扱う彼の腕前であろう。反動も並大抵ではないはずなのに腕力で強引に抑えつけ、マシンガンのごとく連射する。しかも標的には寸分違わず命中させるのだから、彼女にしてみれば驚愕するしかない。同じことをできるかと言えば、間違いなくノーと答えられるだろう。

そもそも、二丁拳銃は実用的な手法ではない。元々、二丁拳銃は再装填に時間のかかるリボルバーが主流だった時代、リロードの隙を少なくするために考案された手法である。撃ち終わったら再装填せずに銃ごと持ち替えることで隙を少なくするので、両方を同時に撃つこと自体が稀であり、現在はマガジン交換の容易な自動拳銃に取って代わられ、意味が薄れてしまっている。

彼女もデザートイーグルを二丁拳銃で使っているが、それは実銃よりはるかに装弾数が多いからで、弾切れになれば迷わず銃ごと取り換える。そうでもなければ、実力が拮抗している相手の隙を突いてリロードを行うことができないからだ。

だが、彼は違った。鬼に四方八方から狙われながら、彼はマガジンを悠々と交換していた。二本のマガジンを空中に投げながら鬼を斬り倒し、それらを二丁同時に再装填するという荒業を披露して。それを見て、彼女は笑うしかなかった。

彼の実力は、鬼どころか自分さえ圧倒的に上回っていると。

「見たことない銃だが、自作かい？」

真名が尋ねる。これほどまで素晴らしい拳銃を作り出した人間に興味を持つのは、銃器使いとして当然と言えた。

「いや、組み立てたのは俺だが、作ったのは知り合いだ」

だが、ダンテはにべもなく否定する。エボニー&アイボリーは『45口径の芸術家』であるニール・ゴールドスタインが技術の全てをつぎ込んだ傑作だが、諸々の事情でダンテが組み立てなければならなかったからだ。

一方で、彼の否定の言葉に真名も心なしか安心していた。剣や銃の腕前だけでなく、銃まで自作したと言われたなら、彼女が今まで築いてきた自信とやらが粉々に砕け散りそうだったからである。

「まったく人が悪い。銃も使えるなら最初に言っておくべきだろうに」

これは真名の本心だった。銃を扱えるならまだ違う作戦を立てられたというのに、そのおかげで無駄に肝を冷やしてしまったのだから文句の一つも言いたくなる。

ダンテはエボニー&アイボリーを仕舞いながら振り返り、両腕を大仰に広げる。その演技がかった振る舞いに鼻白んだ彼女だったが、彼が次に紡ぎ出した言葉に内心で気構えた。

「なに、秘密は多い方が魅力的になるだろ？男も……もちろん女もな」

ダンテの妙な視線に、真名は顔には出さないまでも敏感に反応した。彼の見る目はどうも裏がありそうに見えたからである。

――まさかこの男……気付いているのか？――

真名は探るような眼つきでダンテを見つめた。

何を隠そう、彼女は純粋な人間ではない。刹那と同じく、異種族とのハーフなのである。しかも、彼と同じく悪魔との間に生まれた半人半魔。故に誰にも気づかれないように気をつけたつもりだったのだが、どうやら気付いているようである。それは彼女にとっても同じことなのだが。

思えば、刹那の様子が最近おかしいように思っていたが、彼に正体を見破られたのが原因だとしたら説明が付く。ならば自分の正体にも気づいているだろう。色々と詮索してこないのは刹那の二の前にならないように配慮しているのかもしれない。真名はそう結論づけた。

「……確かに、そうだな」

ここは話を合わせておいた方がいいと判断して同意した真名に、ダンテはだろ?と言って笑う。

男としての興味は全くないが、なかなかに面白い人物だと彼女は評価を改めた。

そうして二人が話していると、警備員が来たらしく道の向こうから靴音を立てて二人に駆け寄ってきた。

「ダンテ君、真名君、無事か!?」

現れたのは、真名に連絡してきたガンドルフィーニと高音・D・グッドマン、佐倉愛衣の組だった。余程の戦闘だったのか、全員が傷だらけである。

「見ての通り、傷一つないさ」

ダンテは傷一つついてないことを見せるために両手を広げる。それを見て、ガンドルフィーニの顔にも安堵の色が浮かんだ。

しかし、真名の表情は険しかった。四十体の鬼達におめおめと突破され、そして事が終わってからのこのことやって来る彼らに良い気分はしない。ダンテのおかげで事なきを得たものの、危うく防衛線を抜かれるところだったのだ。嫌味を言うほど子供ではないが、理由ぐらいは聞かないと納得できない。

「ガンドルフィーニ先生。これは一体どういうことですか?」

ダンテの横から一歩踏み出して尋ねた。真名を見て訊きたいことを察したのだろう。ガンドルフィーニは一転して苦々しい表情を浮かべる。

確かに彼女の言うことは尤もだ。いくら奇襲されたとは言え、四十体もの鬼達に突破されたのは紛れもない事実。叱責は覚悟の上だった。

「済まない……完全に私のミスだ。襲われた時点で援軍を呼ぶべきだった……」

話を聞くと、当初侵入者が召喚したのは四十体の鬼だけだったのだという。数が多いとは言え、魔法先生と魔法先生が三人協力すれば殲滅も難しくなかった。

しかし、ここでガンドルフィーニは判断ミスを犯す。術者を一人だと判断してしまったことだ。そのせいで前方に注意が向き、背後に迫るもう一人の術者に気付かず、挟撃される形で奇襲されてしまったのである。

何とか男の術者は捕らえたが、女の術者には逃げられてしまったとのことだ。ガンドルフィーニの目算では、男の術者は並み以上、女の術者の方はかなりの上位術者だったようだ。

「ちょっと待ってください！それは私が足手まといだったからで、先生は悪くないんです！」

そこで愛衣が口を挟んだ。彼女の口振りから察するに、侵入者に突破された原因は彼女にあるらしい。どうやら術者が積極的に彼女

を狙い、そのせいで殲滅に異常なまでに時間がかかったとのことだ。

真名は話を聞いて納得する。仕事を堅実にこなすガンドルフィーニにしてはらしくないミスだと思ったが、相当の術者にしてやられたとならば止むを得ないと言える。だからと言って責任が消えるわけではないが。

「話は分かりました。ですが、こちらも危うくやられるところでした」

「それは……済まないと思ってる。今夜の事も学園長に話し、処分を受けるつもりだ」

ガンドルフィーニは真摯に謝罪した。自分より目下の生徒を相手に頭を下げる生真面目さは、実に彼らしいと言える。

だが、そんな真名の態度が気に入らなかったのか、彼の後ろでは高音が彼女を睨みつけている。立派な魔法使いを目指している彼女からすれば、金で仕事を引き受ける真名のような人種は彼女の考える正義に反するのだろう。

ただ、彼女の抱いた感情は見当違いである。真名は正規の警備員でもなければ、立派な魔法使いを目指しているわけではない。あくまで雇われの身なのだから、仕事に応じた報酬を請求しようが文句を言われる筋合いはない。

どうも高音は一度これと決めたら他に思考が回らない一直線な性格であるようで、真名とは考え方が合わないのは当然と言える。それを知っていたからこそ、彼も素直に謝罪したのかもしれない。

険悪な空気が場を支配する中、愛衣が後ろで。彼女にしてみればお姉さまと慕う高音の肩を持ちたいが、足手まといになった自分の尻拭いをしてくれた真名に口を挟める立場ではない。

彼女が市場と事情の板挟みでオロオロしていると、今までジッと黙り込んでいたダンテがようやく口を開いた。

「……まあ良いじゃないか、ガンドルフィーニ。後ろのお嬢さん方も無事で、こっちも怪我一つない。万々歳さ」

ダンテは肩を竦めた。彼にとって誰も怪我を負ってないのだから気にすることではないし、それどころかガンドルフィーニのミスで自分に鬼を排除するお鉢が回ってきたのだから、感謝しているぐらいである。ただそれだけではなく、学園長のことだから処分はないだろうとも思っていたのもあるのだが。

ダンテの言葉に本当に気にしていないと感じたのだろう。ガンドルフィーニは硬い表情を崩した。

「そう言ってくれると助かるよ。少し気が楽になった」

ダンテが責めなかったことでガンドルフィーニの表情に硬さがなくなったからだろうか、いきり立つのが馬鹿らしくなった高音は厳しい眼差しを真名から外し、溜息を吐く。空気が和らいだおかげか愛衣も安らいだ表情を見せ、険悪な雰囲気を瞬時に変えた彼に尊敬にも似た視線を向けたのであった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１０　龍宮真名と悪魔狩人（後書き）

第十話投稿しました。バオーです。

今回は刹那の代理として真名と警備に当たるダンテの話でした。この時期の敵はまだまだ弱いので、苦戦することなく倒してしまいましたが、どうも上手く描写できなくて中途半端な出来になってしまいました。後で少し書き直すかもしれません。

銃の腕前は、こと拳銃に関してはダンテの方が上です。真名でも銃弾に銃弾を当てる彼には流石に敵わないと思いまして。まあ彼女が本気を出したら同等ぐらいになると思いますが。

次話はバカレンジャーの話に戻ると思いますが、少しモチベーションが上がらなくて全然書けてないので、更新は遅れるかもしれません。それでも待っていただければ嬉しいです。

設定（前書き）

申し訳程度に、本作の主人公の一人であるダンテの設定を書きました。確定情報ではないものや、シリーズとの整合性を取るための独自設定が多々ありますが、参考にしていただけたら幸いです。

設定

ダンテ

概要

アメリカのとあるスラムで便利屋『Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ』を経営している何でも屋。だがその正体は悪魔退治を生業とするデビルハンターにして、約二千年前に魔界の侵攻から世界を救った伝説の魔剣士スパーダの息子。

人物

悪魔と人間の血を半分ずつ引いている半人半魔。父は伝説の魔剣士スパーダ。母は人間のエヴァ。その二人の間に、双子の弟として生まれた。兄はバージル。３以前は偽名として『トニー・レッドグレイヴ』と名乗っていた。赤いロングコートと背中に背負った大剣リベリオン、大型二丁拳銃エボニー&アイボリーがシンボル。

悪魔の血を引いており、驚異的な怪力と生命力を持つ。その生命力は身体が損傷しても瞬時に再生するほどである。故に、脳を銃弾で貫かれた程度では死なないし、心臓を剣で貫かれても痛いで済ませられる。

悪魔の存在を五感で感知したり、人間と人間に化けた悪魔を見分けたりすることも出来る。また、内なる悪魔の力を引き出すことで魔人と化す。

性格

非常に気障で怠惰な性格で、人を喰ったような態度を崩さない皮肉屋。

スパーダと彼の偉業、そして彼から受け継いだ力を誰よりも誇りに思っている。力や肉体よりも魂や精神の強さを重んじ、ダンテ自身も父の正義感と母の優しさを受け継いでいる。故に自らの正義に忠実であり、相手がどんな相手であろうとも媚びることはない。

母を殺害した悪魔を憎んでおり、悪魔を狩ることを生業としている。便利屋を開業したのも母を殺した悪魔を探し、仇を討つため。ただ3のアーカムのように、人間でも悪魔のような冷酷な心を持つ者に対しては容赦しない。逆にトリッシュやアニメ版に登場するブラッドのように、悪魔でも人としての心があれば人間として認め、接する。

不潔ではないが、めんどくさがり屋な面がある。仕事を週休六日制だと公言していることからも、その怠惰な性格が窺える。また、ギャンブルに非常に弱いという一面を持つ。現金を賭けた勝負でも、賭けなしの遊びでも勝てない。子供にすら負けるほど。

意外にも女子供には優しい。一時は知り合いの子供の世話をしていたこともある。

好物はピザ（オリーブ抜き）とストロベリーサンデー。トマトジュースも結構好き。また、酒には滅法強く、酒樽一杯のウォッカを飲み干すほど。特にジントニックが好み。趣味は不明だが、店内にはドラムやベースギター、ジュークボックス、ビリヤード台やダーツの的などがあるので、それなりに嗜むようだ。決め台詞は「Ｊａｃｋ　Ｐｏｔ！！」（＝大当たりだ！！）。

嫌いなのは煙草や自分よりお喋りな奴。裏でこそこそ企む奴もあまり好まないようだ。

武器

リベリオン

スパーダが振るったと言われる魔剣の一振りにして、ダンテ愛用の魔剣。鍔に当たる部分の両側に髑髏の彫刻がなされ、まるで一つの金属から削ったかのような銀一色の大剣。どんなに乱暴に扱おうとも折れない非常に頑丈な作りをしており、雑魚悪魔よりも遥かに強い魔力を持つ魔具としても機能している。母エヴァが殺害された際にダンテに逃げるように忠告したのもこの剣である（声の主が誰であるかは不明）。

最初ダンテに遺された時は真の姿ではなく、３の劇中で彼の血を大量に受け、覚醒と同時に形状が変化している（鍔にある髑髏の口や突起が開いた）。

ソードピアスやラウンドトリップ後など、ダンテの意思を受けて

手元に飛んで来る。どうやら彼の魔力で操っている模様。

依頼出張中は基本的に背中に背負っているが、人の多い所を通るなどで稀に依頼をライブに行くと称してギターケースに入れて持ち歩く事がある。本作の活動拠点はほぼ麻帆良学園都市内なので、ギターケースに入れる場合がほとんど。

エボニー&アイボリー

ダンテのシンボルの一つである大型の二丁拳銃。黒い方がエボニー、白い方がアイボリー。現実では扱い切れるわけがないぐらい拳銃としては馬鹿でかく、大の大人が両手でやっとというぐらい重い。元フレームは45口径コルト・ガバメントと思われるが、ダンテの乱暴な連射に耐え得るよう徹底的に改造されており、もはや原型を留めていない。

エボニーの方は精密射撃に優れ、アイボリーの方は連射射撃に優れているが、形状にほとんど違いはない。威力は上級悪魔を相手するには心許ないが、既成の銃よりはるかに高い。精度も、ダンテが狙ったところに寸分違わず命中することから、相当精度が良いと思われる。

『45口径の芸術家』と言われたニール・ゴールドスタインが、渡した銃を悉く破壊するダンテを見かねて製作した傑作銃。だが、パーツ自体は彼女が用意したものの、ある事情により組み立て自体はダンテによって行われた。

名前の由来は、ダンテの銃の扱い方が、まさにピアニストが流暢にメロディを奏でるかの如く美しいことから名づけられた。

魔人化

内なる悪魔の力を解き放ち、自身を魔人と化すダンテの切り札。ほぼ全ての能力が大幅に上昇する。ただし魔人化が不安定なのか、装備する武器によって容姿が変化してしまう。もし安定化させることができれば、どんな武器を装備しても容姿がコロコロと変わることはなくなるだろう。

時代設定

本作の設定は3の後、ダンテが『Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ』を開業してから数年後ぐらい。どちらかと言うと、年齢は3よりも1に近い。故に、3のやんちゃな性格はだいぶ落ち着き、1の時のクールな言動を見せるようになった……が、テンションが上がると思わずやんちゃな性格が出てしまうことがある。

麻帆良に来た理由

学園長からの依頼であることと、レディの謀略により、強制的に麻帆良学園都市へ派遣させられた。故に、ダンテ自身は依頼に乗り気ではない。だが、彼と同じく英雄を父に持つネギと出会い、彼の周りを取り巻く事件を通じて、スパーダの息子としての才能を開花させていく。

その他

本作のダンテはこと戦闘に関しては他の追随を許さないほどの才能（センス）を持っているという設定。初めて触れた武器を自由自在に操ったり、幼少期にちょっと父から剣の稽古をつけてもらっただけで、後は実践のみで最終的に魔界の帝王に勝利したりするほどなので、本作で彼より戦闘才能（バトルセンス）に秀でた者はいない。

設定（後書き）

皆さんこんばんわ、バオーです。設定を投稿いたしました。

しばらくぶりにＰＣに触れたので、本編の執筆が全然進んでません。なので、本編までのつなぎとしてダンテの設定を書くことにしました。

前書きでも書きましたが、上記の設定は確定情報ではないものや私の推測に基づくもの、シリーズ（アニメ版や小説版、漫画版を含む）との整合性を取るために付け足した独自設定が多々あります。もし皆さまの中で「〇〇は違うんじゃないか」、「〇〇より？？の方がしっくりくるのではないか」というご指摘、または「〇〇を書いてないよ」などの追加情報がございましたら、何でも良いのでおっしゃってください。それらが私の推測よりも説得力があったり、正しかったりすれば、順次追記していこうと思います。ただし、それらが確定情報ではなかったり、あまりにもソースがはっきりしないものであったりすれば、誠に勝手ながらそれらが追記されない場合がございます。それはご了承ください。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１１　図書館島を脱出せよ

１１／

地底図書室で学期末テストに向けて試験勉強していたバカレンジャー一行は、何故か先日の巨大ゴーレムと遭遇していた。ゴーレムの手の中で、水浴びの隙を突かれて捕まったまき絵が助けを呼んでいる。当然彼女は何も纏っておらず、惜しげもなく素肌を晒している。

「誰か助けてー！」

「まきちゃん！？」

「さ、佐々木さん！」

木乃香に呼ばれて駆けつけたネギと明日菜は目を剥いて驚く。それもそうだろう。バカレンジャーを地底図書室に叩き落としたものと同型のゴーレムが、まき絵をその手に掴んでいたのだから。否、同型ではなくまさにそれなのかもしれない。侵入者である彼らを捕まえようと追ってきた可能性もあるからだ。

すぐに彼女を助けようとゴーレムに杖を向ける彼だったが、魔法を詠唱する寸前に踏み止(とど)まった。魔法を知っている明日菜は良いと

しても、その他バカレンジャーや木乃香の前で魔法を使用するわけにはいかない。そして何よりも、彼は三日間の誓約によって魔法が使えないことを思い出したからだ。

では闇雲に飛び込むべきか？それこそ愚の骨頂だろう。ゴーレムはどう少なく見積もっても一トン以上ありそうである。十歳の体でしかない自分が突っ込んだところでビクともしないに違いない。

自分にはどうやってもまき絵を助けることができない。突きつけられた現実に歯噛みする彼に対して、ゴーレムがさらに追い打ちをかけるように話しだした。

「フォフォフォ、ここからは出られんぞ。もう観念するのじゃ！迷宮を歩いて帰ると三日はかかるしのう！」

ゴーレムの非情な宣告にバカレンジャー一行は愕然とした。地上への帰還に三日もかかるということは、どう頑張っても明日のテストに間に合わない。テストで良い点を取って留年を逃れるためにここまで来たのに、そのテストを受けられないのであれば本末転倒ではないか。

しかし、ネギを含めて一行に諦めの心境が芽生える中、一人だけ気を吐く者がいた。

「私達は諦めないんだからね！明日の期末テストまでに絶対ここを抜け出してやるんだから！」

明日菜が握りこぶしを掲げながら啖呵を切った。その力強い言葉に、全員が驚きの目で彼女を見つめる。

今の彼女の言葉が何の根拠もないということは、バカレンジャーはもちろんのこと、彼女自身がよく分かっていた。図書館島の魔法の本を守護するゴーレムが言っていることは、おそらく事実であろう。わざわざ嘘をつく理由がない。

だとしても、彼女達は明日のテストを諦めるわけにはいかなかった。自分達の留年はなくても、実際にはネギのクビがかかったテストなのだ。自分達の勝手な都合で巻き込んでおいて、挙句の果てには彼の修業を失敗させでもすれば、寝覚めが悪いどころの話ではない。

「みんな、逃げながら出口を探すのよ！」

明日菜の声を合図として、全員が目的を果たそうと動き出す。楓と古はゴーレムに視線を外さずに後退し、木乃香は全員の着替えと荷物を拾いに拠点へ向かった。

「フォフォフォ、無駄じゃよ。出口はない！」

ゴーレムが高らかに笑いながら向かってくる。その手にはいまだにまき絵が捕らえられている。彼女を助けようとネギと明日菜が機会を窺うが、夕映だけがまき絵ではなく、ゴーレムのある部分を凝視していた。

「みんな！あの石像（ゴーレム）の首のところを見るです！」

夕映が声を張り上げながら指を差す。彼女の言葉に釣られ、全員が視線をゴーレムの首に向けた。

そこには、彼女達が図書館島に来た目的である魔法の本、メルキ

セデクの書が引っ掛かるように首に乗っていた。どうやら、ゴーレムが足場を破壊した拍子に一緒に落ちていたようだ。魔法の本を守護するためのゴーレムが侵入者と一緒に落ち、挙句の果てにはそれを無くすとは、何とも間抜けな姿である。

「本を頂きます！クーフェさん、楓さん！」

「オーケー！バカリーダー！」

即座にメルキセデクの書を奪えと指示を下した夕映に応え、楓と古がゴーレムに接近する。楓は素人とは思えないほどの素早い動きでゴーレムの死角に回り、古は正面から突撃した。

「中国武術研究会部長の実力。見るアルよ！」

言うが早いか、古は気を練った拳をゴーレムの左足に叩き込む。その衝撃は凄まじく、拳が左足にめり込み、足元を掬われてその巨体が天を仰いだ。

同時に、楓も行動を起こす。一足跳びでゴーレムの右手――――即ちまき絵を奪取せんと飛びかかったのだ。

普通ならば、彼女を奪い返すのは無茶な行為と言える。強固に握られた右手はがっちりと彼女を拘束しており、とても引っ張り出せるとは思えないし、そんな悠長なことをゴーレムが黙って見ているはずがなかったからだ。

しかし、楓は一人ではない。今度は古が飛び蹴りを右腕に食らわせ、一瞬だけ拘束を緩ませる。そこを抜け目なく、楓は彼女を奪い去った。

「フォ！？」

ゴーレムが驚きの声を上げる。それも当然と言えるだろう。自分よりも遥かに小さい少女達に容易くまき絵を奪われたのだから。

だが、ゴーレムが驚くのはまだ早い。ようやく解放された彼女が得意のリボンを振るうと、それはまるで獲物を襲うヘビのように動き、ゴーレムの首に引っ掛かっていた魔法の本を見事に掻(か)っ攫(さら)ったのである。

まき絵も魔法の本も手に入れた以上、ゴーレムにかかずらわっている時間はない。全員がそう結論づけると、仰向けに倒れるゴーレムから一斉に逃げ出した。そこに全員分の荷物を持った木乃香が合流し、とりあえず服を着ることにする。

けれども、明日菜や夕映はともかくとして、楓と古、まき絵の三人はつい先程まで水浴びをしていたせいか、肌に服が引っかかってなかなか着替えることができない。

そうして、彼女達がシャツとスカートを着るのにもたもたしていると、ゴーレムが追いついてきたようで、心なしか慌てた様子で彼女達を止めようと声を上げている。

だが、彼女達がそれで止まるわけがない。狭い木々の間を抜けてゴーレムを撒きつつ、出口はないかと周囲に視線を這わせる。

「あっ、見つけた！非常口です！」

ちょうど滝を迂回して裏側に回った夕映が、喜びの表情を見せな

がら叫ぶ。そこには鉄製のドアがあり、その上に『非常口』と書いてある。どうやら出口に間違いないようである。しかし――――

「『問一、英語問題（リード）ｒｅａｄの過去分詞の発音は？』です」

「ええ～！？何それ！？」

「そんなこといきなり言われても！」

ドアのちょうど目の高さ辺り。そこにプレートが嵌め込まれており、何故か英語の問題文が記されていたのである。明日菜が強引に開けようしたものの、ドアノブがないのでは開けることができない。その問題を解かなければ開けられない仕組みになっているというわけだ。

当然、勉強嫌いのバカレンジャーに分かるはずもない。すぐ後ろにゴーレムが迫っているというのに、非常口が開かなければ如何ともしがたい。このままでは捕まってメルキセデクの書を奪われてしまうと顔を青くしていると、その件の本を手に持っていた古が何かを閃いたかのように唸った。

「ムムッ……いや、私これ分かるアルよ！答えはｒｅｄ（レッド）アルね！」

古の一声にクイズ番組でよく聞くような電子音が流れるとともに、それまでうんともすんとも言わなかったドアが開いた。どうやら正解だったようだ。

「おおっ！？」

全員が歓喜の声を上げると、すぐさまドアの向こうに続く通路に

体を滑り込ませた。そこに、間一髪の差でゴーレムの腕が凪ぐ。あと少し遅ければ、誰か一人は捕まっていたであろう。

「も、もしかしてこの本のパワーで！？」

「持ってるだけで頭が良くなたアル！」

問題に答えた古も魔法の本の効果に驚いていた。急に頭が冴えたと思えば、まるでその答えが当然であるかのように理解できたのである。これがあれば学期末テストも容易になるだろう。バカレンジャーはそれの絶大な効果に喜んだ。

ゴーレムを振り切った彼女達が細い通路を抜けていくと、急に広い場所に出た。周囲を見渡すと円形の部屋のようで、グルリと壁が弧を描いている。ついと顔を上げれば天井がはるか上にあり、壁には剥き出しの階段が螺旋状に伸びていた。察するに、ここを上って外へ出なければならないようだ。あまりの高さに、走り出す前から全員が辟易するが、ここを上らなければ外に出られないのだと諦めて、狭い階段を並んで走り始めた。

「キャッ！？」

しかし、彼女達の逃亡劇はまだ終わってはいなかった。階段を上り始めて数分もしないうちに、いきなりゴーレムが壁を突き破って出てきたのである。まだ魔法の本を諦めていなかったようだ。

「待て～っ！本を返すのじゃ～！」

階段が狭いのか、肩で壁を削岩機のごとく削り取りながらバカレンジャー一行を追ってくる。そのおかげでゴーレムの進行速度は随

分と遅いものの、安心するにはまだ早い状況と言えた。

――ううっ……魔力さえ戻れば杖に乗ってすぐ外に出られるのに……――

もちろんゴーレムのしつこい追跡にバカレンジャー一行は歯噛みしていたが、その中で最も歯痒い思いをしていたのは他ならぬネギであろう。もし魔法を使えれば、階段を馬鹿正直に上らなくても杖に乗ってひとっ飛びすれば良い。それができないのは、魔法の存在を一般人に悟られてはならないからである。

それに加えて、誓約の魔法で魔法そのものを封じられていることも原因だ。生徒に危機が迫れば魔法の使用は辞さないが、そもそも使えないのであれば彼は頭の良い子供でしかない。足手纏いになるのは当然である。もし二日前に戻ることができれば、彼は間違いなく魔法を封じる自分を止めていたであろう。

彼がやきもきしながら走っていると、前を走っていた明日菜が止まるのを見て一緒に足を止める。覗き込むように見ると、階段を塞ぐように石の壁が立ちはだかっており、壁には見覚えのあるプレートが嵌り込んでいる。どうやら非常口と同じく、問題を解くことで先に進む作りになっているようだ。壁は階段からはみ出しているので、素通りすることはできないようである。

「『問二、数学問題。下の図でXの値を求めよ』です！」

今度は魔法の本を持った古も答えられないようで、全員で悩んでいる。まだ離れているとはいえ、じきにゴーレムが追いついて来るはず。悠長にしていると追いつかれてしまうだろう。

そこで何を思ったのか、楓が彼女の手にある本を引っ掴むと、暫時問題を見て考えた挙句――――

「うーん……X＝４６。かな」

――――見事に正解を導き出した。

電子音は聞こえてこなかったが、石と石が擦れるような音とともに壁が退き、先に進めるようになった。

これを見て、ネギは驚くしかなかった。失礼だが、バカレンジャーの中でバカブルーを称号に持つ彼女ですら、問題に答えることができたのだから。

その後も幾度に渡って壁が立ち塞がるが、バカレンジャー一行は魔法の本を使って次々と問題を解いていく。驚くべきことに、バカレンジャーは問十まで答えた時点で木乃香やネギの力を借りずに問題をクリアしたのである。

「す……凄いですバカレンジャーのみんな！」

ネギが喜びのあまり握り拳を作る。ゴーレムとの距離が離れてい

るので、このまま行けば追いつかれずに脱出できるかもしれないという思惑もあったのだろう。

「あうっ！？」

「夕映ちゃん！？」

しかし、物事がそう簡単に上手くいくはずもなかった。図書館島地下のどこかの層に近いのか、植えられていた木の根が壁を突き破り、階段に飛び出していたのである。不幸にもそこに足を引っ掛け、夕映は転んでしまっというわけだ。

「あ、足を挫きました……」

しかも追い打ちをかけるかのように、夕映は足を挫いたらしく立ち上がることができない。これではたとえ立ち上がれたとしても、走るのは億劫になるだろうし、確実に進行のペースは落ちてしまい、いずれゴーレムに追いつかれてしまうだろう。

「先に行ってください。ネギ先生、この本さえあれば最下位脱出できます……」

それを彼女も察したのだろう。魔法の本をネギに手渡し、自分を置いて先に行くように促す。

「だ、駄目ですよ夕映さん！僕がおぶっていきますから！」

ネギは夕映の言葉を真っ先に否定した。それもそうだろう。彼は３－Ａの担任であり、生徒を守る義務がある。また、彼にしてみれば、本人がそう言ったからといってはいそうですかと置いていくこ

と薄情ではなかった。

しかし、彼が夕映を背中に背負って状況が改善するかと言えば、そんなことはない。彼はまだ十歳で、魔法を使えない今は非力な少年でしかない。彼女を背負って階段を上ることはできるはずがないのだ。

案の定、一度彼女を背負ってみたは良いものの、ふらふらして二歩も歩くことができずに倒れ込んでしまう。

「拙者に任せるでござる」

それを見かねたのか、楓が夕映を運ぶ役を買って出る。彼女の背中と膝の裏に手を回し、軽々と持ち上げてしまった。いくら彼女が平均的な女子中学生より軽いとはいえ、いとも容易く持ち上げた楓にネギは感心する。

だが同時に、何か悔しさのような感情が心の中に芽生えたことに気付き、彼は戸惑っていた。

夕映の問題が解決し、一行は改めて歩を進める。以降何度も壁が立ちはだかるが、次々と問題を解いてゴーレムとの距離を離していく。トラブルはあったものの、このまま無事脱出も夢ではないだろう。

そして、三十問ほどクリアしただろうか。既に一時間ほどが経ち、全員に疲労の色が見え始めた頃、彼女達の前にエレベーターが姿を現した。

「みんな見てください！地上への直通エレベーターですよ！」

最初に見つけた夕映が喜びの声を上げると、バカレンジャー一行の顔にも喜色が浮かんだ。一時間もの間、彼女達はひたすら階段を上り続けていたのだ。もうじきその苦しみから解放されると思うと、喜びを抑え切れないのも当然と言えるだろう。

「皆急いで乗って乗ってー！」

全員が次々と乗り込み、喜びを抑え切れないバカレンジャー一行。しかして、その希望は――――

「――――重量オーバーデス」

「いやあああああああああ！」

――――エレベーターの無慈悲な宣告によって、絶望へとすり替わった。

希望から絶望に叩き落とされるというのは、まさにこのような状況を言うのだろう。バカレンジャー達にとって唯一の頼みの綱であった脱出の手段が使えない。必死の思いで逃げてきた苦労が、全くの徒労と知った時の脱力感は筆舌に尽くしがたい。

「みんな持ってる物とか服を捨てて！ほら、片足出すだけでブザーが止まるから、あとちょっとなのよ！」

最初に気付いた明日菜が足を出すと、ブザー音がぴたりと止まった。それを見て、あと少し積載量を軽くすればエレベーターも使えると分かると、全員が服を脱ぎ出した。服を捨ててその分の重量を減らし、この場を乗り切ろうとしたのだろう。

だが、そうは問屋が卸さなかった。ショーツを残して全て脱ぎ捨てたというのに、ブザー音は無情にも鳴り響いていたのである。

バカレンジャー一行は一つ勘違いしている。仮に全員が衣服を全て脱いだとしても、ブザー音は決して止まることはない。何故なら、そのエレベーターは盗掘防止のためにあるセンサーを仕込まれており、図書館内の重要書物を勝手に持ち出せないように対策を組まれているのだから。当然のことながらメルキセデクの書もその内の一つであり、学園長の許可なく持ち出すことはできない。故に、ここで全員がエレベーター外に出てその本だけ載せたとしても、センサーは厳格に動作を拒否しただろう。そこに気付くことができない以上、エレベーターが動き出すことはないのだ。

「フォフォフォ、追い詰めたぞよ。観念するのじゃー」

さらに追い打ちをかけるかのように、あれだけ引き離していたゴーレムがバカレンジャー達の視界に入るほど接近していた。このままでは、十数秒もかからぬうちに追いつかれてしまうだろう。

だがそこで、彼女達とゴーレムの間を遮るように、一人の人物が立ちはだかった。

「ネギ！？」

意を決して立ち上がったのは、いまだに魔法を封印されているはずのネギであった。彼は杖を構え、珍しく鋭い目つきでゴーレムを見据えている。彼は振り返りもしないまま、バカレンジャーに鋭い声で指示を出す。

「僕に構わないで！みなさんは先に行って明日の期末を受けてください！」

ネギの行動に、バカレンジャーは教師として自分達を守ろうとする彼の勇姿に感動しているようで、一部は頬を赤く染めながら、その他は感心した視線を彼に向けている。

――僕が生徒を守るんだ！たとえ魔法が使えなくても、先生なんだから――

確かに、バカレンジャーの考えていることも間違いではなかった。ネギは教師として自分の担当の生徒を守るために飛び出したのだし、そのために危険に身を曝す覚悟があった。

――それに……僕は無力なんかじゃない！絶対にアスナさん達の足手纏いにはなるもんか！――

だが、何よりもネギの心を占めていたのは、教師の義務よりも意地だった。

事実、図書館島に入ってからの彼は頼りなかったと言えるだろう。魔法も使えず、明日菜や楓に助けられたのも一度や二度ではない。夕映が足を挫いた時も楓が解決しただけで、彼は何もできなかった。彼女達に助けられる度に、自分が役立たずであると言われているかのような錯覚を覚えていたのかもしれない。

もちろん、それは彼の妄想でしかない。彼女達が地底図書室において大人しく勉強できたのは、彼の指導があってこそ。もし彼が先頭に立ってみんなを引っ張っていなければ、彼女達は早々にテストを諦めて遊び呆けていたかもしれない。それを考慮に入れれば、彼は十分役に立っているのである。

ただ、彼はそれを教師として当然のことであるとして勘定に入れてない。故に、『自分は役に立たない駄目な奴』などという見当違いな思考に陥っているのだ。

すると、ついにゴーレムが階段を上りきり、その巨体でネギを威圧した。

「石像（ゴーレム）め！僕が相手だ！」

「フォフォフォ、いい度胸じゃ」

ネギが精一杯の睨みつけるも、ゴーレムは笑った。傍から見ると良く分かるが、両者の体格差は歴然としている。ゴーレムがひとたび腕を横薙ぎに振るえば、彼は塵芥を吹き散らすがごとく蹴散らされるにだろう。彼が見得を切ったところで、それが子供の虚勢にしかならないとでも思ったに違いない。

ゴーレムの腕がゆっくりと持ち上がり、今まさに振り下ろされようとしている。彼はビクッ肩を震わせる反応を見せるが、それだけだ。魔法が使えない以上、彼には自衛の手段は存在しない。逃げようにも、足場が小さい空間では逃げ場などあるはずもなく、このまま腕が迫るのを黙って見ていることしかできなかった。

だが少なくとも、自分がエレベーターから降りることで重量制限については解決したはずである。そのまま彼女達が脱出できれば、彼は満足だった。

自分は決して無力ではないと証明できたのだから。

自身に迫るゴーレムの腕。幼いながらに感じる死の恐怖に逃げ出しそうになるも、足が震えて動かない。だが、彼は決してその光景から目を逸らさなかった。

しかし、ゴーレムの攻撃が彼を吹き飛ばすことはなかった。不思議なことに、彼は急に服の襟を掴まれたかと思うと、物凄い力で引き倒されたのである。そのおかげか、ゴーレムの腕は彼の頭の上を通過し、弾き飛ばされることはなかった。

しかし、ちょっと待ってほしい。自分が守ろうとした生徒達は、エレベーターに乗って脱出したはずである。既に背後には誰もいないはずなのに、誰が自分を助けたというのだろうか。彼はもしかし

てと、その目で確かめるために振り返った。

「ア……アスナさん！？」

後ろに振り返ったネギが見たのは、頬を赤くしながらも呆れた表情を彼に向けている明日菜であった。

――どうして……？エレベーターはもう動くはずなのに……――

そこで、ようやく周囲の状況に気を配れるようになったネギの耳に届いたのは、いまだに耳障りに鳴り続けているブザーだった。どうやらブザー音に気付かないほど目の前のことに集中していたらしい。

「あんたが先生になれるかどうかの期末試験でしょ？あんたがいないまま試験受けてもしょーがないでしょーが。ガキのくせにカッコつけて、もー。バカなんだから！」

明日菜は口では叱りつけているものの、表情はとてもそうには見えない。むしろ感謝しているといった具合である。それは彼女もまた、ネギの勇気に感心している一人だったからだ。

「え……でもこのままじゃ、あの石像（ゴーレム）に……」

一方で、ネギの表情は浮かない。このままエレベーターが動かないのであれば、脱出が叶わないではないか。

彼の考えを察したのだろう。明日菜は口角を広げて笑った。

「こーすんのよ！」

そう言って右腕を振りかぶる明日菜。その手の中に握られているものを見て、ネギは驚愕で目玉が飛び出しそうになった。

――そ、それは！？――

ネギが驚くのも無理はないだろう。バカレンジャー一行が図書館島に来た最大の目的、メルキセデクの書が握られていたのだから。

彼がエレベーターを降りても鳴り続けるブザー音に、木乃香と夕映がそのからくりに気が付いたらしい。そのことを明日菜に伝え、すぐに彼の首根っこを引っ張り込んだというわけだ。

彼が止めようとする間もなく、思い切り振り下ろした右手から魔法の本が離れ、ゴーレムに向かって飛んでいく。彼女がその剛腕で投げつけたせいか、それとも頁が開いて何らかの魔法が発動したおかげだろうか、魔法の本はゴーレムの頭部に直撃すると強烈な光を放つ。ゴーレムはそれに目が眩んで階段を踏み外し、悲鳴を上げながら奈落の底へと落ちていってしまった。

しかし、彼女達はそれを最後まで確かめることはできなかった。魔法の本を放り投げた瞬間、先程まではうんともすんとも動かなかったエレベーターが何事もなく動き出したからだ。目の前の自動ドアが小気味良い音を残して閉まり、鳴り止まなかったブザー音も止まる。

そこでようやく、バカレンジャー一行は脱出を確信しては安堵のため息を漏らす。そして数秒もしないうちに、和気藹々（わきあいあい）と明日の学期末テストについて喋り始めた。下手をすれば命の危険もあったというのに、さすがの切り替えの早さといったとこ

ろだろうか。

そんなエレベーターの中、やっと冷静に考え事のできるようになったネギは、いまだに明日菜に抱き締められながらも思いを巡らせていた。

――まさか魔法の本のせいで動かなかったんじゃ……――

自分が下りてもブザー音は鳴り止まなかった。だというのに、メルキセデクの書を外に置いていった途端に動き出すなどいくらなんでもおかしすぎる。もしかすると、魔法の本を持ちだされないための防犯処置だったのかもしれない。

――そうだよね。あんな貴重な本を無造作に置いているわけがないじゃないか――

何故そんな簡単なことにも気付かなかったのだろうと、ネギは自身の迂闊さと力不足に軽く自己嫌悪に陥った。

――もっと強くならないと……もっと強く……――

ネギは改めて心に誓いつつ、後ろにいる明日菜に自身の体を預けた。

こうして、図書館島では散々な目に遭ったものの、バカレンジャー一行は実に二日ぶりに図書館島を脱出することができたのである。

――――しかしその後、服の一切をエレベーターの外に置いてきた結果、どうやって女子寮まで帰るかで随分と苦労する羽目になるのだが、それはまた別の話である。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１１　図書館島を脱出せよ（後書き）

ようやく第十三話を書き終わりました……本当に図書館島は苦労しました。こんな苦労するなら最初から飛ばしておけばよかったかもしれません。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１２　桜通りの吸血鬼（前書き）

今回の話を読むにあたって、『Ｍｉｓｓｉｏｎ　７　学園広域指導教員』の最後の分を訂正しましたので、それを読んでいただくと良いと思います。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１２　桜通りの吸血鬼

１２／

桜通り。昼間はうら若き少女達が学校に通うために利用する比較的人通りの多い場所である。しかし深夜の桜通りは、昼間とは全く違う顔を見せる。人通りが少なくなり、閑散とした様相を見せるのである。

それにはちゃんとした理由がある。半年ほど前から生徒達の間で囁かれるようになった『桜通りの吸血鬼』。満月の夜になると、真っ黒なボロ布に包まれた血まみれの吸血鬼が現れる、という出自がよく分からない噂話である。時折桜通りで倒れている学生が発見されることがあり、それが満月の日だったとか、その倒れていた人の首筋には噛まれたような傷跡があったとかで、それらが人から人へ伝わっていく内に脚色され、そんな荒唐無稽な噂話になっていったのだろう、というのがその噂を耳にした一般人の意見だった。

だが、それはただの噂話ではない。桜通りの吸血鬼は、この麻帆良学園に確かに存在したのだ。

◇

「あ……」

麻帆良学園都市でも名門と謳われる聖ウルスラ女子高等学校の少女が、短く声を漏らして桜通りに倒れ伏した。噂の吸血鬼に襲われたのだろう。彼女の首筋には、牙のようなもので噛まれた傷跡があった。

穏やかに眠る彼女の前で、幽鬼のように立ち尽くす小柄な黒い影。それが桜通りの吸血鬼であるに違いなかった。

影は右手を自分の目の前に掲げると、ゆっくりと確かめるように握っては開くことを何度か繰り返した。おそらく魔法使いが見れば、その所作が自身に流れる魔力の多寡を確認するための動作であると看破したであろう。

「――――ふむ。大分力が戻ってきた。これで……」

――奴に対抗できる――

そう呟いた声は、まだ幼さが残る少女のそれであった。

影は暫く思案気に右手を見つめた後、通りの一角を見つめて涼やかな声を発した。

「茶々丸」

「はい、マスター」

呼びかけに応えると同時に、木陰から無機質な表情を湛えた少女、

茶々丸が現れる。彼女がマスターと呼ぶ人物は、たった一人しかいない。ということは――――

その時、雲に隠れて見えなかった満月が雲間から顔を見せ、影の横顔を仄かに照らしだした。

その影――――エヴァは彼女に命令を下す。

「そいつを適当な場所に移しておけ」

「はい、マスター」

無感情のまま頭を下げて承諾する茶々丸は、意識を失って倒れているウルスラの少女に近づく。どうやら安全な場所に彼女を移すらしい。

命令を下せば後は彼女に任せておけばいい。そう判断したエヴァがその場から退散しようと踵を返す。否、返そうとした。

「ハッ、随分とカワイらしい吸血鬼じゃないか」

突如として上から聞こえた声に、エヴァは素早い動きで身を翻す。

その視線の先に――――

――桜並木の一本に脚を組んで座り、悠然と見下ろすダンテの姿があった。

「貴様、何故ここに……」

――馬鹿な。何時の間に――

エヴァは突然の闖入者（ちんにゅうしゃ）に驚愕しながら、ダンテに対して警戒心を露わにした。彼女は吸血行為を誰にも邪魔されたくないために、わざわざ茶々丸に見張らせていたのだ。にもかかわらず、ダンテは容易く彼女の背後を取ったのである。これを警戒せずに何とするというのか。

身構える彼女の心境を知ってか知らずか、彼は肩を竦めて尋ねた。

「お嬢ちゃんが桜通りの吸血鬼だったとはね。まさかとは思うが、爺さんは知ってるんだろうな？」

「ふん、知るわけがあるまい。そもそも、何故じじぃに許可を取る必要がある？」

エヴァはダンテの問いかけに対して尊大に答えると、冷徹な視線を彼に向けた。

しかし実際のところ、この時期に吸血行為を知られてしまったのは大きな痛手だった。特に、２－Ａの副担任である彼に知られてしまうのは。

彼女は先日の顔合わせの直後から、ダンテについての情報を密かに集めていた。過去の経歴は一切不明。五年ほど前から便利屋として『デビルメイクライ』を構え、裏世界では有名な変人らしい。どれほど変人かと言うと、気に入らない依頼にはどんなに金を積まれても受けないにも関わらず、悪魔払いという世間的には胡散臭いことこの上ない依頼にはタダ同然の値段でも受けるという、何とも変わった男である。

だが、彼の仕事ぶりを見た人は決まってこう評する。

――――奴に睨まれれば、悪魔も泣きだすだろう、と――――

そんな男に吸血行為を見られたとなれば、学園長に事の次第を報告されるか、最悪の場合この場で悪として消されるか。どちらにし

ろ、エヴァにとって好ましくないことが起きるだろうことは明白であった。

彼女が警戒心を強める中、ダンテは木から飛び降りると二人がいる方向へ歩み寄ってきた。何時の間にか、茶々丸がエヴァを守るように体を割り込ませている。

お互いの距離が段々と縮まっていき、彼は二人のあと一歩のところまで近づく。もし彼が背中の大剣に手をかければ、二人はすぐさま迎撃に出る手筈だった。

だが、彼は――――

「駄目だぞお嬢ちゃん。爺さんに許可ぐらい取らないとな」

――――目の高さをエヴァに合わせると、冗談ともとれる言葉と共に彼女の頭に手を置き、ぽんぽんとはたいただけであった――――

「――――は？」

これにはエヴァも思考が停止する。まさかこの状況で聞くとは思わなかった言葉に、彼女は呆気にとられてしまっていた。

「な、なななな……！」

「ん？どうした？」

まるでいつぞやの時のように吃(ども)るエヴァに対し、ダンテは挑発的な視線を向ける。そのあっけらかんとした様子を見て、ついに彼女の怒りが爆発した。

「何するか貴様ー！！」

ウガーという擬音がつきそうな様子で怒鳴り声を上げる。明らかに子供扱いされた対応に、エヴァのプライドがいたく傷つけられたようだ。

「何だよ、お嬢ちゃん。怒ってんのか？」

「当たり前だ！何度言ったら分かる！私はお前より年上だと言っとるだろーが！」

「悪い悪い。見た目がお子さまだからつい、な」

「やっぱり殺す！貴様を殺してやるー！」

エヴァがそう言って殴りかかるが、ダンテはひらりと躱し、加えて挑発する。それに彼女が激怒して殴りかかる、という繰り返しが

何度か続けられる。

夜中にも関わらずギャーギャーと騒ぐ二人。その様子を間近で見ていた茶々丸は、いつもの無表情のまま言葉を漏らした。

「ああ……マスターがこんなに楽しそうに……」

「これをどう見たら楽しく見える！このボケロボ！」

茶々丸の頓珍漢（とんちんかん）な発言に、エヴァがわざわざ振り返ってまで突っ込む。どこをどう解釈して見たら、このやり取りが楽しく見えるというのか、とでも言いたげな顔である。

大声で息つく暇もなく怒鳴り散らしたり動き回ったりしたせいか、彼女は小さな肩を激しく上下させながらダンテを睨む。その視線を気にすることもなく、彼は挑発的な表情から一変真剣な眼つきで彼女を見下ろした。

「で、何でお嬢ちゃんはこんなことをしてたんだ？」

「っ……」

心のガードが緩んだところに核心を突かれ、エヴァは思わず口籠もった。子供扱いされたことで生じた怒りによって冷静さを欠き、ダンテの質問に動揺してしまったようだ。闇の福音ともあろう者がたかだか二十余年生きた小僧ごときに振り回されるとは、彼女自身思ってもみなかっただろう。

自分の迂闊さを悔いながら彼女が睨みつけていると、彼はやれやれといった様子で首を振った。

「ま、言いたくないならいいんだけどな」

「は？」

ポカーンと口を開けたまま固まるエヴァを尻目に、ダンテは襲われ倒れた少女に近寄っていった。

少女の傍にしゃがんだ彼は、その子の口に手の平を当てて呼吸を調べたり、顎を摘まんで左右に傾けて噛み痕を調べたりと色々調べている。それを見ていたエヴァは、ようやく重い口を開いた。

「……何故」

「あん？」

エヴァの呟きが聞こえたのか、ダンテは肩越しに彼女を見つめた。

「何故私を殺さない？私は吸血鬼だぞ」

エヴァが正直に感じた疑問を口にする。六百年もの間、様々な人間から命を狙われてきた彼女にしてみれば、ダンテの言葉を素直に信用するほどオメデタイ頭はしていなかった。

「殺す、ねえ……」

ダンテは相変わらずのふてぶてしい笑みを湛えながら、その身を翻した。

「じゃあ聞くが、このお嬢さんは吸血鬼になってるのか？吸血鬼

に血を吸われると、そいつも吸血鬼になるってのはよく聞く話だが」

「……いや、ならないな。今の私では人一人を吸血鬼化させるほどの力はない」

封印が解ければその限りではないがな、とエヴァは続ける。事実、今の彼女には人を操るほどの力はなかった。

真祖の吸血鬼はフィクションで語られるようなそれと違い、吸血によって仲間を増やすということはできない。だがその代わり、血を吸った相手を下僕にすることができるという。自身が持つ特殊な魔力を吸った相手に注入した後、遠くからそこに魔力を送り込むことにより、吸った相手を遠隔操作で操ることができるのである。つまり、体内に注入した魔力は携帯のアンテナ、遠くから送った魔力は電波と言える。血を吸われた相手は半吸血鬼化し、吸血鬼顔負けの身体能力を得ることができるが、完全に吸血鬼と化すことはなく、日の光で消滅することもない――――多少は苦手意識を覚えるだろうが。しかも、魔力の供給を絶てば人間と何ら変わりがないので、仮に下僕になった人間を探す場合、普通の吸血鬼より特定が難しいのである。

さすがにそのことまでは知らないだろうが、彼女の言うことを信用したのか、ダンテは軽く息を吐いて笑った。

「じゃあ良いじゃないか。死人を出したわけじゃないし、お嬢さんが吸血鬼になることもない。なら、いちいち騒ぎ立てることじゃない。そうだろ？」

そう言って肩を竦めたダンテの言葉に嘘の色はなかった。襲われた少女が死んでいたら話は違ったかもしれないが、死んでいないか

ら許したのかもしれない。少しは話の分かる男のようだ、とエヴァは認識を改めた。

しかし、同時に彼を愚かしい男だと彼女は断じていた。他人の、しかも吸血鬼の言うことをほいほい信じるとは、どうかしているとしか思えない。特に裏の関係者ならば、入念な調査を材料として判断を行うべきで、彼のような考え方は論外である。

そんな彼に対する苛立ちで、彼女は思わず口走ってしまった。

「……馬鹿か貴様。私が嘘を吐いてる可能性を考えなかったのか？そうやって貴様を油断させて背後から攻撃するかもしれんのだぞ」

一見するとダンテを扱き下ろす発言。だが、彼は気づいているだろうか？解釈のしようによっては、エヴァの言葉は彼に忠告しているかのようであるということを。

――ちっ……――

それを自分でも気が付いたのだろう。とんだ失言だと内心で吐き捨てながら、エヴァは半ば八つ当たり気味にダンテを睨んだ。

幸いなことに、彼女の苛立ちや発言のことには気付かなかったようで、彼は薄ら笑いを浮かべると大仰に両腕を広げる。

「一応俺はお嬢ちゃんの先生だぜ？先生は生徒を信じるもんだろ？」

しかし、ダンテの答えはエヴァを落胆させるものだった。

教師は生徒を信頼するべき。確かに一理あるかもしれない。生徒を信頼しない教師などに誰もついて行きたいとは思えないからだ。

だが、間違ってもいる。教師だからといって生徒を信頼する義務が生じるわけでは決してない。義務だから。そういうものだから。そんなことで生徒を信頼するふりをする教師など、元から信頼する気のない教師より劣ると彼女は考える。

――こいつもそこらにいる奴らと同じだな――

かつてエヴァに近付いてきた人間にもいた。初対面にも関わらず軽々しく信じると言った人間が。だが、そのほとんどが何かしらの打算のある人間だった。彼女の絶大な力を利用するつもりだったか、それとも――――何にせよ、碌な人間ではなかったことは確かである。

ダンテも所詮、その有象無象の一人だったか、と彼女は懐の魔法壜に手を伸ばした。同時に、念話で茶々丸に指示を出す。

“茶々丸”

“はい、マスター”

“私がダンテに攻撃したら、お前も攻撃を仕掛けろ。遠慮するな。殺すつもりでやれ”

“！？ですがマスター……”

“心配いらん。奴の頑丈さならお前の一撃でも死なんだろうさ”

エヴァの突然の命令に躊躇（ちゅうちょ）する茶々丸だが、彼女の言うことには逆らえないのですぐに従った。その無機質な目で、ダンテを見据える。

そして、いざ魔法を食らわせてやろうと彼女が始動キーを呟いたところで、再び彼が口を開いた。

「それに」

ピタリとエヴァの詠唱と手が止まる。茶々丸もいざ飛び込もうと重心を前に出したところだったので、若干前屈（まえかが）みの不自然な格好になってしまう。

まさか気付かれたのかとエヴァが警戒する中、ダンテは言い放った。

「お嬢ちゃんほどからかい甲斐のある奴もいないしな」

本当に人間らしいぜ、とダンテは面白おかしそうに笑った。

――人間……らしい？――

その言葉は、エヴァにとって衝撃的だった。衝撃的すぎて、子供扱いされたことに気が付かないほどに。

今まで彼女を真祖の吸血鬼として見た人間はいても、人間として見た者はほとんどいなかった。何せ彼女自身でさえ、自分が人間だと微塵も思っていなかったのである。だというのに、ダンテは彼女を一人の人間として見ている。

――まさか、あの男のようなことをほざく奴がいるとは――

ダンテにとって、人間も真祖も同じだと言うのだろうかと、彼女は信じられない面持ちで彼を見つめていた。

彼は続けざま言う。

「……まあ、何で半年前からこんな真似を始めたのかは聞きたいところではあるけどな」

ダンテはそこまで言うと、溜息交じりにエヴァを見つめた。その視線は真っ直ぐ彼女を見つめており、まるで彼女の心底を覗き見ているかのような凄みがある。

――この男、面白い――

「……いいだろう。教えてやる」

急に素直に話すと言うエヴァを見て、ダンテは怪訝な顔をした。彼女の性格上、事情があっても話さないだろうと思っていたからだ。

彼の訝しげな顔を視界に収めながら、彼女は話を続けた。

「ただしここでは話せない。そうだな……次の日曜日に私の自宅に来い。その時に教えてやろう」

しかし、エヴァもこの場で話す気はなかったらしい。後日改めて話をすることで落ち着いた。

詳しい場所や時間は追って知らせるとだけ伝えると、彼女は軽やかに飛び上がって夜の闇に消えていった。茶々丸は最後に振り返ると、頭を下げてからバーニアを吹かして夜空へ消える。

残されたダンテは先程とは打って変わって硬い表情を湛え、空の向こうに飛んでいく二人の姿を見つめながら、噂は本当であったと再認識することになった。

――和美の言った通りだったな――

ダンテが二人を見つけたのは偶然ではない。先々月に和美が教えてくれた桜通りの吸血鬼の噂を元に、彼は満月近くに桜通りを見回っていたのである。運の悪いことに先月は空振りだったのだが、今日になってようやく見つけることができたというわけだ。

――しっかし……どういうわけだ？――

ダンテは腕を組んで考え込む。こうして桜通りの吸血鬼は存在していたわけだが、まさか学園長がその噂を知らないとでも言うのだろうか。

だが、彼はすぐに否定した。和美から聞いていたとは言え、麻帆良では新参者の彼すら知っていた噂を、学園長が知らないはずがない。

もしかすると、最低限の食事として彼女の吸血行為を黙認しているとでもいうのだろうか。それならばまだ納得できるが、「だいぶ力を取り戻せた」と言っていたエヴァの口振りや、半年ほど前からその噂が流行りだしたことから察するに、普段は吸血行為を認められていなかったのは明白である。

ならば何故、半年前から吸血行為を始めたのかを考えてみるが、じきに彼は思考を止めた。ここで考えなくても、週末には全てが分かるのだ。ここで考えても仕方がない。

そう結論づけて踵を返すが、そこでようやく彼は倒れている女生徒のことを思い出し、彼女をどうするべきかと頭を抱えるのであった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１２　桜通りの吸血鬼（後書き）

『Ｍｉｓｓｉｏｎ　１２　桜通りの吸血鬼』を投稿しました。

今回の話は難産でした。ダンテがエヴァの吸血行為を見たらどんな反応するか分かりませんでしたので……多分人死にがなければ大丈夫だろうと思ったのでこんな展開になりました。私自身としてもあまり納得がいっていないのですが、今はこれ以上の展開を考えつかないので、とりあえずはこれで勘弁してください。もっと自然な展開を考えついたら書き直すかもしれません。

それでは。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１３　成績発表

１２／

ここは麻帆良学園食堂棟。棟全体が食事処になっているという豪壮な施設である。昼時には昼食を求める生徒達によってごった返しているのだが、今日は心なしか生徒が少ないように見える。

そんなことを気にもしないダンテは、ちょうどピザとトマトジュースを乗せたトレイをテーブルに置いたところだった。自身も座って早速ピザを口にすると、とりとめのない視線を周囲に向けた。

――騒がしいな――

それがダンテの率直な感想だった。周囲の生徒達はどこかそわそわした様子で食事をしている。耳を澄ますと、「今回はどのクラスが一番に……」や「前回はＳ組が……」と何やら話しているようである。

ただ、生徒の話題に然(さ)したる興味はなかったので、彼は構わずに食事を続けた。

「あっ、ダンテ先生！」

後ろから聞き覚えのある声で名前を呼ばれ、ダンテはのろのろと首を回して振り返った。

そこにトレイを持って立っていたのは、ダンテが担当する２－Ａの一人である椎名桜子だった。後ろには柿崎美砂と釘宮円もいる。三人は同じ『まほらチアリーディング』に所属しており、一緒にいることが多いので今回もその類なのだろうと、彼は判断した。

「桜子か。どうした？」

ダンテが食べかけのピザを手に持ちながら尋ねると、桜子は心底不思議そうな顔で何気なく彼の隣に座った。

「どうしたって……今日はクラスの成績発表だよ？」

桜子から話を聞くと、今日は報道部による期末テストの順位発表があり、間もなくその時間だというのである。ロビーに用意された大型スクリーンで大々的に成績が順に発表されるので、そこに集まる者も多い。そのせいで食堂に生徒達が少なく、逆にいたとしてもそわそわしていたというわけだ。

「あー……ネギのクビがかかってるんだったな」

そう言えば、とダンテが頭を掻いた。今回の期末テストで２－Ａが最下位から脱出できなければ、ネギは教師をクビになるということをすっかり忘れていた。彼には直接の関係がないのと、先日のエヴァとのやり取りで頭が一杯だったらしい。

彼の何とも気のない反応に、桜子は呆れた様子で言った。

「そうだよー。先生もネギ君に辞めてほしくないでしょ？」

桜子の言葉にダンテは考える。仮にネギが教師をクビになった場合、タカミチが出張でいなくなると自動的に２－Ａの担任をダンテがしなくてはならなくなる。彼に教師、しかも担任が務まるはずがないのだから、是非ともネギには最終課題をクリアして正式な教師になってもらわなければならない。

――面倒事は御免だしな――

一瞬のうちにそう考えたダンテはいつもの皮肉な笑みを浮かべると、肩を竦めつつ桜子の言葉に同意した。

「――――まあ確かにな。坊やがいないと大変だ」

でしょ、桜子は人の良い笑顔をダンテに向けた。こういう快活なところが非常に親しみ深く、彼女を２－Ａのムードメーカー足らしめている要因であろう。

ダンテも彼女の元気な姿を見て、少しだけ心の霧が晴れたようである。麻帆良に来て以来、刹那との確執やエヴァの問題、その他過去の出来事を思い出してしまい、本人が思っていた以上に精神的に堪えていたらしい。その陰鬱な気分を少しだけ晴らしてくれた彼女に感謝すると同時に、そわそわしている学生以外にも楽しそうな様子の者もいることに気が付く。

「で、このお祭り騒ぎはその成績発表のせいなのか？」

「うん。でもそれだけじゃなくて、食券も懸かってるんだけどね」

――？食券？――

ダンテの顔に疑問の色が浮かんだ。それもそうだろう。成績発表と食券、この何の関連もない二つの要素がお互いにどう結びつくというのか。麻帆良では新参者の彼に分かるはずがない。

しかし、麻帆良学園の生徒にとっては周知の事実らしく、今まで二人のやり取りを見守っていた美砂が横から口を出した。

「知らないんですか？どのクラスが一位になるかをみんなで予想するんです。食券を賭けて。連勝複式で当たると昼食代が浮きますから、みんなやってますよ」

美砂の言によると、成績発表の一位と二位を生徒達がそれぞれ予想し、お金の代わりに食券を賭けて勝負するという。ずばり当てた生徒にはそれ相応の配当金として食券が返ってくる仕組みである。ほとんどの生徒が参加しているらしく、成績が発表された時はとてつもない枚数の食券が飛び交うんだとか。

一般的に考えて、たとえお金でなくとも学校で賭け事（ギャンブル）をするのは許されるものではないのだが、麻帆良の気質でその辺りは寛容なため、教師達も一応注意はするものの事実上黙認しているらしい。

――なるほどね――

ここではそんなものなのかと一人納得すると、ダンテは桜子に尋ねた。

「なら桜子はどのクラスに賭けたんだ？」

「ん？私は２－Ａに食券五十枚賭けたよー」

桜子がさらっと告げた言葉に、ダンテは唖然とした表情でピザを取り落とした。美砂と円も彼の反応に苦笑しつつも、確かにその反応も無理はないと頷く。

周知の事実だが、２－Ａは一年の頃からぶっちぎりで最下位をキープし続けている、ある意味凄いクラスである。それが最下位脱出ならまだしも、数多のクラスを飛び越えて一気に一位になれるわけがない。

「いくらなんでも大穴狙いすぎだよ」

円が呆れた様子で桜子に言った。

それにはダンテも同意せざるを得なかった。賭け事には時に大穴を狙う大胆さも必要だが、２－Ａの一点買いは無謀すぎる。賭け事に関しては無類の不運を誇る彼でも、そんな望み薄な賭けに挑んだことはなかった。

「まあ、確かに２－Ａが一位はないだろうな」

故にダンテの口から正直な感想が漏れた。桜子の賭けた五十枚の食券は露と消えるだろうと考えての言葉である。

「ぶ～、じゃあダンテ先生はどのクラスが一位だと思う？」

桜子がふくれっ面をしながらダンテに問う。彼女なりに勝算があっての賭けだったのらしい。

さて、彼女に問われたダンテだが、彼には答えようがなかった。ネギが他のクラスの授業を担当する時は参加しないし、以前のテストにおける結果など知るはずがないのだから。

「さあな。他のクラスのことなんて知らないんでね。適当に賭けるとするさ」

「いや、先生が参加しちゃだめでしょ……」

冷静に美砂が突っ込む。話を聞く限りだと、いくら寛容とはいえ、さすがに教師の中で賭けに参加している人はいないとのことだ。以前に隠れて賭けに参加していた教師もいたらしいが、新田先生に見つかって大変なお叱りを受けたと言う話を聞き、ダンテは参加するのを諦めた。正直、毎度毎度恒例行事のごとく新田先生に叱られている彼にしてみれば、わざわざ叱られる理由を作る気はなかった。

「先生、私が一緒に賭けといてあげよっか？」

既にピザの半分を食べ終えたダンテに顔を近づけ、桜子はわくわくしながら言った。

「止めとくさ。博打を打つのは嫌いじゃないが、２－Ａはさすがに大穴すぎる」

それが正直な感想であった。ダンテは勝ち負けはともかくとして博打は嫌いではないが、２－Ａに食券を賭ける気にはなれない。それどころか、２－Ａに食券を五十枚も賭けた桜子を内心愚かしい行いだとすら思っていた。

彼の内心が透けて見えたのだろう。彼女は不満たらたらと言った

様子で反論した。

「えー、そんなことないよー」

するとちょうど、食堂に設置されたテレビの画面が変わり、報道部員がマイクを持って期末テストの成績順位発表を始めた。

最初は一年生から始めるらしく、順番に成績が発表されていく。特に一位と二位が発表された際には食堂内でも一際（ひときわ）大きな歓声が上がった。おそらくは賭けに勝った生徒は歓喜の声を上げ、賭けに負けた生徒は自身の食券が露と消えたことを嘆いているのだろう。

それ以降も、順に成績が発表される度に生徒達の間からどよめきが起こり、それに並行して二年生の成績発表までの時間が着々と近付いていく。ダンテを除く三人も次第にそわそわしていくので、賭けに参加しているものの、真（しん）にネギを心配していることが窺えた。

そして、遂にその時はやってきた。

「“――――では、二学年のクラス成績を良い順に発表しましょう！”」

さすがに気になるのか、三人は箸を止めてテレビに注目している。ダンテも同じくテレビを眺めているが、ピザを食べる手は止まらない。２－Ａが呼ばれるのはまだ先だと思ったからだ。

彼の目算通り、最初に報道部員から告げられた一位のクラスは２－Ｆであり、２－Ａではなかった。ということは、桜子の賭けは失敗に終わったことになる。

それが不満だったのだろう。彼女は食べ物を口に運びながら残念そうに呟いた。

「やっぱり２－Ａ（ウチ）が一位はなかったかー。食券五十枚も賭けたのにー」

だから無理だって、と円が苦笑しつつ突っ込む。確かに、彼女の突っ込みは当然と言えるだろう。逆に、どうして２－Ａが一位になる自信があったのか桜子に聞きたいほどである。

ダンテがそんなことを考えながら食後のトマトジュースをちびちび飲んでいる中、報道部員が順位を読み上げていく。しかし、何時まで経っても２－Ａの名前が読み上げられない。最初はこんなものだろうと余裕の表情でテレビを見ていた彼も、十位が呼ばれた辺りから険しい表情に変化していく。

いくらなんでも、もうそろそろ２－Ａの名前が呼ばれてもいいはずなのだが、無情にも二十二位まで２－Ａが呼ばれることはなかった。二年生は全部で二十四クラスあるので、後は二クラスを残すのみ。ということは、次の二十三位に呼ばれなければ、２－Ａの最下位が確定するというわけである。

当然、チアリーディングの三人は祈るような目でテレビを見つめている。自分の担任が正式に教師になるか、それともクビになるか、彼女達は気が気ではなかったからだ。

そして――――

「“えーと……これは……”」

最下位から二番目のブービー賞に選ばれたのは――――

「“２－Ｋですね。平均点は６９．５点”」

――――２－Ａではなかった――――

発表と同時に、チアリーディングの三人が呆然とした表情でテレビを見つめていた。まるで、今見ているものが信じられないかのように。

それは仕方のないことだと言えるだろう。ブービー賞とは、日本においては最下位から二番目に与えられる賞のことで、ブービー賞に選ばれなかったということは２－Ａの最下位が確定したということ。つまり、これでネギのクビが確定したのである。傍目から見ても一所懸命に頑張っていた彼が、麻帆良を去らなければならなくなる。自分達の力不足で彼がクビになるという事実に、友達のように仲の良かった彼女達は落ち込んだ。

一方で、最初は最下位（ブービー）に選ばれなかったことに安堵していたダンテは、三人の様子がおかしいことに気付いた。そして、その直後に２－Ａが最下位として呼ばれたことで、アメリカとは違い、日本ではブービー賞が最下位から二番目に与えられる賞だと知ったのである。

二年生の成績発表が終わり、次に三年生の成績発表に移る。すると、桜子の隣でトマトジュースを飲んでいた彼は悠然と立ち上がり、トレイもそのままに食堂の入口に向かって歩き出した。

彼の突飛な行動に目を瞬（しばたた）かせたものの、正気に戻った桜子は彼を呼び止めた。

「どうしたの先生！？」

「ちょっとな」

桜子の問いに生返事をしつつ、ダンテは食堂を出た。目指す場所は他でもなく、学園長室だ。

――一体どういうわけだ？――

ダンテの疑問は尤もである。あれだけ裏で学園長が協力していたにも関わらず、結局ネギは最終課題をクリアすることはできなかったのである。ダンテはてっきり、最後の手段として学園長がバカレンジャーの成績を書き換えてでも合格にするのだと思っていたのだが、当てが外れたようだ。

とにかく今は学園長をとっちめることが先決と、彼は学園長室に向かうのだった。

◇

ダンテが学園長室に向かってから一時間ほど経った頃、ネギは麻帆良学園中央駅前にいた。彼はリュックサックと杖を背負った出で立ちで、初めて麻帆良の地を踏んだ時と同じ装いである。

一時間ほど前、彼はロビーに設置された大型スクリーンの前で図書館島のメンバーと結果を見守っていた。図書館島で三日間一緒だっただけに、期末テストに対する意気込みは総じて意識が高かった２－Ａの中でも並み外れていたはずである。

しかし、彼らの努力も空しく２－Ａの最下位が決定してしまった。

２－Ａの最下位は彼のクビ、即ち立派な魔法使いになるための修業に失敗したことを意味する。それが分かった時には、彼は無意識のうちに学園を飛び出して女子寮に走っていた。

そして、自室に戻った彼は手荷物をリュックサックに詰めると、一息吐く間もなく駅に向かったというわけだ。

――クラスのみなさんに悪いことをしたかな――

ネギの胸中を占めていたのは、２－Ａの生徒達に何も言わずに出てきてしまったことに対する申し訳ない気持ちであった。今さらながら、同室の明日菜と木乃香には一言あっても良かったかもしれない。だが、今彼女達に会えば別れが辛くなってしまう。彼はそう考えて、黙って去ることにしたのである。

実際のところ、彼女達よりまず学園長に一言挨拶をしてから行くのが筋なのだが、まだまだ十歳に満たない子供か、社会人の基本である報告・連絡・相談が理解できていないらしい。普段は子供とは思えないほどしっかりしているが、こういうところを見ると子供らしいと言えるだろう。

改札口に立った彼は赤くなった目元を拭うと、新宿行きの切符を買った。そして改札口を通ろうと歩き出したところで――――

「ネギ！！」

――――急に背後から大きな声をかけられ、ネギは驚いて振り返った。

そこに立っていたのは、つい一時間ほど前に一緒にいた明日菜であった。彼がいないことに気が付き、慌てて追ってきたのだろう。方々（ほうぼう）を探し回ったのだろう。体力には自信のある彼女が若干息を乱しながら、困惑した様子で近付いてきた。

「ゴ、ゴメン！本当にゴメン！！私達のせいで最終課題落ちちゃって……魔法の本を捨てたのも私だし……！」

明日菜なりに責任を感じてのことだろう。心底済まなそうな顔をしている。

確かに、原因の一端は彼女にもあるかもしれない。２－Ａの平均点を大きく落としたのは、ほぼ間違いなく自分を含めたバカレンジャーだろうから。

しかも、彼女はネギの夢を知っていた。立派な魔法使いになるため、慣れない仕事に悪戦苦闘しながら努力していたことも。

そんなネギを間近で見ていたからこそ、満足に協力できなかった彼女は責任を感じていたのである。

――アスナさん……――

次の言葉が継げない様子の明日菜を見て、ネギは胸のすく思いがした。これほど彼女が済まなそうな表情をするのを、ネギは今まで見たことがなかったからだ。

しかし、彼女が責任を感じる必要はどこにもない。仮に彼女が足を引っ張ったのが事実だとしても、課題をクリアできなかったのは最終的に彼の指導力不足にある。あくまで課題を受けたのは彼自身なのだから。

それを理解しているからこそ、彼は首を横に振った。

「いえ、そんなことないです。誰のせいでもないですよ。魔法の

本なんかで受かっても駄目ですし……結局僕が教師として未熟だったんです」

そう言って俯くネギの表情に元気はない。それも当然だ。立派な魔法使いになる夢を諦めなければならない彼の悔しさは如何ほどのものか。きっと計り知れないものだろう。その気持ちを考えると、明日菜の罪悪感が薄れるわけがなかった。

では明日菜が声をかけるべきなのだろうが、彼にかける言葉が見つからない。自分が何を言っても慰めにもならないだろう。

かける言葉が見つからずに四の五のしていると、何も言わない明日菜を差し置いて彼が話を続けた。

「クラスのみなさん、特にバカレンジャーのみんなには感謝してます。短い間だけど、すごく楽しかったし……」

「ちょ、ちょっと……そんな簡単に」

――諦めちゃうの!?――

そう続けようと口を開いた明日菜の視界に映ったのは――――

――――今にも泣き出しそうな、ネギの表情だった。

それを見て、彼女は呆気に取られて二の句が継げられなくなってしまった。

泣き出しそうと言っても、実際に目元に涙を浮かべていたわけではない。心が泣いていると言えばいいのだろうか。家族のいない彼女には馴染みのないことだが、まるで家族が表情だけで互いの心情を察するかのように、自然と理解できてしまった。

既に感情が抑え切れなくなっていたのだろう。ネギは彼女からさっと視線を外すと、踵（きびす）を返して駆け出した。

「……さよなら！」

「――――！行っちゃダメって言ってるでしょ！！」

ネギをこのまま行かせてはならない。咄嗟にそう感じた明日菜は、すぐさま駆け寄って彼を後ろから羽交い絞めにした。

「なに諦めてんのよ！マギ……何とかになってサウザン何とかを探すんでしょ！？こんなことで諦めるなんて……絶対ダメ！」

「アスナさん……」

有無を言わせぬほど力の込められた明日菜の腕。それががっちりとネギの身体を拘束して離さない。決して先には行かせないという意志が込められた腕に抱かれて、彼は動くことができなかった

「ネギ君―！」

「ネギ坊主―！」

ちょうどその時、明日菜と同じくネギを追ってきたバカレンジャーや図書館探検部のメンバーが二人に押し寄せた。こうなると騒がしくなるもので、全員に囲まれた彼は次々に声をかけられた。それは黙って行こうとした彼を非難する言葉であったり、学園長にもう一度チャンスを貰おうと提案する声であったり様々だったが、どれもが彼を心配した様子であった。

彼は全員が明日菜と同じ気持ちなのを嬉しく思ったが、既に結果が出た以上は麻帆良を去るしかない。全員の勢いに気圧されつつも、彼は躊躇いがちに告げた。

「い、いえ。最終課題は僕も納得の上でのことですから。学園長に迷惑をかけるわけには……」

「フォフォフォ、呼んだかのう？」

急に後ろからかけられた聞き覚えのある声に、ネギだけでなく、明日菜達も振り向いた。

「学園長先生！？……とダンテ先生まで！」

そこに立っていたのは、ネギに課題を出した当の本人の学園長と、今回の課題には何も関わっていないはずの副担任ダンテであった。

――何でダンテ先生が？――

ネギはこの奇妙な組み合わせに困惑した。課題を出した学園長はともかくとして、ダンテは課題には関知していなかったはずである。

まさかこの場で担任の引き継ぎが行われるのだろうかと彼が戦々恐々としていると、ダンテがニヒルな笑みを浮かべながら口火を切った。

「坊や、諦めんのはまだ早いんじゃないか？」

「え、どういうことですか？」

意味深長なダンテの言葉が理解できず、ネギはどういうことかと学園長に視線を向ける。彼の説明を求めるような視線を受けて、学園長は自前の髭を扱いた。

「いやー、すまんかったのネギ君。実はの、遅刻組の採点をワシがやっとってのう。うっかりクラス全体と合計するのを忘れとったんじゃよ」

「えー！？」

しれっととんでもないことを告げた学園長に、ネギを含めた全員が呆れた声を出した。学園長の言う通りなら、八人分もの生徒の点数が加算されていなかったことになる。それでは平均点に大きく響くことは明らかだ。

それに対して咎める視線を木乃香が送ると、飄々とした様子を見せる学園長には落ち着かない様子が見て取れた。どうやら彼も自身のミスを自覚しているらしく、彼女の視線を受けて妙な汗を掻いている。

一方で、彼女達の顔には希望の色が浮かぶ。もしかしなくても、ネギが教師を続けられる可能性が浮上してきたのである。期待で胸が膨らむのも仕方ないと言える。

すると、学園長が咳払いをした後、数枚の書類を眺めてそれぞれの成績を発表していく。まき絵、古、楓と順番に成績を発表されると、結果は本人すら信じられないものであった。

木乃香、のどか、ハルナは成績優秀者なので良いとして、バカレンジャーの平均点は大幅に向上していた。楓、古、まき絵、夕映すら倍以上平均点が向上し、明日菜に限っては三倍以上も平均点が上がっていたのである。今まで一度たりとも取ったこともない点数に、彼女達の顔に喜色が浮かんだ。

そして、いよいよクラス順位発表になると、全員の顔に緊張が走る。これでもし２－Ａが最下位を脱出できなければ、今度こそネギは麻帆良にはいられないのだ。最下位から脱出していてくれと誰もが願っていた。

学園長が粛々と書類を読む。

「つまり、これを２－Ａに合計すると……平均点が８１．０となり、０．２の差で――――」

そこで学園長が一端言葉を切ると――――

「――――なんと、２－Ａがトップじゃ！！」

――――どこか弾んだ声で、２－Ａの一位を告げた。

「や……やったー！！」

全員が喝采を上げて飛び上がった。全身で喜びを表現し、次々とお互いにハイタッチを交わしている。

しかし、彼には課題合格の実感が湧かないようで、呆然としていた。それを察した学園長が、彼に対して労いの声をかける。

「最終課題では子供のネギ君が今後も先生としてやっていけるかを見たかったのじゃが、図書館島のトラップにもめげずによー頑張ったの。２－Ａを学園一位にしてしまうとはまったく驚きじゃわい」

フォフォフォ、と学園長は独特な笑い声を響かせる。彼の笑い方にネギは既視感を覚えた。

――あれ？この声……――

聞いたことのある声。学園長の笑い声と、図書館島のゴーレムのそれが同じに聞こえたのである。

それに、図書館島でのことを全て見てきたかのような言い草に、全て彼の仕組んだことなのではないか、とネギが疑惑の目を向ける。

彼の視線に気付いているのかいないのか、学園長は髭を扱きながら何事もなく話を続けた。

「合格じゃよネギ君。これからはさらに精進じゃな」

「あ……はいっ！」

学園長直々に合格を告げられ、ネギは反射的に返事をした。図書館島の件は学園長が仕組んでいたかもしれないが、今はそれよりも課題に合格したこと、そして一位を取ったことを明日菜達と喜びたい。

そう割り切ると、ネギは横に寄り添う明日菜に顔を向けた。すると、彼女も同じく何か言いたいことでもあったのか、お互いの眼と眼がぴったりと合う。

「アスナさん、僕……」

明日菜に声をかけたものの、ネギは次の言葉が出てこなかった。課題に協力してくれたことに感謝すればいいのか、引き止めてくれたことに感謝すればいいのか、はたまたこの件で迷惑をかけたことを謝罪すればいいのか。それらが頭の中でぐるぐる回っており、なかなか考えが纏まらない。

何も言い出せないでいると、彼の心の機微を捉えたのか、明日菜は苦笑しながら彼の頭をくしゃりと撫でた。そして、今交わすべきはこの言葉しかないとでも言うかのように口を開く。

「新学期からもよろしくね、ネギ」

顔を上気させ、どこか気恥ずかしい様子の明日菜がはにかんだ。

彼女の何気ない優しさを身に沁みて感じ、ネギの表情に明るさが戻る。言うべきなのは謝罪や感謝ではなく、ただ「これからよろしくお願いします」で良かったのだ。

「……！は、はい！よろしくお願いします！」

すると二人がお互いに笑う。すると、そこにバカレンジャー達が混ざり、すぐにお祭り騒ぎになる。彼女達が公共の場で、ネギを胴上げしようとしているのを外側から眺めながら、学園長は朗らかに笑う。

「フォフォフォ、これで一安心じゃわい」

一件落着とでも言うかのように終わらせようとする学園長に、隣でずっと黙っていたダンテが唐突に口を開いた。

「何言ってんだまったく。元はと言えばあんたが余計な真似したせいで話がややこしくなったんだろ？他人（ひと）の仕事を増やすのは勘弁してもらいたいもんだ」

学園長がこんな計画を考えなければ、自分に余計な仕事が回ってくることはなかったと非難するダンテに、学園長は言葉に詰まった。

事実、学園長の行動は空回りしていたと言えるだろう。ネギを課題に合格させるためとはいえ、バカレンジャーを孫ごと地底図書室に放り込むという計画を決行するが、それも肝心のネギが飛び入り参加したことで計画に狂いが生じ、担任が一時的にいなくなった２－Ａのために急遽ダンテに穴埋めをさせる始末。しかも、自分から八人の採点を申し出たにも関わらず、成績発表までに間に合わず、後から呑気にやって来て点数再計算という体たらくぶり。これでは不真面目の代名詞であるダンテにさえ小言を言われても仕方がない。

「手厳しいのー、ダンテ君は」

ふんっと溜め息を吐きながら、ダンテは胴上げされているネギを見た。

公共の場にも関わらず、いまだにバカレンジャー達による胴上げが終わる気配を見せない。それに対して彼は困り顔をしているが、どこか嬉しそうである。やはり、立派な魔法使いになるための課題をクリアできたことがとにかく嬉しいのだろう。

あいにく、ダンテには彼の気持ちが分からなかった。立派な魔法使いになる第一歩が課題に合格することなのは分かるが、大切なのは立派な魔法使いになることではなく、なってから何を成すかではないだろうかと思ったからだ。

彼が偉大な英雄である父の背中を追うために、立派な魔法使いを目指しているとは知らないダンテには、立派な魔法使いに拘（こだわ）る彼のことが理解し難（がた）かったのである。

再度彼女達を見ると、学園長が胴上げを止めさせている。さすが

に駅の改札口の前での胴上げは迷惑でしかないと思ったのだろう。

――……まあ良いか――

ネギが合格したおかげで、面倒な仕事が増えなくて済むから良いかと思考を切り替え、先に学園に戻るかとダンテは踵を返した。

――――その帰り道にて、桜子が見事に賭けを的中させていたことを思い出し、密かに悔しがったのは彼だけの秘密だ。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１３　成績発表（後書き）

知っている人は結構いらっしゃると思いますが、アメリカにおけるブービー賞は最下位に与えられる賞だとか。それが何故日本では最下位から二番目なのかというと、最初は日本でも最下位がブービー賞を与えられていたのですが、ブービー賞の賞品が優勝賞品並みに豪華であることが多く、それを狙う人が続出したからだとか。ですからアメリカでブービー賞と言っても最下位から二番目では通じません。最下位です。

最近まで知りませんでしたから少し賢くなった気がします。まあ本当にどうでもいい雑学ですが。

それではまた次回お会いしましょう。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１４　半人半魔（前書き）

皆様お久しぶりです。投稿が遅れて申し訳ありません。言い訳は後にして、早速最新話を読んでいただけたらと思います。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１４　半人半魔

１３／

「ここか……」

ネギが最終課題を達成した週の休日、エヴァに招待されたダンテがメモを片手に彼女の自宅へ訪れていた。メモには自宅までの道順が書き記されており、丁寧に手書きの地図まで添えられてあった。茶々丸が気を利かせて渡していたらしい。彼女の手書きの地図がなければ、約束の時間に遅刻するどころか、その日のうちに辿りつくことすらできなかっただろう。

彼の立っている場所は、周囲を木々に囲まれたログハウス風の一軒家の前だった。どうやらここにエヴァと茶々丸が住んでいるらしい。

彼がやおら玄関前のベルを鳴らすと、程なくして何時ぞやのメイド服を着込んだ茶々丸が顔を出した。

「お待ちしていました、ダンテ先生。マスターがお待ちです。どうぞ中へお入りください」

無表情のまま一礼すると、ダンテを家に招き入れた。こちらへ、と言って先導する茶々丸の後ろについて行くと、すぐにファンシー

なリビングが目に入ってきた。テーブルやソファなど、所狭しに様々な種類の人形が置かれている。彼女曰く、全てエヴァの創作なのだという。彼女の意外な手先の器用さに、ダンテは柄にもなく感心してしまった。

そうしてリビングを抜けた後、二人は地下へと続く階段を下りていく。その先で見たものは、無数に並ぶ人形達と、それらに囲まれるように置かれた台座だった。その上にはボトルが横倒しになって置かれており、中には二棟の円柱状の塔らしきものが見てとれた。

すると、彼の前を歩いていた茶々丸が、振り返って口を開いた。

「ここに立ってください」

茶々丸が手で示した場所は台座の前、床に描かれた不思議な文様の上であった。ダンテは立ち位置を指示する彼女に疑問を抱きながらも、おそらく必要なことなのだろうとその文様の上まで歩いていく。

「ここか？」

ダンテが指定された場所に立つと、茶々丸はその隣に並ぶようにして立った。これから何をするつもりなのかと彼女の動きを横目に見ていた彼は、足元の文様が仄かに光を放つに気が付かない。

そして次の瞬間、目の前の景色が歪み――――

――――そこは薄暗い地下ではなく青空が広がる古城の上に変貌していた。

これまでに体験したことがない出来事に、然ものダンテも絶句してしまった。

彼が驚くのも無理はないだろう。先ほどまで屋内にいたにもかかわらず、いきなり屋外、しかも麻帆良では有り得ないであろう場所に転送されたのだ。いくら魔法の力だと言っても、空間を移動すれば驚かないわけがなかった。

ただ、彼にはここがどこであるか予想はついていた。眼前には飾り気のない渡り橋。その先には円柱状の白亜の塔が見える。足元の床も円形であることから、おそらく足場も塔になっているのだろう。

この建造物に見覚えがある。先程見たミニチュアそのものだ。仕組みは分からないが、自分は魔法でミニチュアの世界に飛ばされてしまったのだろう。体を小さくされたのか、それとも地球のどこかに存在する塔にミニチュアを介して転移させられたか。どちらにしろ大がかりな魔法である。

そんなことをぼんやりと考えている彼の様子を知ってか知らずか、茶々丸が尋ねた。

「……驚かれましたか？」

「……まあな。こんなもん見せられたらな」

ダンテは肩を竦めた。魔法の便利さは近衛学園長の言語翻訳魔法で体験済みだったが、今感じている動揺はその比ではない。

「これは以前、マスターが作られた別荘です。暫く使われてなかったようなのですが、先生を招待すると決まった折に急遽引っ張り出しまして……ではこちらへ。マスターと桜咲さんがお待ちです」

そう言って塔と塔を繋ぐ橋へ進む茶々丸だが、ダンテは彼女の口から飛び出した名前を反応せざるを得なかった。

「何だ、刹那も来てるのか？」

「はい。マスターがお呼びしまして……」

エヴァはダンテだけでなく、刹那まで呼んでいたらしい。茶々丸が言うには、彼を別荘に招待すると決まった後すぐ、エヴァが彼女を招待することに決めたとのことだ。

お世辞にも二人の仲はあまり良いとは言えない。彼は刹那に何の本意もないが、彼女自身が関わりを絶っているのだ。その状態で二人を会わせるのはマイナスでしかない。

だが、エヴァはそれを承知で彼女を呼び出したのかもしれない、とダンテは思った。もしそうだとしたら、性格が悪いことこの上ないが。

そうして彼が茶々丸と一緒に階段を下りていって辿り着いた場所は、砂浜だった。白い砂浜が塔を中心に広がり、周囲は海に囲まれている。海は果てしなく広がっており、とてもミニチュアの中とは思えない。

興味深げに周囲を見渡していると視界に二つの小さな影が見え、彼は目を止めた。一人の少女はパラソルの下でポットに入った紅茶を飲んでおり、もう一人の少女は茶々丸とダンテに背を向け、その身におおよそ似つかわしくない大太刀――――夕凪を振り回している。言うまでもなく、その二人はエヴァと刹那だった。

「お、来たか」

エヴァが二人に気が付き声をかける。その声に刹那が素振りを止めて振り返り、彼を見て固まる。そしてすぐさまエヴァの方を向き、彼女に詰め寄る。

「っ！エヴァンジェリンさん！これは一体……！」

「何のことだ？私は相手を用意してやっただけだぞ」

刹那の抗議をエヴァは何食わぬ顔で否定する。だがその顔は、絶対に知っているにも関わらず、偶然を装っているようにしか見えなかった。

刹那が彼女の別荘に来たのは、彼女自身に修業に最適な場所があると聞いたからだ。ダンテという、今まで刹那が歩んできた人生を根底から覆すかのような存在に出会ったことによる精神的な揺らぎと、修業に集中できず実力が伸びずにいた彼女にとって、現実世界での一時間が別荘では一日に相当する修業場所を提供されるのは、

願ってもないことだった。

そして今日来てみれば、エヴァが修業相手を用意していると言ってきた。彼女にとってそれは寝耳に水の話だったが、相手がいればより自分の腕前が分かるとエヴァに言い包められ、その言葉に納得できるものもあってか了承してしまった。

しかし、その相手がダンテであれば話は別だ。彼とは既に手合わせを終えているし、そもそも別荘を使おうと思ったのも、修業に打ち込んで少しでも彼のことを忘れようと思ったからである。それが修業でも一緒では本末転倒ではないか。

「と、とにかく！私は帰らせてもらいます！」

そう言って踵を返し階段の方へ早足で歩いていく刹那の背中に、エヴァは非情な宣告を突きつけた。

「おや、言わなかったか？この場所は一日経たんと出られんのだぞ？」

ピタリと刹那の歩みが止まる。

「貴様が別荘に入ってまだ四時間しか経っていない。良かったな。あと半日はみっちり修業に打ち込めるぞ？」

「っ……」

エヴァの嫌味を籠めた言葉に、刹那は悔しそうに唇を噛みながら彼女を睨みつけた。睡眠時間を七時間と仮定したとしても、あと半日以上はダンテと共に修業をしなければならない。それを思うと、

刹那はこの空間にいるのが苦痛で仕方なかったのである。

すると、お互いに鋭い視線を交わす二人の間に、今までじっと黙っていた彼が横槍を入れてきた。

「おいおいお嬢ちゃん。刹那をあんまりイジメてやるなって」

しかし、急に割って入られたのが不愉快だったのか、エヴァは不満げな視線をダンテに向ける。

「さあ、何のことだ？……あと私はお嬢ちゃんじゃない。何度も言わせるな」

最後に付け足すように呼び方を変えろと言うエヴァ。ムキになって訂正を求めない辺り、以前よりは成長したと言えるだろう。否、もしかすると訂正するのも億劫になってきているのかもしれないが。

彼女の反応が薄かったせいか、彼は少し残念そうな顔をしたが、気を取り直して口を開いた。

「……オーケー。じゃあ――――キティと呼んだ方がいいか？」

「待て！何故ミドルネームで呼ぶ！？エヴァと呼べエヴァと！！」

「ハッ、イヤだね。お子様のお前には子猫（キティ）ちゃんがお似合いさ」

ダンテが皮肉に笑った。

しかし、彼は何もからかってエヴァのミドルネームを呼んでいたわけではない。彼にはエヴァと呼ぶことができない理由があった。

彼の母親の名前はエヴァと言う。エヴァの名前を呼べば、その度に母親のことを想起することになる。いくら物事を深く気にしない彼でも、母親の名前を呼ぶのは気が咎めたのである。

「――――で、刹那を呼んだのは何が目的で？まさか本当に手合わせするためだけに呼んだわけじゃないだろ？」

ダンテが探るような眼つきで見つめると、エヴァの表情が変わった。年相応の少女の顔から、冷酷な真祖の吸血鬼へと変貌していく。

「……ふん、こいつの態度がいい加減癪に障っていたからな。話を聞く良い機会だと思っただけだ。まあ、貴様の力を見たいというのも本当なんだがな」

ジト目でねめつけてくるエヴァが小さい体躯ながら周囲に妙な威圧感を与えている。だがダンテはその視線を意に介さずに、今度は刹那の方に振り返って声をかけた。

「刹那も災難だったな」

「えっ……いえ、そんなことは……」

そんなにダンテから声をかけられたのが意外だったのか、しどろもどろになりながら答える刹那。

「遠慮することないぜ。あのチビッ子に無理やり付き合わされたんだから、文句言っても罰は当たらない。だろ？」

誰がチビッ子か！とエヴァがダンテの後方で怒鳴り声を上げる。

ミドルネームとはいえ、ようやく名前を呼び始めたと思えば、舌の根も乾かぬ内にチビ呼ばわりされたのだ。これでは先程抑えた激情が漏れてしまうのも仕方がない。

おー怖い怖いとおどけた調子で肩を竦めた彼は、先日のようにギターケースの中から大剣リベリオンを抜く。それは、刹那と手合わせをするという意志に他ならない。

しかし、二人は非公式とはいえ一度剣を交わらせている。しかも、その時は彼との実力差に負けを認めたようなものだ。手合わせすることで彼の実力を見たいというエヴァの希望は、今さら叶うはずはない。ならばエヴァは何故ここで手合わせなどをさせる必要があるのか、彼女には分からなかった。

そんな彼女の心中を察したのか、エヴァは「ふん」、と息を吐き出しながら言い放つ。

「なに、貴様一人では敵わんことなど初めから分かっているさ。だからハンデをつけてやる。茶々丸！チャチャゼロ！」

エヴァに呼ばれて進み出たのは茶々丸と、エヴァの後ろからスッと現れた小柄な少女だった。茶々丸はいいとして、小柄な少女の方は刹那とダンテも見覚えがない。しかし二人はすぐに、彼女が茶々丸と同じく人間ではない存在だということに気が付いた。

身長は七十センチぐらいだろうか。茶々丸によく似た顔立ちに、翼の意匠が施されたケープ付きのワンピースを着ている。関節部分は球体でできており、ロボットと言うより球体関節人形に近い。何故か手には、自身よりも遥かに大きい鉈のようなものが握られていた。

チャチャゼロと呼ばれた少女はカチャカチャと音を立てながらダンテに近づくと、上を見上げながら喋り始めた。

「ヨォ、オマエガダンテカ。話ニハ聞イテルゼ」

「それは光栄だね。よろしくな、チャチャゼロ」

「オウ、ヨロシクナ。シッカシ、オマエモヨク御主人ヲカラカエルナ？」

「別にどうってことないさ。キティが怒ってもカワイらしいもんだ」

エヴァを知る者ならば誰も口にしないであろう発言。それはただ単にダンテが彼女を弄り倒そうと言っているわけではなく、本心からそう思っていることにチャチャゼロは気が付いた。

彼女は、自身のマスターであるエヴァが誇り高き悪であるということを自負しているし、事実その通りだった。何せ誰よりも長い間彼女を見てきたのは、他ならぬチャチャゼロ本人なのだから。

そんなエヴァを目の前にして物怖じしないどころか軽口を叩いてからかうような男は、片手の指で数えるほどしかいなかった。そんな変わり者にチャチャゼロが興味を抱くのは当然のことだったのである。

「ケケケケッ、面白イ奴ダ。気ニ入ッタゼ」

大柄の外国人と大鉈を担いだ球体関節人形という、傍から見れば

奇妙な組み合わせ。その二人が和気あいあいと話しているのを無視して、エヴァは話を続けた。

「こいつらを貸してやる。貴様ら三人でダンテと戦え」

エヴァは続けて、ルールの説明に入った。

ルールは簡単である。ダンテに一撃でも入れたとエヴァが判断すれば、刹那達の勝ち。ただし、コートに掠る程度では一撃と判断されないものとする。一方彼は、エヴァが致命打と判断した時のみを有効とし、三人を戦闘不能にすれば勝ち。ただし、武器をリベリオン一本のみとし、加えてそれによる直接攻撃は不可。徒手空拳でのみ攻撃を加えられるものとする。

つまりは、たとえ夕凪の切っ先が彼の服を切り裂いたとしても、それが彼の肌に届いていなければ一撃を入れたとは判断されない。また、彼もリベリオンで攻撃を防いだりフェイントをかけたりする分には構わないが、直接それで攻撃を加えることは許されず、徒手空拳による攻撃も頭部や胴体などの急所に入らなければ致命打とは判断されないということである。

圧倒的に三人に有利な条件。それでも、刹那には自分の勝利するイメージが一向に湧いてこなかった。この条件だけで勝てるのか、急ごしらえの三人で連携をとれるのか、全力を出しても勝てるのか、そんな考えが頭の中でぐるぐると回っている。

「……さん…刹那さん」

「!?」

突然耳元で聞こえた大きな声と同時に、肩に置かれた手。それに刹那は驚き、泡を食って振り返る。そこには、手を宙に浮かせたまま固まっている茶々丸の姿があった。

「どうかしましたか？何か考え事をされていたようですが……」

茶々丸はどこか困惑したような表情で刹那の顔色を窺う。その理由を聞いてみると、いくら呼んでも返事がないので、それを訝しんで肩を叩いたのだそうだ。

「す、すいません。大丈夫です」

「ケケケケッ、ソンナニ気ィ抜イテットヤラレチマウゼ？」

刹那がそう取り繕っていると、下方から忠告ととれる言葉をかけられたので、またもや驚いて下を向く。そこにはチャチャゼロが彼女を見上げており、不気味な声を上げて笑っていた。

「チャチャゼロ……さん」

「オゥ、今回ダケダロウガヨロシク頼ムゼ？セイゼイ足ヲ引ッ張ラナイヨウニナ」

皮肉たっぷりに言うチャチャゼロに、刹那は閉口した。彼女の言ったことは、当人である刹那にしてみても確かに正鵠を得ていたからだ。心ここにあらずの状態でダンテと戦っては、刹那もすぐに負けてしまうだろうし、何よりも手合わせに付き合ってくれる彼自身に失礼だ。そう結論づけた刹那は、目の前で準備運動とばかりにリベリオンを軽々と振り回す彼を見据えた。

あの夜は冷静さを欠いた精神状態で夕凪を振るったために、ろくに触れることさえできなかったが、刹那は今度こそという思いと共に夕凪の柄に手をかける。

「待て」

すると、審判役として両者の間に立ったエヴァが、意地悪い顔を浮かべながら刹那を見た。

「桜咲刹那。私は全力でやれと言ったはずだが？」

「？エヴァンジェリンさん、一体何を」

言っているのですか？と、刹那は質問で返した。彼女の心は既に臨戦態勢であり、一切の油断も慢心もない。

そこまで考えて、彼女は既視感を覚えた。以前にも、この問答をしたことがあると。

そう、あれは確か――――

エヴァンジェリンの口角が二ィと吊り上がる。

――――あの深夜の邂逅と――――

「ほう？ならば何故真の姿を見せん？」

――――同じではなかったか？――――

「！？そ、それは……」

刹那はエヴァの確信の籠もった言葉に狼狽えた。

「何だ、この私が気付いていないとでも思っていたのか？知っていたさ。貴様が烏族であることも、その忌まわしき生まれも。その黒髪は染めたのだろう？瞳は？カラーコンタクトか？」

何もかも知っていると彼女の眼は告げている。恐らく背中のことも知っているのだろう。刹那が言い逃れをしようものなら、すぐにそのことをバラすに違いなかった。

刹那は考える。ここで仮に彼女の言う通り正体を明かしてしまうと、茶々丸はともかくとしてもダンテに背中のあれを見せなければならない。しかし、あの異形の姿を見せてしまえば、彼は自分を拒絶するだろう。化け物を前にして平然としていられる人間はいるはずもなく、口では気にしないと言ってはいたが、きっと彼も大半の人間と同じ反応をするに違いない。

では口を閉ざして黙秘を貫くかと言えば、それも有り得ない。語らずに黙せば、彼女は間違いなく刹那の秘密を語るだろう。それを否定するにも、一度彼に烏族のハーフであることを語ってしまっているので、それを彼は信じるに違いない。それに、彼女に実力行使を出られたりすれば、強引に口を割らせることもできるだろう。それほど、闇の福音と自分には実力に大きな開きがある。

つまりは八方塞がりなのだ。どの選択をしようとも、彼に秘密がバレるのは避けられない。ならば自ら秘密を話した方がいいのだろうが、そう割り切って考えられるほど刹那は大人ではなかった。

幼き時より体験した拒絶されることへの恐れが、刹那に一歩を踏み出させるのを止まらせていた。

「おいおいキティ。いい加減始めないか？」

いよいよ進退窮まった刹那だったが、そこで思わぬ助け船が入った。なんと、三人と対峙してから今まで一言も口を開かなかったダンテが、退屈そうな表情で手合わせの開始を促したのだ。

「む……しかしだな」

エヴァがダンテに視線をやった。彼女の意地の悪い視線が外れて、

刹那はそこでようやく息を吐いた。肌がじっとりと汗で濡れている。自身が思っていた以上に切羽詰まっていたのか、まるでヘビに睨まれた蛙のごとき緊張を強いられていたらしい。

そうして刹那が心を落ち着かせている間にも、二人のやり取りが続いていく。

「誰だって知られたくないものの一つや二つあるだろ？そいつを根掘り葉掘り聞き出そうとするものじゃない」

「……では聞くが、貴様にもあるのか？知られたくない秘密とやらが」

「……まあね。当然、あるさ」

秘密がある。その言葉を聞いた途端、エヴァは新しい玩具を見つけたかのような笑みを浮かべた。

「ほう、ならその秘密とやらを話せ。なに、もし話してくれるのなら刹那には何も聞かんよ」

興味の対象が刹那からダンテに移り、エヴァは次に彼を苛めてやろうかと意地悪な条件を出した。これまで何度もからかわれてきた鬱憤を晴らす腹積もりらしい。話さなければ我が身可愛さに生徒を見捨てた薄情者として。話せばそれをネタに弄り倒してやろうと。

しかし、彼女の目論見はすぐさま崩れ去ることになる。

「いいぜ。話してやるよ」

「……何？」

ダンテの口から零れた言葉に、まさかそう返されるとは思わなかったエヴァは一瞬耳を疑う。それもそうだろう。秘密とは他人に知られてはならない自分だけの情報。現に刹那は自分の秘密を頑なまでに話そうとはしなかった。ならば、彼も同様に秘密を隠そうとするのが道理のはずだ。それを彼は容易く話すと言う。一体どういうつもりなのか。

――待て。どうせ出鱈目をでっち上げてその場をやり過ごすという魂胆だろう。ククク、甘いな。そんなことで私を騙し通せると思ったか。良いだろう。くだらない浅知恵で私の追及から逃れられると思うなよ――

実のところエヴァは、初顔合わせの時から彼がただの人間ではないことに気が付いていた。人間の知覚では気付かないかもしれないが、魔に属する彼女ならばその者が人間であるかそうでないかなど、独特の気配で分かってしまうのだ。その気配が彼から滲み出ていれば、自ずと答えは出てしまう。

――おそらく刹那と同じくハーフだろうな。何とのだか知らんが……ククク、さあ早く答えてみせろ。言い訳をしても無駄だ！貴様は横から口出しした時点でチェックメイトに嵌っていたんだよ！――

内心の喜びを顔に出さぬまま、エヴァはダンテを睥睨（へいげい）した。

彼は少し間を置いた後、口を開く。

「実は俺も刹那と同じでね。半分人間じゃないんだ」

「え……？」

「……は？」

前者の声は刹那が、後者の声はエヴァが発したものだった。刹那は、ダンテが自分と同じハーフであるという事実に驚き固まっている。エヴァは、自分の思惑とは違う方向に話が進んでいることに呆けていた。

「悪魔だった親父と、人間だった母さんから半分ずつ受け継いでる。ようは半人半魔ってやつさ」

彼は笑みを浮かべながら肩を竦める。

――先生が……私と同じ？では、あの言葉は――

刹那はダンテと喧嘩別れする形で終わったあの夜の出来事を思い出していた。烏族のハーフである自分を怖がらない理由を尋ねた時に、彼は何と言っていたか。

“――周りの奴らがどう思おうが関係ないだろ。俺は俺、お前はお前だ――”

あの言葉は、口先だけのものではなかった。ダンテも同じだったから、同じ生まれの自分を諭したのだ。彼の言葉は同じ苦しみを味わったことがあっての、真実の言葉だったのだ。

一方で、自分の思惑とは違う形になって悔しがっているはずのエヴァは、別のことに気を取られていた。

彼女は当初、彼も刹那と同じように自分の体に流れる血を疎ましく思っているに違いない、と思っていた。人間は自分とは違うものを否定する。何百年という時間を真祖の吸血鬼として生きてきたエヴァは、そのことを身に染みて知っていた。

――何だ、こいつは……何故こいつは――

しかし、自身の生まれを語るダンテの表情は刹那のような憂いに満ちた表情などではなかった。むしろ彼の表情は――――

――こんなにも堂々としているのか？――

――――まるでそれが誇りであるかのように、輝きに満ち溢れていた。

後ろ暗さなどない。半人半魔に生まれたことに一片の恨みもない。そんな表情を浮かべるダンテを見て、エヴァは内心で懐かしさを覚えると同時に嘲笑う。

――まあいい。どうせ今まで拒絶されたこともないのだろう。いずれ自身に流れる血を恨む時が来るだろうさ――

幼少時に禁忌の存在として差別を受けた刹那のような、酷い仕打ちを受けたことがないのだろう。だから自分の生まれに疑問を持たない。そう結論づけて、エヴァは思考を切り替えた。

しかし、彼女は知らなかった。ダンテが生まれに苦労しなかったことは、十数年前から一度もなかったということを。

「なるほど。悪魔とのハーフか……だがよく話す気になったものだ。私が学園側にバラすとは思わなかったのか？」

「いや、それはないだろ」

「？何故そう言い切れる？」

エヴァが訝しげに尋ねる。何故そんなことを断言できるのか、彼女には分からなかったのだ。

しかし、彼女を納得させる答えが返ってくることはなかった。

「勘」

ダンテの答えにエヴァは肩透かしを食らったかのように、小さくため息を吐く。

「……貴様が何も考えてないことは分かった」

「ヒドイな。傷ついちまったぜ」

皮肉を交えた会話を続ける二人。その中で、今まで口を一切開か

なかったチャチャゼロが横槍を入れた。

「ナァ……イイ加減始メネェカ？コレジャア、イツマデ経ッテモ始マラナイゼ」

突然かけられた言葉に、チャチャゼロを除く全員が視線を向ける。先程から考え込んで心が此処にあらずだった刹那も、剣呑な気配を察知して彼女を見た。

待ちきれないとでも言うかのように大鉈をチラつかせる姿を認めて、エヴァは彼女がもう辛抱し切れないということを察する。これでもエヴァが手ずから製作したのだから、彼女の性格は手に取るように分かる。これ以上待たせると開始の合図を待たずにダンテに飛びかかるのは目に見えていたので、エヴァは彼との会話を強引に打ち切った。

「……そうだな。では始めるとしよう。刹那、その姿で構わん。約束だからな」

「……ありがとうございます」

エヴァから今の姿で戦うことを許され、刹那は目に見えて分かるほど露骨にほっと息を吐いた。ダンテへのわだかまりも随分と和らいだが、まだ正体を見せることには抵抗があるのだ。

そんな彼女の心境などお見通しなのだろうが、エヴァはそこを追及することはせずに値踏みするかのような視線を彼に向けた。

「では、見せてもらうぞ。貴様の力をな」

両者が構える。刹那は夕凪の柄に手をやり、チャチャゼロは大鉈を振りかざし、茶々丸は徒手空拳の構えをとった。三人に対峙する形で、ダンテはごく自然体に構える。両者の準備が整ったところで、エヴァは右手をおもむろに上げた。

「よし……始め！」

そして、その腕を振り下ろしたと同時に。

――――両者は激突した――――

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１４　半人半魔（後書き）

最新話『半人半魔』、いかがだったでしょうか？

今話はダンテが刹那に正体をバラす話でした。正直もう少し仲違いする二人を書きたかったのですが、修学旅行の前に二人の仲良くさせたかったのでここでバラす運びとなりました。本作の時間的には、だいたい二カ月以上もの間冷戦状態が続いていたことになります。

ただ個人的に心残りなのは、二人の冷戦をあまり描写できなかったことです。和美との話で、ぶつかった刹那がダンテを露骨に避けていたぐらいしか書けませんでしたから。もっと日常でこれらを書くことができれば、読者により二人の冷戦状態を印象付けられたのですけど……

ですから読者の皆様には「あれ？もう仲直り？早いなぁ」と思われた方がいると思います。それは私の作者としての力不足です。もっと細かい描写ができるよう努力する所存ですので、これからもよろしくお願いいたします。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１５　登校地獄（前書き）

また投稿が遅れて申し訳ないです。全然筆が進まない……

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１５　登校地獄

１４／

四月とは思えないほど強い日差しの下で、ダンテは刹那の鍛錬の様子を眺めていた。彼女は夕凪をその動きを確かめるように様々な構えから振るっている。京都神鳴流の基本的な型なのだろう。慣れたものなのか、その動きに少しの乱れもない。夕凪を振るう彼女の姿は剣術の型を再現していると言うより、舞を舞っているかのようだった。

「何を見ている？」

横から涼やかな声をかけられて、ダンテはゆっくりと振り向いた。

「キティか。どうした？」

眠そうな感じを隠そうともしないダンテに、声をかけた主――――エヴァは小さく笑みを零した。

◇

砂浜にポツンと置かれたパラソルとテーブル。そこに向かい合う形で、二人は椅子に座っていた。テーブルの上には二人分のティーセットが置かれており、カップには芳しい薫りを漂わせた紅茶が注がれている。ダンテの問いに応えず、空いていた席に座ると同時にエヴァが頼んだものだ。

それを用意したのは、彼女の後ろに付き従う形で控えていた茶々丸だった。着替えてきたのか、先程のバトルドレスではなく見事な意匠が施されたメイド服に身を包んでいる。一方でチャチャゼロも砂浜に座り込みながら、リベリオンの刀身をウットリとした表情――――表情と言うよりは雰囲気と言うべきか――――で眺めていた。

「それで、どうだったんだ？」

「あ？」

先程のエヴァの問いは声をかける切っ掛けに過ぎなかったのだろう。唐突に違う話題を振られたダンテは、ぞんざいな対応で返した。主語も目的語もないのだから、何のこと言っているのか分からないに決まっている。

それでも予想はついた。刹那のことだろう。

「刹那のことだ。戦ってみてどうだった？」

予想通りのエヴァの問いに、ダンテは先程まで行われていた手合わせについて考える。

つい先程終わった手合わせは、彼の勝利に終わった。刹那ら三人は結局、彼に触れることすらできなかったのである。

最初に脱落したのは茶々丸だった。急造のチームにしては動きに乱れはなかったものの、あくまでそれは急造の割にというだけの話だ。彼ほどの実力を以ってすれば、チームワークの穴――――つまりは三人の中で最も戦闘経験が少ない彼女が狙われるのは必然だった。彼女がエヴァの従者としてあらゆる戦闘データ――――近代兵器の扱いから果ては格闘技まで――――をインストールした高性能ガイノイドだとしても、初起動から約二年しか経っていないのだから、戦闘経験は他の二人と比ぶべくもない。次々に繰り出される攻撃を易々と躱した彼は、すぐさま懐に飛び込んで彼女の額を指先で小突く。それをエヴァは一撃を入れたと判断した。

次にやられたのはチャチャゼロだ。彼女はエヴァと途方もない時間を戦ってきただけあって、動きに戸惑いがない。しかもその小さい体躯から繰り出される斬撃は彼にとって経験したことのない未知の領域。彼も下から無秩序に襲いかかる大鉈には手を焼かされたものだ。もっとも、十合も打ち合わせぬ内に対応されてしまい、茶々丸のように小突かれて終わったが。

そして最後は刹那が。茶々丸が脱落した時点で勝負の行方は決定していたようなものだったが、それでもよく凌いだものだ。その理由は一度剣を合わせたことによる経験と、それを生かして予めシュミレーションしていたからか。それでも彼と戦うには力が足りなかったのか、リベリオンで夕凪を弾き飛ばされ、無手になったところでデコピンを食らって勝負が着いてしまった。

そうして戦ってみた刹那の実力に対して感じたことを答えればいいのだろう。

「剣術を習ってるだけあって、剣捌きはしっかりしてるし、思い

切りも良い。あの年であれだけ戦えれば大したもんだ」

ダンテは率直な感想を述べた。多少太刀筋が正直過ぎるキライはあったものの、１５にも満たない少女があれだけ戦えるのならば十分と言えるだろう。セブン・ヘルズ相手でも十分に渡り合えるはずだ。ヘル・バンガードクラスの悪魔になると、少々力不足かもしれないが。

自分が彼女ぐらいの年齢だった時のことを思い出す。当時の自分はどれほどの力を持っていたのかと。あの時は生きることで精一杯で、自分の力がどの程度のものかなど、考えている暇もなかった。何せ悪魔達はこちらの都合も考えずに襲いかかってくるのだ。そいつらは一匹残らずぶちのめしたが、さすがにトイレ中やシャワー中に襲撃された時は焦ったものだ。ある時には女との情事の直後に襲われたこともある。その際も彼らには丁重にお帰りいただいたが、一夜にしてホラー映画もビックリの恐怖体験を味わった女とはそれきり会うことはなかった。

そこまで思い出し、彼は笑い出しそうになった。刹那の強さから、いつの間にか過去における自分の恥ずかしい思い出へと思考が逸れてしまっている。

これはいけないと頭の中から過去の思い出を消去すると、思考を本筋に切り替えた。先程の手合わせを思い出す。

エヴァにも言ったように、今の彼女は年齢にしては十分な実力を備えていると言える。しかし――――

「ただ」

「ん？」

そこで一端言葉を区切ると、エヴァは片目だけ開いて視線をダンテにやった。

「少し思い詰めすぎじゃないか？木乃香の護衛って話だが、このままだと潰れちまうぜ？」

「思い詰める……か。確かにそうだな。近衛木乃香を守るためなら自ら命を差し出すことも厭わない奴だ」

ダンテの的を射た指摘に、エヴァは頷くことで同意した。

彼が危惧しているのは、刹那の実力云々よりもその心構えにある。彼女は木乃香を守るために、遮二無二力を求めようとしている。彼女の想いは尊いものだが、それも行き過ぎればいずれ間違える。誰かを守るという目的のために手段としての力を求めていたはずが、求め過ぎたばかりにそれ自体が目的となってしまうだろう。

前例を目の前で見ていただけに、確信じみた予感が彼にはあった。

「近衛木乃香を喪うようなことがあれば、あれは間違いなく壊れるだろうな。後を追うか、廃人になるか……あるいはその恨み辛みを周囲に撒き散らすか。まあ、それもある意味刹那らしい最期と言えるが……」

そこまで面白おかしく口にして、ダンテの表情が変わっていることにエヴァは気が付いた。いつものシニカルな笑みは消え去り、能面のような顔を向けている。その視線には彼女に対する非難の色が含まれていた。

彼女はそれを意に介することはなかったが、どんな時でも余裕の笑みを崩さなかった彼が初めて見せる剣呑な表情に、酷く興味を惹かれた。

「どうした？」

「……冗談でもそんなこと言うのは止めてくれ。胸糞が悪くなる」

ダンテは吐き捨てるように言った。

「何だ、貴様もそれで失敗したクチか？」

エヴァが身を乗り出して訊いてきた。人の失敗談を訊き出そうとでもいうのだろうか。

しかし残念なことに、彼女の期待には応えられそうもなかった。彼女の物言いに不覚にも苦い顔を晒してしまったが、理由は自身の失敗からではない。

「生憎と俺じゃないぜ。力ばかり求めた挙句に道を踏み外した大馬鹿野郎を知ってるんでね。これでも心配なのさ」

いつもの軽い調子に戻って答えるダンテに、エヴァはつまらなそうにふんっと鼻を鳴らした。

「まあ良い。それよりも、本来の約束を果たすとしよう」

「あん？」

「忘れたか？何故生徒を襲っていたか理由を訊きに来たんだろうが」

言われて思い出す。そういえば、今回の訪問はそれが目的で、手合わせ自体はエヴァが勝手に決めたことだった。刹那のことを心配するあまり、ダンテは目的をすっかり忘れていたようだ。

「あー……そういやそうだったな」

「まったく、本来の目的を忘れるとは何事か。シャンとしろシャンと」

相変わらず戦闘以外では気の抜けているダンテの反応に、調子が狂うとエヴァは毒づいた。

実のところ、そうやって忘れていた方が計画はバレないので彼女にとって都合が良いはずなのだが、その辺のことまで頭が回っていないらしい。調子が狂うと言っていたが、その言葉はまさしく正鵠を得ていたと言える。

「分かったよ。じゃあ訊くが、何で半年前から生徒を襲ってたんだ？」

単刀直入に尋ねる。その質問は、ダンテが最も訊きたいと思っていたことだ。

吸血鬼が血を吸うのは仕方ない。そうしなければ生きていられないからだ。その行為を糾弾する資格は自分にはない。それを黙って見過ごすのかと問われれば別問題だが。

しかし、ここ十五年もの間に麻帆良学園都市で桜通りの吸血鬼などという噂が一度として話題に上らなかったことが、彼の疑念に拍車をかけた。十五年間、学園都市の魔法使い達の目を欺きながら吸血行為を続けていた彼女が、半年前から急にその存在を気取られ始めるということが有り得るだろうか？否、そんなことが有り得るはずがない。半年前に噂になるのならば、それ以前にも噂にならない方がおかしいからだ。ということは、彼女が吸血行為を始めたのは半年前からで、それ以前は血を吸わずにいたことになる。

真祖の吸血鬼の生態など知るはずもないが、もしかすると一般に聞く吸血鬼のように、血を必ずしも必要としない種なのかもしれない。実際彼女は太陽の下でも自由に活動できるのだから。

けれども、そうなるとやはり吸血行為を始めた理由が気になってしまう。已むに已まれぬ事情があれば止めはしないが、もしそうでないのなら彼はそれを止めるだろう。

答えを待つ彼の視線を真正面から受け止めて、彼女は他言無用を条件に口を開いた。

「私がある魔法によって力を封印されているのは聞いてるな？」

「ああ」

確認を取るように言うエヴァに、ダンテは肯定とともに小さく頷いた。そのことは近衛学園長から聞いている。ナギ・スプリングフィールドという魔法使いに敗れた際に力を殺ぐ目的でかけられたとか。

「実は最近になって、私を束縛する魔法は一つではないことが判

明したのだ」

語られたのは、伝えられていた話と違う内容だった。

「一つは登校地獄（インフェルヌス・スティクス）」

「登校地獄（インフェルヌス・スティクス）？」

聞き覚えのない魔法に、ダンテはオウム返しのように聞き返した。

その反応を予想していたのか、エヴァはその魔法の効力を説明し始めた。

「本来は不登校の生徒を登校させるために編み出されたふざけた魔法だよ。そいつのせいで私は、十五年もの間、青臭いガキどもと、中学校に、通わされ続けたんだよ……！」

話している内に当時に受けた屈辱を思い出したのか、エヴァの声に怒りが混じり始める。手に持っていたカップがぶるぶる震え、そのままでは把手を破壊しかねないほどの力が指に込められている。

「マスター、落ち着いてください」

それを察し、すかさず傍に控えていた茶々丸が声で制した。今に爆発しそうなところで彼女に諭され、エヴァはじきに怒りを収める。あのまま放っておけば、間違いなくカップの一つがオシャカになっていただろう。

カップをソーサーに置いた彼女が話を続ける。

「――――すまんな。話を戻すが、登校地獄は対象者を学校に通わせる魔法だ。だが、それには魔力を封じる効果はなかったのだ」

「あ？だが爺さんは力を封じてると……」

「それでもう一つの魔法だよ。さっきも言ったろう。私を束縛する魔法は二つあると。それが私の魔力を封じていたのだ」

当初、エヴァは自身を縛り付ける魔法は登校地獄だけだと思っていた。しかし蓋を開けてみれば、彼女を麻帆良学園都市に縛る魔法は二つあり、力そのものを封じるそれと、学園都市に縛り付けるそれと分けられていたのである。

つまり、近衛学園長は登校地獄によって彼女の魔力を封じていると思い込ませていたということになる。

あのくそじじいめ、と彼女が呟くと、ダンテは得心したように右手で自分の顎を撫ぜた。

「なるほどね。その封印とやらを解く算段がついたから血を集めてた、ってとこか？」

「そうだ」

確信を持った質問をエヴァは短く肯定することで答えた。

「差し支えなければその方法を教えてくれないか？」

続けてダンテは問う。封印が解けることはエヴァにとって良いことかもしれないが、その方法が多くの人を不幸にするのなら、いか

な彼でも見過ごすわけにはいかない。

彼女を気に入っているダンテとしては、彼女と戦うなどということは遠慮願いたかったのである。

しかし、自分の予想が正しければ、おそらく彼女は答えないだろう。その理由も彼には見当がついていた。

「残念だが、私はまだ貴様を完全に信用したわけじゃない。約束を果たした以上、これ以上話すことは何もない」

封印を解く方法を問われても、エヴァには答える気はなかった。自身にかけられた呪いを解く千載一遇のチャンスに、不確定要素を介入させるわけにはいかない。計画を知られたのは痛いが、他言無用を約束させた以上、計画の肝を知られなければいくらでもやり込めることができると見越していた。

「ツレないね。同じ秘密を共有する仲じゃないか」

大仰に肩を竦める。その答えを予想していただけ、ダンテに落胆の色はなかった。だが、その余裕が癇に障ったようで、エヴァの眼が鋭くなる。

彼女は考えた。出会ってからそう時間は経っていないが、彼がべらべらと他人の秘密を喋るような奴ではないぐらいは信用している。人々から真祖の吸血鬼と恐れられてきた自分に対して、それを知ってなお全く物怖じすることなく対等に接してきた、数少ない男だからだ。

しかし、あのことだけは教えてはいけない。教えてしまえば、彼

の性格上計画を止めに入ることは想像に難くない。加えて、それに同意する気が自分にない以上、二人の決裂は決定的になるに違いなかった。

無言を貫く彼女を見て、埒が明かないと感じたのだろう。人を食ったような表情を崩さずに、軽く息を吐いた。

「――――まぁいいさ。それに、大体の予想はついてる」

しかし、ダンテの発した言葉に、エヴァは顔には出さずとも内心ひどく動揺した。

彼の言葉をそのまま鵜呑みにするのなら、解呪の方法――――即ち、ネギ・スプリングフィールドの血を用いて呪いを解くこと――――を知っていることになる。

しかしそれは有り得ない。登校地獄は不登校の生徒を強制的に登校させるという限定的な魔法のため、魔法使いの間でも知る人は少ない。その解呪法はさらに認知度が低く、魔法先生の中でも一部の者しか知らないという珍しい魔法なのだ。それを、魔法関係者でもない彼が知っているはずがない。

「ほう、なら答えてみろ。この私が直々に点数をつけてやる」

だが、ダンテの確信じみた答えには非常に興味がある。もし見当違いの答えを言えば、彼の推測の穴を指摘して酷評してやればいい。即座に思考を終わらせたエヴァは、闇の福音に相応しい笑みを浮かべて彼をねめつける。

絶対に当たるわけがない。そう高を括っていた彼女に向かって、

彼は皮肉を込めた視線を送る。

そして――――

「そうだな。大方、ネギの坊やを、それも血を使って呪いを解くつもりなんじゃないのか？」

「！？」

――――今度こそ開いた口が塞がらなかった。

「何故……」

そう訊きたくなるエヴァの気持ちは分からなくもない。闇の福音すら知らなかった門外漢に解呪法を容易く答えられるとは思ってもみなかったのだ。

「なに、そんなに難しいことじゃない。お前はナギ・スプリングフィールドに捕まってここにいるんだろ？そして我らが２－Ａの担任はネギ・スプリングフィールド。これでピンと来ない方がおかしい」

しかし、エヴァの発した言葉を違う意味で捉えたのだろう。解呪法ではなく、ネギとナギの関係性について訊きもしないのに答えてくれた。確かに、そこに気が付いたのも大した洞察力だとは思うが。

「そこじゃない。何故血を使うと思った？」

知りたいのは、何故解呪法を知ることができたかだ。少し察しの良い魔法使いならば、魔術書などの資料を漁って登校地獄の解呪法に行き当たるのは有り得ない話ではない。しかしダンテの性格上、自ら資料に目を通すなんてことはしないだろうし、何度も言うように彼が登校地獄について知ったのはついさっき。どう考えても知りようがないのである。

疑わしげに彼を睨みつけるエヴァを、茶々丸とチャチャゼロも静かに見つめていた。

「俺も親父のせいで色々と苦労したんでね。実体験ってやつさ」

やれやれと肩を竦める。そう言うダンテの言葉には実感が籠もっていた。

何せ、かつて偉大な父スパーダが封じた魔界への門を再び開こうとした兄を止めるために、『恐怖を生み出す土台（テメンニグル）』で悪魔達と血を血で洗う殺し合いをした男である。封印を解くためにスパーダの血族と巫女の血が必要だったこともあり、血が封印を解く鍵になることは比較的受け入れやすかったのである。

「それで？点数をつけてくれないか。キティ先生？」

癇に障る表情を浮かべるダンテに、エヴァは深い溜め息を吐いた。

「……まさかな。貴様に全て言い当てられるなど思ってもみなかったぞ」

ようやく観念したとでも言うように、その解呪の方法とやらを話し始めた。

「確かに貴様の言う通りだ。私は登校地獄（インフェルヌス・スティクス）の呪いを解くために、奴の血を頂く……たとえ奴を殺してでもな」

そして語り始めたのは、ネギの父であるナギ・スプリングフィールドとの因縁だった。

彼に敗れて登校地獄をかけられ、麻帆良学園都市に連れて来られたこと。それから十五年間、中学生としての生活を強いられてきたことなどを。

最初はこんな生活も悪くはないかと思っていた。自分が卒業する頃には戻って来て呪いを解くと彼も言っていたし、正義の魔法使いに狙われ続ける人生にも飽き飽きしていたこともあってか、息抜きぐらいにはなるかと。

しかし、そんな思いも最初の三年を過ぎると吹き飛んだ。余程のことがない限りクラスメイトは卒業すれば高校へ上がるが、彼女は違う。登校地獄を解呪しない限り、彼女は永遠に学校に通い続けなければならないのだ。彼も約束の時期に戻って来ることはなく、再び一年生からやり直すことになった。

それに加えて彼女を打ちのめしたのは、三年間同じ教室で勉学を共にしたクラスメイトから自分が完全に忘れ去られていたことであ

った。当然だ。もし自分のクラスメイトが同じ中学で生徒をやっていれば、不自然極まりない。それを防ぐために、元クラスメイトには彼女をクラスメイトとして認識できないように魔法がかけてあったらしい。街で偶然出会った元クラスメイトに無視されるのというのは、一度繋がりを作っていただけに辛いものであった。

その状態が十五年も続けば、そこから抜け出そうとすることが何故悪いというのか。この忌まわしき呪いが解けるのならば、彼女は信条である『女子供は殺さない』を破ることも辞さないであろう。

「まさか止めるとでも言うまいな？」

獰猛な視線を向けるエヴァにも怯むこともなく、ダンテは肩を竦めた。

「いいや、別に止めやしないさ。親の不始末の責任を子供に取らせるお前の気持ちも分からなくもない。ただな――――」

てっきり猛反対すると思っていたダンテが別段止めに入る様子もなかったので、エヴァは肩透かしを食らったかのような顔をする。それを眺めながら、彼はだが、と続けた。

「坊やを殺して呪いを解いたとして、その後はどうするんだ？また魔法使いに追われる羽目になるぜ？」

「……」

確かにダンテの言うことも間違いではない。麻帆良に縛られたデメリットは無視できないほど大きいが、賞金首として魔法使いに狙われなくなったというメリットは確かに存在する。だが、ここで英

雄の息子たるネギ・スプリングフィールドを殺してしまえば、今度こそ終わりのない戦いに身を委ねることになる。それこそ、自分が滅せられるまで。

「やるんなら必要な分の血だけ頂いて呪いを解く。それでいいじゃねぇか。余計な波風をわざわざ立てることもない。俺もあんたとやり合うのは遠慮願いたいんでね」

最後の発言は真実であろう。ダンテはエヴァを気に入っている。彼にとって悪魔も吸血鬼も同じく人に仇なす存在だが、彼女はどこか人間臭くて憎めない。何よりもからかい甲斐があるのだ。

そんな彼女が道を外れようとしているのを、黙って見ていることなど彼に出来るはずもなかった。

しかし、彼は少し勘違いをしている。ネギを殺そうが殺すまいが、魔法使い達が彼女に取る行動は変わりはしない。彼の父、ナギ・スプリングフィールドは大戦を終結させた英雄として、魔法使いの間では絶大な人気と影響力を持っている。その血縁、しかも直系の息子であるネギに手を出せば、その瞬間に魔法使いの全員が敵になると言っていい。確実に弁解の余地もなく滅せられるだろう。生死の如何など問題ではないのだ。

そのことを理解しているからこそ、エヴァはダンテの提案を固辞した。

「――残念だが、それは無理だな。私は私の運命（みち）を変えることはできない」

エヴァの頑なな態度に、今度こそ盛大に溜め息を吐いた。何を言

っても無駄だと感じたのだろう。

「……そうかい。残念だ」

「あと半日以上出られないが、時が来たら即刻出ていけ。貴様と私は――――敵同士なのだから」

そう言うが早いか、エヴァは席を立って城の方へ歩いて行ってしまった。

残された茶々丸は暫く固まっていた。エヴァの従者ならば彼女について行くのが当然だが、客人であるダンテを放っていくのも礼を失する行為である。

少々困った顔で悩んでいると、その様子を眺めていた彼は口を開いた。

「俺のことは良いから行きな。お子さまのお世話は茶々丸の役目だろ？」

片目を開いた状態で視線を向けるダンテの表情には、不快な色は見られない。それどころか愉快そうに口角を吊り上げている。

茶々丸はガイノイドながらそこに彼の気遣いを感じ、静かに頭を下げると小走りでエヴァの後について行った。

それを後ろで眺めていたチャチャゼロは、カタカタと音を鳴らすと彼の方を振り向く。

「ケケケケ、ヤッパリオマエハ面白イヤツダゼ。御主人ニ説教カ

ヨ」

「別にそんなわけじゃないさ。お子さまを叱ってやるのは大人の役目だろ？」

「オマエヨリ遥カニ年食ッテルンダケドナ」

そう言うと、二人は刹那に聞こえるぐらいの大声で笑い合った。

◇

エヴァの別荘を二人が出た時、外は夕日に照らされて赤く染まっていた。

結局、あれ以降彼女が二人の前に姿を現すことはなかった。食事もそれぞれの客室に直接運ばれてとったので、誰にも会うことなく別荘を出てしまっていた。

別荘から出て来たのはダンテと刹那、それに二人を見送るために一緒に出て来た茶々丸のみ。エヴァは別荘に残った。チャチャゼロも現在では別荘以外の場所で活動できないので残ったらしい。

見送りの最後まで茶々丸は済まなそうな顔を崩さなかったが、彼は気にしなかった。お子さまのやることにいちいちがなり立てるほど彼は子供ではない。気にすることはないと言うと、刹那と共にエヴァの自宅を後にした。

現在、二人は学生寮に歩を進めている。二人の間には会話はなく、傍から見れば先日の夜の再現である。けれども、一つだけ違うところを挙げるとすれば、二人の間を流れる雰囲気がとても穏やかであることだろう。彼はともかくとして、蟠(わだかま)りが消えたおかげか彼女の態度は随分と軟化していた。鍛錬の後に彼女が頭を下げた時も、彼は気にするなとすぐに許してくれたこともあり、彼に対する態度は好転したと言えるだろう。

しかし、許されたからと言ってすぐに接し方が変わるというわけではない。彼女の生真面目な性格はこういう時には厄介だ。自分がかつて行ったことを気に病み過ぎて、一歩を踏み出すことができない。これが2－Aの能天気なクラスメイトならば、昔のことを忘れてすぐに打ち解けることが出来るだろう。彼女の欠点の一つだ。

その様子が傍から見て分かるのか、無言で歩いていた彼は顔を前に向けながら話しかける。

「なあ――――」

「は、はい!?何でしょうか?」

突然声をかけられて驚いたのか、最初の返事が裏返ってしまったようだ。刹那はそのことに赤面しつつも、何の用かと訊き返してきた。

その反応に笑いを堪えながら、ダンテは口を開く。

「刹那は木乃香の護衛だったよな?」

「はい」

確認のために尋ねると、刹那は首肯した後に護衛着任の経緯を語り始める。

彼女が言うには、近衛木乃香は近衛学園長の孫であると同時に、関西呪術協会の長、近衛詠春の一人娘なのだという。しかも才能に愛されたのか、体内に宿す魔力は極東一。刹那が長から聞いた話では、かのサウザンド・マスターを超えるほどの魔力を有しているらしい。

しかし天稟の力を持つが故に、その力を悪用しようとする輩が後を絶たないという。特に関西呪術協会は、仲違いする関東魔法協会の本拠地、つまりは麻帆良学園都市に長を継ぐであろう彼女を送ったことが余程気に入らないようで、隙あらば掻っ攫おうとちょっかいをかけてくる。大方、彼女を攫うことで東の無能を証明し、あわよくば西に連れ戻そうとしているのだろう、とのこと。

彼女を攫うことが出来れば、後で犯人から取り戻したと言えば良いし、仮に失敗に終わったとしても問題はない。実行犯には下っ端を使っているので、たとえ捕縛されて東に事の次第を追及されたとしても、部下の暴走でカタをつけるという寸法だ。

そんな輩から彼女を守るために、刹那は護衛を買って出たのだという。

彼女の説明に成程と納得するダンテ。確かに彼の見立てでは、木乃香の魔力は飛び抜けて高く、極東一もあながち誇大表現ではないと思った。だがそれにしては、彼女が魔法関係者であるという話は聞いたことがない。近衛学園長からも、彼女が魔法を知らない一般

人であることを伝えられてはいたが、何故彼女には魔法をひた隠しにするのか、当時は疑問に思ったものだ。そのことを尋ねると、刹那はすぐに理由を答えてくれた。

親の方針で、彼女には魔法を教えずに一般人として生活することを望んでいるらしい。親の立場からすれば、魔法という危険が付き纏う領域に、娘が足を踏み入れることに抵抗があるのだろう。それは間違いではない。

しかし――――

「事情は分かった。でもな、だったら何で傍にいてやらないんだ？」

「っ！」

納得いかないのは、刹那の距離の置きようだ。護衛の立場にありながら、その護衛対象から離れているなど普通は有り得ない。万が一のことがあったらどうするつもりなのか。

彼が思うに、その理由は外的要因よりも彼女自身の内的要因なのだろう。木乃香の近くで睨みを利かせて済めば良いが、もし外敵が手段を選ばずに襲いかかって来た時、彼女に魔法が知られてしまったら。それ以上に、自分が烏族のハーフであることがバレて拒絶されてしまったら。

二人の関係など知る由もないが、刹那が力を求める理由であることからも、ただの護衛とその対象ではないということが分かる。木乃香に知られ、拒絶されることが何よりも恐ろしいのだろう。

「お前の気持ちも分からなくはないさ。大事な者だからこそ遠ざける。それも選択肢の一つさ」

しかし、敢えてダンテはその点を指摘しなかった。そんなことをしても、刹那が意固地になるのは目に見えていたからだ。

仮に、この場で接し方を改めるように言ったとしても、彼女がはいそうですねと接し方を変えるとはとても思えない。

先日の物別れを経験していただけに、彼は不用意な一言は自重していた。

故に、彼は知られる恐怖よりも喪う恐怖を自覚させることにした。異形であることを知られたとしても、相手が受け入れたり自身の行い次第で認めてくれる可能性はあるが、喪ってからではどうにもならない。後悔は先に立たないのだ。

それを知れば彼女も木乃香への接し方を変えようとするだろう――と、彼がそこまで深く考えていたわけもなく、ただ単に刹那の煮え切らない接し方にもどかしさを感じた彼が、自身の経験から諭そうとしただけである。

「だが木乃香のように生まれ持った才能がある奴ってのはな、遠ざけようが遠ざけまいが、そいつの意思に関わらず厄介事が舞い込んじまうもんなんだ」

ダンテの苦々しさが籠もった言葉に、刹那はそれが経験から出た言葉だとすぐに気が付く。

「……それは経験ですか？」

確信を持った声質で尋ねると、ダンテは素っ気なくまあな、と答えた。

よくよく考えれば、彼は特殊な生まれ故に悪魔絡みの事件が周囲で絶えなかった。仕事上それらを歓迎すべきことではあったが、父の尻拭いをするために性懲りもなく襲いかかって来る悪魔を相手しなければならない煩わしさは、彼も辟易するものであった。

彼は話を続ける。

「だから木乃香にはお前が付いてやらなきゃならないんだ。あいつを守りたいんだろ？」

「と、当然です！」

刹那は即座に答えた。たとえ木乃香に自分の身を偽っていても、この想いだけに偽りはない。

「だったら傍にいてやりな。まぁ、いきなりは無理かもしれないけどな」

強制はしなかった。何度も言うように、刹那の性格を考えればすぐに打ち解けるのはどだい無理な話だ。ここは彼女のペースに任せるべきだろう。

「……分かりました。すぐには無理かもしれませんが、出来る限り頑張ってみます。ですから、それまで……待っていただけますか？」

不意に立ち止まると、刹那は上目遣いでオドオドしながら尋ねた。その今までに見せたこともない弱気な態度に苦笑を浮かべるも、ダンテは止めた足を再び進め始めた。

「まあ良いんじゃないか？お前のペースでやれば良い。無茶を言ってるのは俺の方だしな」

どこか投げやりな、素っ気ない態度。刹那は予想外の反応に少し呆気に取られたものの、すぐにダンテの大きな背中を追った。そして彼の傍に駆け寄りながら、彼女は考えた。彼は一体、どんな人生を送って来たのかと。

初めて出会った自分と同じ境遇の人。自分より長く生きていることから、自分以上に生まれに苦しんできたはずだ。それをどうやって乗り越えてきたのか、非常に興味があった。

しかし、彼女はそれをいきなり尋ねたりはしなかった。いや、できなかった。自身の過去が色々と複雑であるが故に、他人の過去をあれこれ詮索するほど彼女は無神経ではなかったのだ。

「あ、着きましたね」

気が付けば、二人は女子寮の前に着いてしまった。幸いにも周囲には誰もいないらしく、二人の組み合わせを訝る者はいない。もし和美がこの現場を目撃していたならば、明日を待たずにクラス中に、明日になれば全校中に知れ渡る羽目になっていただろう。

少し二人を沈黙が包んだが、その空気の中で先んじて動いたのは刹那だった。エントランスまで小走りで駆けていき、振り返ってダンテに向けて頭を下げたのである。

「今日は本当にありがとうございました。先生のお話はとても参考になりました。明日から改めてよろしくお願いします」

そして、ダンテの返事を待たずに刹那は女子寮に入っていってしまった。

一人残された彼は、気難しい顔をしたまま暗闇に染まりつつある茜空を仰いだ。

――そんなに大したこと言ったつもりはないんだけどな――

それはダンテの本心だった。別に彼は有り難い説法を語ったわけではなく、ただ自身の経験を刹那に聞かせただけである。それで彼女が救われたのならば彼としても問題ないのだろうが――――

――俺はこんなにお節介だったか？――

そう。確かに数年前のダンテならば、思い悩む刹那に対して静観の構えを見せていたはずである。おそらくレディが今の彼を見れば、彼女への態度をらしくない、と言うであろうことは想像に難くない。

彼の母親のような存在だったニール・ゴールドスタインには小言を事あるごとに言われて辟易させられたものだが、このザマでは彼女を笑うことなどとてもできそうになかった。

――まったく。婆さんを笑えないな、俺も――

ダンテは右手で頭を掻き毟った。まさか彼も二十を少し過ぎたばかりの年齢で、他人に講釈する羽目になるとは思ってもみなかった

のだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8297u/

Devil May Cry ～伝説の魔剣士と英雄の息子～

2011年11月5日07時28分発行